

創刊のことば

こころの未来研究センターは、2007年4月の設立から1年半を経た2008年11月、鴨川にかかる荒神橋のたもとに新築された京都大学稲盛財団記念館に研究の場を移すことになりました。センターのこの新しい門出を記念して、定期刊行物『こころの未来』を創刊いたします。

こころとからだ、こころときずな、こころと生き方。この3つの研究領域と、それらをつなぐ融合領域を探求のフィールドとして、センターに集う研究者は、日々多様な研究プロジェクトに取り組んでいます。この冊子には、その研究活動から生みだされた成果報告や研究論文、こころをめぐる研究エッセイ、対談など、さまざまな読みものが掲載されます。この冊子が今後未永く、こころの未来研究センターとこころに関心をもつ多くの方々をつなぐメディアとして育ってゆくことを期待しつつ、創刊のことばといたします。

こころの未来研究センター長 吉川左紀子

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2009 vol.2

目次

創刊のことば	吉川左紀子
01 巻頭言 「情報」のこころ	五木寛之
02 対談 こころの学問は「務本の学」	松本紘+吉川左紀子
08 研究プロジェクト 発達障害の認知・感情特性と療育的関わり	久保(川合)南海子
10 研究プロジェクト 共感的対話の相互作用性 ——カウンセリング対話から「対話のなぞ」に迫る	吉川左紀子
12 研究プロジェクト こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究	鎌田東二
14 研究プロジェクト Webによるこころの研究ニュースの発信	平石界
16 論考 こころの進化と文明の発達	長谷川眞理子
22 論考 現代キーワードとしての「共生」	湯本貴和
26 論考 「依存症:溺れるこころ」を探る	松岡俊行
30 座談会 こころというブラック・ボックス	長尾真+吉川左紀子+船橋新太郎
44 論考 ロシア文化におけるこころの概念——言語文化学的分析	S.E.・ヤーチン+S.Yu. マルコワ
46 2008年度 1年の記録	
48 2008年度 仕事一覧	



「情報」のころ



五木寛之



HIROYUKI
ITSUKI

情報とはなにか。最近しきりにそのことを考える。

斎藤茂吉の『万葉秀歌』（岩波新書）のなかに、有名な大伴家持の歌がでてくる。

「うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独しおもへば」

あまりにも人口に膾炙した人気ナンバーなので、引用するのちょっと気が引けるが、この歌のなかの「ころ」という字に「情」を当ててあるところがおもしろい。

万葉の歌のなかでは、「情」を「ころ」とする例がいくつもある。

「そうか、情は古代日本人のころなのか」

と、納得すると、急に情報という字がちがった感じで見えてきた。

情がころであるのならば、情報というのは、ころをコミュニケーションすることだろう。

私たちはふつう情報という言葉、乾いたデータとしてとりあつかうことが多い。資料とか、統計とか、数字とか、そんな世界に情はそぐわないのである。

しかし、情報をころのやりとりと考えると、情報社会などという未来も悪くないような気分にな

ってくる。

この、気分とか、情とか、感じ、などという湿った気配の世界は、戦後ずっと一貫して知性の敵、科学の対立物のようになつかわれてきた。

抒情、情感、感傷などを追放せよ、というのが1960年代の私たち学生の命題だったのである。濡れたもの、湿ったもの世界からニルアドミラリをめざす私たち若者にとって、重工業地帯の光景をうたう小野十三郎の詩は乾きの聖典のように思われた。

しかし、実際に小野十三郎が愛誦してやまなかったのが啄木の歌、なかんずく「やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに」であったと死後に知って、慥然とせざるをえなかった。

私たちは誤読していたのである。彼は抒情を否定したのではなく、古き抒情を打ち倒し、新しき抒情をつくりだせ、と言っていたのではなかったか。

情におぼれることと、情をみつめることとはちがう。慈悲の慈は知であり、悲は情である。「情」は「ころ」であると覚悟したうえで、あらためて「情報」の重さを考えたいと思うのだ。

対談

ころの学問は「^{むほん}務本の学」

京都大学総長 松本 紘 + ころの未来研究センター長 吉川左紀子

「学問とは真実をめぐる人間関係である」と考える松本総長と、ころの成熟やころと学問の関係などについてお話ししました。絵本を写して読ませてくれたお母様や大学人のイメージを変えた恩師の話など、ころは人間関係の中で成熟していくことを改めて感じました。



松本 紘(まつもと・ひろし)



吉川左紀子(よしかわ・さきこ)

吉川 ころの未来研究センターは、2009年3月で設立後2年目になり、次の年度で1つの節目を迎えます。センターができてから、当初予想していなかったようなところからいろいろな依頼や問い合わせがくるようになりました。

設立後の間もないころ、京都新聞にセンターの紹介を書いたのですが、大事な特徴は「つなぐこと」と書いた記事を読んで、近畿農政局の方がたずねて来られたんです。最初、農政担当の方がどうしてころに関心をもたれるのかと驚いたんですが、そのときに話されたのは、普及指導員という仕事のことでした。普及指導員はもともとは農業改良普及員・専門技術員として、1948年に制度ができてからずっと、農家と行政、農家と農家、あるいは農家と農業開発に携わっている人といったように、いろんな立場の人同士のところをつなぐ仕事をしてきた。でも、2004年に農業改良普及員と専門技術員が統合されたというようなこともあって、自分たちの仕事の価値が分かりにくくなってつらい立場にあるというようなお話でした。それで、農業改良普及の意義について、普及指導員の方たちに何か伝えたりアピールしてもらえないだろうか、というのです。

私は、普及指導員の仕事のことをほとんど知らなかったものですから、どんな話をしたらいいのかずいぶん心配だったんです。ところが、文化心理学を専門にしている助教の内田由紀子さんと出かけていって、コミュニケーションの心理学の話をして改良普及の実例に対する感想やコメントを伝えたと、自分たちがやってきた仕事の意義がよく分かった、とか心理学の立場から自分たちの仕事はどう見えるのかが分かってよかった、と。そうしたことをきっかけにして、現在、普及指導員の人たちが農家や農村に対してもたらした効果を心理学の方法論を応用して検証するプロジェクトを進めています。

それから、引きこもりの若い人たちが20年以上サポートしているNPO法人の方からも、自分たちの活動について学問的な目で検証してもらえないか、アドバイスをもらえないか、というお話もきています。社会とセンターとのこうした直接的な接点といますか、ころの未来研究センターに対して社会が期待しているものを今後もしっかり取り上げて、センターでの研究活動に生かしていきたいと考えています。そのためにも、できるだけ敷居の低い、オープンなセンターにしたいですね。

松本 外部の人と交流し、外部の人に期待されることはとても大切ですね。

私たち理系の人間も、ころには大変興味がありま

す。理学とか物理とか、一見ころとは関係ないような研究をしている人にもころの問題はあるし、彼らの研究も最終的には哲学と結びついているので、必ずどこかでころとつながっているんです。私はころについての研究手段を持たないし、哲学的に考えることもあまりできませんが、直感的に「学問とは真実をめぐる人間関係である」と思っています。

吉川 真実をめぐる人間関係というところ……。

松本 人間は、個体では生きていけない弱い生物ですね。人類は進化のプロセスの中でひょこっと生まれてきた。チンパンジーが成長しそこねて、特殊な進化を遂げたのが人間ではないかという説もあるほどです。でも、人間は社会を作ることで、さまざまな生物の中で一番強くなった。それは簡単にいうと人間関係によるものです。それから、ほかの動物と若干違うと思うのは、少しでもよい方向に行きたいという向上心があること。生存競争に打ち勝ったのはそういう理由だと思います。

「関係」という言葉が、ころと深く結びついていますね。ころを悩ますのも、人との関係や社会との関係、自分のポジションでしょう。それがころの問題が生じるきっかけではないかと思うのです。生まれた時からずっと独りぼっちという実験が仮にできたとしたら、ころの問題は生まれるでしょうか。その環境の中で、自分がどう生き抜くかということでは悩むと思いますが、ころの葛藤はないはず。ところが、複数の人がいると、この人はどうだ、あの人はどうだということが基本になりますから、ころと言われる概念が発生するんじゃないか。だからころは、まさしく人の関係であると思います。

吉川 それはご専門の学問の中で、感じてこられたことでしょうか。

松本 学問というより、私の性格のせいかもしれません。おぎゃあと生まれて、最初に気づくのは母親との関係で、その次が家族ですね。私は4世代家族の中で育ったので、兄弟げんかはもちろん、夫婦げんかに嫁姑問題と、社会の縮図のようなものをそこで勉強しました。小さいなりにいろんな関係を見聞きするうちに、人はどう行動するかということが自然と身についたのです。家庭の次は幼稚園、学校、それから地域社会。社会に出て職業についたら、ネットワークはすごく広がります。恋愛というファクターもありますね。そういう社会との関係で、ころは磨かれていくわけです。

そういう中で、私たちには職業としての学問があったのですが、学問をやってきて人間関係を勉強したのではなく、人間関係をもとにして学問をさせてもらったと私は思っています。非常に頭がよくて優秀な人が、

なぜか学問がうまくいかないことがあります。それは人間関係がうまくいかなかったせいだろうと私は推測するわけです。例えば、私たちは資料を調べるにもデータをとるにも、人を頼らないとやっていけません。どういう人間関係を築くかによって研究の成果は大きく変わる。社会活動がうまくいかないと何もできないというのは、人間の本質です。

吉川 確かにそうですね。

松本 論文を書く場合でも、人の論文を読んだり、議論したりしながら、自分を高めていって、人とは違うオリジナリティを出していくわけです。人と違うオリジナリティを出すということは、まさしく人間関係そのものです。

もちろん、学問というのはそういう側面だけではなくて、非常に客観的で、特に自然科学の場合はだれがやっても同じ事実を導き出せるということが重要です。だから、ころとか人間関係なんか関係ない、数式を出し、自然観察をして客観的な事実を積み上げていけばいいんだという考えもあると思いますが、私はそれにはくみしない。それはベースであって、その上に積み上がるものの大きさは人間関係で決まるのだと思うのです。

ただ、「真実をめぐる」とつけたのを忘れないでほしいんだけど、「真実をめぐる人間関係」が学問で、個人にとって一番重要なのは人との関わり、つまりころの問題ということになると私は思います。

松本 私たちが小さいころはみんな貧しかったから、どうしたら食べられるか、良い生活ができるか、落ち込まないか、小さいなりに考えました。同じ年代にさばけた人が多いのはそういうことがあると思っています。逆に、今の子どもが弱いのはそういう体験が乏しいからではないかという気がします。

吉川 家族構成が少人数になっていて、日常のほとんどの時間が母と子だけの関係ということも珍しくないといったこともあるかもしれません。

松本 核家族化すると、親子、夫婦という関係だけが残ります。兄弟も減ってきたので、関係といっても1対1で止まる。兄弟が5人でもいたら、おかず1つでも取り合いになって大騒ぎです。それは一種のトレーニングですよ。核家族化して子どもの数が減ってトレーニングの場がなくなるといことは、ころの形成にとって大

きな問題でしょうね。

吉川 今日のころの問題の根の部分では、そうしたことの影響が大きいかもしれませんね。私は2人姉妹ですが、父と母はそれぞれ8人兄弟、5人兄弟の大家族でした。親の話の聞いていると、小さいころの兄弟関係だけでも相当に複雑で、社会にでたときの人間関係の原型にあたるような体験を小さいころからしていたようです。引きこもりの青年たちを社会復帰させる活動をしている方の話では、まず何をするかというと、強い父親の役割というか、怒鳴って無理やり部屋から引っ張り出すようなこともするそうです。すると不思議なことに、少しずつ気持ちがほだけていくというお話でした。

松本 家族関係はいやがおうでも毎日、継続してあります。親が夫婦げんかしていても、子どもは聞いていなければならない。どっちにつこうかなと子ども心に葛藤があるわけですが、おばあちゃんが「まあまあ」と連れ出してくれたり、逃げ場もありました。今の家庭は小さくなったから逃げ場がない。結局、ネットに逃げて、人の顔の見えない会話だけが救いになっている。家族の中での継続的なころところのぶつかり合いが、ころの問題で一番重要だろうと私も思っています。

絵本を写して読ませてくれた母

吉川 松本先生は困難やトラブルを乗り越える力というか、強い意思のようなものをどんなふうにして培われたのでしょうか。

松本 私の父親も母親も、小学校しか出ていなかったのです。親父は貧農の次男で、電線会社の工具をしていましたが、たいへんな勉強家で、家には古本が山のようにあって、いつも本を読んでいた。私もそれを読んでいればもっと親子の会話もできただろうと、あとから後悔しましたが。親父は45歳過ぎで教育関係の課長に抜擢され、組合の書記長、委員長をやりました。母親はわりと羽振りのいい家庭の娘でしたが、父親が女に学問はいらぬという人で、たぶん勉強はできたと思うんですが、小学校しか行かしてもらえなかった。その悔しさがずっと残っていて、その分、教育熱心でした。小学生のときから勉強にはうるさくて、先生の言うことは全部わかって当たり前。99点なんて取ったら、1点引かれたらといってえらい怒られました。風邪をひいても、母親はおんぶしてでも学校へ連れて行く。とにかく先生のおっしゃるとおりにしなければいかん、という考えでした。

吉川 現代の教育ママの先駆けのようですね。

松本 教育ママというのとはちょっと違って、中学校ぐらいまでは母親がずっと一緒に勉強をしていたんです。貧しいから本は買ってもらえなかったけど、母親がよその家から絵本を借りてきて、一所懸命自分の手で書き写して僕らに読ませていました。

吉川 「孟母三遷の教え」というのか……。

松本 いやいや、そんないいものと違います。母親は負けん気が強い人で、自分が勉強できなかった悔しさを子どもにぶつけたんでしょう。これが母親が写した絵本です。

吉川 これはすごい……。これは、なかなかできないですね。

松本 よく描けているでしょう。いまどき、こんなことをする親はいないと思います。それから、毎日1つ自然観察をしろという宿題があったんです。たいていの子は途中でやめたけど、私はずっと毎日書きました。「ツバキを見ました」とか「オビカレハの卵を見ました」とか。母親も熱心でしたからね。その自然観察のノートも残しています。

吉川 どちらも松本先生の宝物ですね。

松本 母親の勲章みたいなものですね。そんな母親に育てられて、とにかく「真面目というの大事よ」「手抜きしたらあかんよ」とずっと言われてきた。だから、成績は小学校も中学校もよかったと思います。ほとんど100点。そうでないと怒られたから。だけど勉強は嫌いで、いつも試験の前日に覚えていました。しかも、子どものころ、野球のゲーム中に頭にバットが当たって、左目がほとんど見えなくなったんです。それで本を1時間も読めないものだから、短時間で中身を把握してしまうようなことを身につけたんだろうと思います。そういうトレーニングの結果として記憶力もよくなったのかもしれませんが。

私が育ったのは奈良の田舎ですから、小さなローカルな人の中でのころのやりとりや、顔色の変化を読んだり、どうしたらどうリアクションするか、どうしたらいじめられないか、子どもながらに生活の知恵が身につけていきました。それは今の私の財産になっています。だから大抵のことは何となくわかるんです。

それから、弱い人や小さい人を下に見てはいけぬというつもっています。人間のダイナミックレンジはそんなに変わらない。

吉川 変わりませんか。

松本 そう。社会的地位の高い人と、社会的地位が低くてハンディキャップを背負った人の差を大きく捉える人もいますが、私は大して変わらないと思っています。極端な例を言うと、私の息子はお産のせいで脳性



上は松本総長のお母様が子どもたちのために写して作った絵本。左は小学生のころの松本総長の絵日記。日常の様子がよく描かれている。

小児麻痺になった。話せない、座れない、食べられないのですが、40年近くずっと見てきて、私たちと変わりません。話せなくても、私が言いたいことはわかるし、ころの変化や目の輝き、喜びは同じです。そういうことを積み上げていくと、9割5分ぐらいは同じかな。社会的地位が高い人との差は、どんなに大きくても5%だと思います。

その5%を拡大して、うぬぼれたり、自慢したりするのが人間という生き物ですが、私はほとんどの人は変わらないという目線でものを見ています。だから、誰でも真面目にやっていたら、普通の社会の中に受け入れられると考えています。

吉川 先生は高校生のころに、これという目標を見つけられたのですか。

松本 格好悪いけど、高校生のころは目標なんてあまりなかったんです。京大の工学部を選んだのは、奈良の自宅から通えるの

と、就職したい一心でしたからね。研究がしたいとか、学問がしたいと思ったことはなかった。性格的に何かを長時間じっくりやるのは苦手ですね。人によっては浮わっていると言われるかもしれないが、フレキシビリティが高いというふうに言ってくださる方もいます。

私の研究分野は宇宙科学だから、ものすごく広い。1つの難問を1つの方法でずっと攻めつづける人もいますが、私は性格的にそれができないので、難問に対して1つの理論で突っ込んで、解けないところに当たってアカンと思ったら、すぐ違う方法を考えるんです。理論でだめなら、地上で実験したり、人工衛星を飛ばして宇宙で実験したり、やれることは全部やってみる。それでもわからないことがあって、第3の研究方法としてコンピュータを使ったシミュレーションをやりました。今では当たり前ですが、当時はコンピュータが遅かったので、そんなことをやっている人はいなかったのです。でも、きつともっと速くなると直感してやっていると、実際にそうになりました。だから、そ

研究プロジェクト

発達障害の認知・感情特性と療育的関わり

久保(川合)南海子 (こころの未来研究センター助教)
Namiko Kubo Kawai

学習に困難を抱える子ども

現在、学習障害、注意欠陥／多動性障害、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、約6%の割合で通常の学級に在籍している(文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査2002」結果より)。これらの障害をとまなう子どもは、

育コーディネーター」を指名すること等の推進体制が整備されていくのにもない、学習の困難さが障害に起因しているということが広く知られるようになってきた。一方で、実際の子どもの対応方法は、教育現場で努力はされているが、いまだ定まっていないのが現状である。学習が困難な子どもの学習支援にはまだ多くの課題が残されている。

して学習が進むよう、認知的に強い能力によって学習の迂回路を形成させるなど、体系化されたプログラムの供給と長期的展望に立った支援を目的とする。

複数の学習障害児や広汎性発達障害児を対象に、実証的な科学実験をおこなうことによって、彼らの持つ認知に関する共通基盤を観察することができる。このことは、教育の現

果が得られているが、読み書きが苦手な子どもの場合、九九の反応時間が遅くなる傾向がみられた。ほかには、読みが苦手な子どもを対象に、文章中の単語に対する着色が読みの流暢性に与える影響について検討している。日本語では単語間に区切りがないため、単語に着色することにより、意味のあるまとまりを把握しやすくなると考えられる。これらの研究は、現在も実験参加者の子どもを増やしつづ継続中である。

療育研究では、2007年11月から、3歳から9歳まで8名の発達障害の幼児・児童に、こころの未来研究センターへ来ていただき、一人につき週1回1時間の療育をおこなっている。療育では、主に読み書きの苦手さの原因を評価し、トレーニングをおこなっている。発達障害の子どもは認知特性において非常に大きな個人差がある。そこで初期の段階では、WISC-IIIやRCPMなどの知能検査や、読み書きスクリーニング検査などの標準化された検査、そして私たちが独自に作成した検査を用いてアセスメントをおこない、個人の認知的スキルのプロフィール作成をした。それに基づいて、読み書きのトレーニングとして、パソコンを使用した単語・文章のひらがな入力課題をおこなっている。

そのトレーニングでの効果はいく

つかの課題で縦断的に評価している。すると、キー入力が上達するのはいうまでもないが、他に記憶能力も高まっていることがわかった。2語文の記憶はできて5語文になるとできなかったという子どもが、このトレーニング後には5語文でも覚えれるようになった。それから、ある文章を目で見て読んだときには内容がよく理解できて、耳で聞いた場合にはわかっていなかった子どもが、トレーニング後には耳で聞いただけでも内容がよく理解できるようになった。そして、作文にも変化があった。自発的には短い文章しか書けなかった子どもが、トレーニング後にはさまざまな話題を含んだ長い文章を書けるようになったのである。

このパソコンを使用した単語・文章の入力課題が何をトレーニングしているのかというと、見本の文章を正確に読んで正確に打つという正確さの訓練と、どれだけ早くできるかという流暢性の訓練である。それらは単に、文字を入力する能力を高めるばかりでなく、記憶力や理解力、そして自分で文章を作り出す能力をも高める訓練になっている。私たちは、単純な作業の積み重ねによって、その子どもの成長に沿って段階を追って訓練することが、その子どもの持っている能力を底上げするような形で、無理なく伸ばしていける

のだと考えている。

子どもが課題に慣れた後には、療育の時間内だけでなく家庭でのトレーニングも開始している。トレーニング課題のプログラムを家庭のパソコンに導入し、結果をそのつどメールで送ってもらうことによりeラーニング的な手法の検討もおこなっている。

今後の展望

このプロジェクトが京都新聞などで紹介されたこともあり、現在、療育に参加したいという問い合わせが京都市内を中心に数多く寄せられているので、今後は対応できる範囲で対象児童を増やしていく予定である。また、心理療法の視点から二次障害を抱えている家族への支援や、療育が子どもの感情的側面にどのような変化をもたらしているのかについても検討していきたいと考えている。

最後に、この療育研究が継続できているのは、参加している子ども自身が頑張っていることもさることながら、常に真摯な姿勢で対応している現場の療育担当者、ていねいな補助をしている学生ボランティアさんたち、そして子どもさんご家族の手厚いサポートがあるからにはほかならない。ここに記して感謝いたします。

著作権者・所蔵者の権利の保護のため
画像は掲載できませんパソコンによる療育の様子
左は単語入力課題、
右は文章入力課題

情緒面をはじめ、一見これといって特別な障害があるようには見えない。そのため、単に勉強の苦手な子どもとみなされがちである。少なくとも、このような子どもたちの特徴が明確になる近年までは、特に区別されることなく健常な子どもたちを対象としたカリキュラムによる教育がなされてきた。

しかし、2004年に「小・中学校におけるLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥／多動性障害)、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)」が公表された頃から、LDをもつ子どもたちへのサポートが必要であるとの意識が高まってきている。すべての小・中学校において「特別支援教

基礎的な研究と現場での療育

本研究プロジェクトは、学習障害児や発達障害児の認知的特性を実験的に研究する基礎研究と、研究のフィードバックを含めた実際の療育研究から成り立っている。基礎研究では、それぞれの子どもの直面している障害に応じて、もっとも適切かつ体系的な療育支援を考えていくために、学習の困難さをもたらす認知機能と脳機構の関連について解明することを目的とする。実際の療育研究では、まず、さまざまな認知課題を用いてそれぞれの子どもの得意な部分、逆に苦手な部分を同定する。そして、得意な部分についてはさらに伸ばし、困難な部分は安定

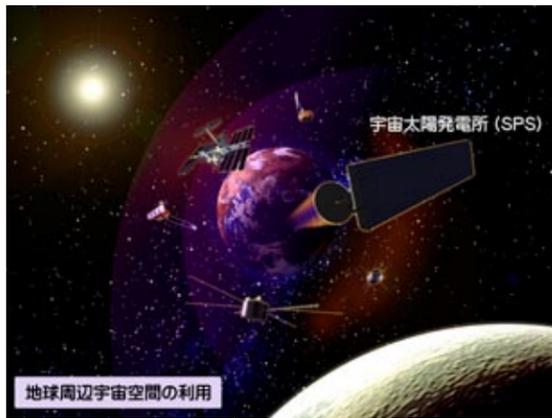
場において、個人の特性を考慮しながらユニバーサルな授業運営等を可能にすることにつながっていくだろう。また、それぞれの子どもの応じた療育をおこなうことは、一人でも多くの子どもの未来における学習可能性を伸ばすという効果が期待できる。

プロジェクトの経過と成果

基礎研究の一例では、読み書きの苦手さが算数教育にどう影響するかを検討するため、ひと桁の足し算と掛け算九九の反応時間を調べる実験をおこなった。成人を対象にしたこれまでの研究では、言語的な暗唱で解答可能な九九は足し算よりも反応時間が早く解答可能であるという結

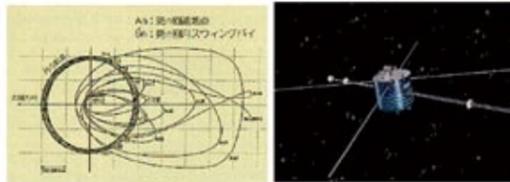
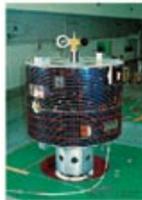


療育をおこなっている大学院生と学生ボランティアの皆さん



GEOTAIL 衛星による 磁気圏プラズマ波動観測衛星

磁気圏尾部を探查する目的で我が国の衛星 Geotail は 1992 年に打ち上げられた。数々の発見を行い、世界的にもその実績を認められた衛星です。



松本総長は宇宙科学の世界で多数の国際的な研究業績を残している。たとえば、宇宙プラズマ物理学の研究分野においては、科学衛星におけるプラズマ波動観測を主導し、宇宙空間における静電孤立波を発見するなど、国際的にきわめて高い評価を得ており、宇宙プラズマ計算機シミュレーションの世界的先駆者でもある。また、宇宙で得られる太陽エネルギーを電波で地上に送電する「宇宙太陽発電衛星」の研究でも世界をリードしている。これらの功績により、紫綬褒章受章のほか、さまざまな賞が贈られている。

の宇宙プラズマのシミュレーションの分野では草分けなんです。1つの問題を解決するために、あらゆることをやってみようとする。大学運営にも難しい問題がたくさんありますが、いろんな方法をやってみようと思っています。

吉川 それは強いんですね。

松本 多様性のある生物は強いでしょう。人に対して、小さいころからいろんな人間を見てきましたから、怖いと思ったことがあまりないんです。政治家でも大臣でも企業家でも、誰とでも平気です。あるいは誰かに「この野郎」と言いがかりをつけられても、「なんじゃい」と平気で言い返せる。私の父親は労働組合でよく演説をしたり、人前で話したりしていましたが、「お父ちゃんは人前であがれへんの？」と聞いたら、「そんなん、いっぺんもあがったことない」と言っていま

した。私もその血をひいているのかもしれない。

大学人のイメージを変えた恩師

吉川 先生は、若い頃に、こういう人になりたいというロールモデルになるような人はいましたか。

松本 若いころは大学人になりたいと思ったことは、一切ありませんでした。私は毎日家庭教師のアルバイトをしていましたから、大学の先生は授業でしか知らない。だから、大学の先生というのは術学的で格好ばかりの堅物というイメージがあって、絶対になりたくないと思っていました(笑)。ところが、4回生になって卒論を書くために頻繁に先生方と接するようになりました。その時に恩師として指導していただいた前田憲一先生は、私がイメージしていた大学の先生と全然違う。若いころは「光源氏」と呼ばれていました。

吉川 そうなんですか(笑)。

松本 頭が良く、人格者で、研究ができて、世界に通用する学者でした。祇園にもよく連れて行ってもらいました。とにかく人間の幅が広い。でも根は真面目で、ノートはドイツ語でびっしり書き込まれていました。

そしてもう1人感化されたのは、前田先生が電子工学の教授として連れてこられた大林辰蔵先生です。東大出身で34歳と破格に若い。建築現場の親方みたいなごっつい感じの人で、だんだん好きになりました。専門は違ったのですが、前田・大林研と2つの研究室を1つのようにしておられたので、毎日研究室に呼ばれてみっちりトレーニングされました。分厚い本や論文集を何冊も渡されて、「1週間読んでください」。大変でしたが、とても幅広い勉強をさせてもらいました。読んできた内容を2時間ぐらい報告すると、「よくできました。では行きましょう」と言って、いつも先斗町に連れて行ってくれました。そこで聞く話がものすごい。肝が据わった先生で、世界的な学者だったんです。スペースシャトルを日本に最初に紹介した人です。直接の恩師ではなかったのに、その後もずっとかわいがってもらいました。20年くらい前に亡くなりましたが、形見にこのメガネをもらいました。

吉川 京都大学に、ころの未来研究センターのようなユニークな場所があることを最大限生かせるような仕組みはできないかなと思っているのですが……。

ころはどこにあるのか

松本 今、京都データ集を作ってもらっているのですが、京都は稲盛和夫さんを筆頭に、ころに対して理解ある文化人や実業家がたくさんいますね。京都の文化、日本文化ところは切り離せないでしょう。京都は大学の町と言われますが、大学が何校ぐらいあると思いますか。

吉川 50校ぐらいでしょうか。

松本 そう。大学は国立大学法人が3校、公立が3校、私立が25校。短期大学が公立は1校、私立が15校。こんなに多いと思いませんでした。神社やお寺はどれぐらいあると思いますか。

吉川 何百とありそうですね。

松本 これはなかなかつかめないんですが、ざっと調べたところ、京都市では神社が404、お寺が1,680。それからお茶、お花、能、狂言などもあります。その背景にあるのはころですね。京都には精神文化もあれば物質文化もあります。

京都大学にころの未来研究センターという、ころの研究拠点ができうれしく思っています。私はころというのは脳作用と思っているけれど、ころが痛むとき、キュッとするのは胸でしょう。ころがどこにあるかという、丹田にあるという人もいれば、胸にあるという人もいます。最近、つくづく思うのですが、手でつかんだり、物を食べたりする感覚は、手や舌でそれぞれわかりますね。脳は非常にたくさんのことをやっているのに、脳自体は自分が働いているというシグナルを發しませんよね。ころという、どうしても脳はイメージしない。やはり胸だと思いませんか。

吉川 そうですね。「心」という漢字は心臓の形をあらわすそうです。

松本 そうですか。でも、「ころ」は何かもう少し広い感じがしますね。仏教に「眼・耳・鼻・舌・身・意」とある。「眼・耳・鼻・舌・身」は五感で、最後の「意」は第六感といわれるものですが、これがころと関係しているんです。五感をすべて支配する「意」というものがある。「意」は現代風にいうと、脳の作用です。これが「ころ」ということになると思うのです。大昔から「無」とか「空」と「ころ」の関わりについて考えている人がいますが、そういう哲学的、感覚的なころの定義と、もう1つ、非常に物理的、生理的なころというものがある。こちらはお医者さんたちが手を出している分野です。

ころの学問は「務本の学」

松本 哲学関係の人はころにあまり関心を持ちませ

んか。

吉川 関心を持たないことはないと思いますけれども、学問としての哲学という、今は文献学が中心になっているような気がします。ころ観というか、「ころとはなにか、ころをどう見るのか」というような問いにはあまり関心が向かないかもしれません。

松本 本来の学問は、形がまだないところからスタートするのが醍醐味であり、自由性があると思っているのですが、非常に歴史の古い学問は石積みをずっとやってきて、1人の研究者が一生をかけて1つの石を積み上げると、次の人がまた石を積み上げる。だから過去にやった人の論文を全部読むわけです。そういう人が碩学といわれる。しかし、それをやり過ぎると知識に縛られるという面がある。「記問の学は以て人の師たるに足らず」(礼記)という言葉があるように、文献を読んで博識だからといって、先生とするには足りない。ころの場合は、これから学問の本質を切り拓くという面白さがある。これはとてもいいですね。

京都大学は、枝葉末節ではなく「本を務むの学」であってほしい。大本をしっかりとやってほしいんです。ころの学問は大本の学問だと私は思います。それを「務本の学」というんです。「本を務むるの学」は非常に重要で、物の本質をずっと考えるということが、京都大学の強みだと思う。

今回のノーベル賞も、物質の大本は何かということ突き詰めて、物質と反物質の矛盾点を1つ提案したのが、小林・益川理論でした。多くの研究は細かくなりすぎて、本来どういう問題を解いているのかを忘れてしまうような傾向がないとはいえない。だから、ころの未来研究センターは「務本の学」をぜひ目指してほしい。なぜ私たちにはころがあるのかという哲学にもつながるので、哲学者はころをどうみているかということもたいへん興味があります。

吉川 ありがとうございます。大学の現状をよく知る人から、「今の時代に、こんなセンターができたこと自体が奇跡に近い」と言われます。ころの未来研究センターで取り組む研究がまさに「務本の学」となるように、努めてゆきたいと思っています。

松本 ころの学問、「ころ学」というのがあるかどうか知りませんが、ころの未来研究センターの究極の目標として、京都発、京大発のころ学の学会のようなものをうまくつくられるといいと思います。

吉川 本日はどうもありがとうございました。

(2008年12月24日、京都大学総長室にて)

研究プロジェクト

共感的対話の相互作用性

——カウンセリング対話から「対話のなぞ」に迫る

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
Sakiko Yoshikawa

人は、カウンセラーと対話することで、自分の抱えている悩みを乗り越えることができたり、かかえる問題に対する新しい解決法を思いついたり、悩み自体を客観的にとらえられるようになったりする。こうした、話し手のこころに変化をもたらす対話、こころの成長を促す対話とはどのようなものなのだろうか。それは日常生活の中での家族や友人同士の会話とはどのように異なるのだろうか。私が以前からとても不思議に思い、いつか答えを見つけたいと思っていたのが、この聞き手のプロであるカウンセラーの、対話の技法である。

「共感的対話の相互作用性」プロジェクトは、心理臨床のカウンセリング対話に焦点をあて、対話のなぞに迫ることを目指して研究を進めている。参加している研究者は、自身が熟練カウンセラーである臨床心理学者（桑原知子、大山泰宏）、職場など社会的場面で生じる感情の行き違いや対人ストレスへの対処に関心をもつ社会心理学者（渡部幹）、対話する人の身体の動きや音声の解析に習熟した認知心理学者（長岡千賀、小森政嗣）と、学生時代に臨床心理学徒を志し、あえなく挫折したものの臨床対話には常々関心を持ち続けてきた認知心理学者（吉川左紀子）である。学際的なグループなので、それぞれの専門分野から見た関心を取り入れながら、対話中の「音声」「身体の動き」「言語テキスト」などの分析可能な手がかりを使って研究を進めている。

カウンセリングの対話で重要なのが、「聴くこと」であるとよく言われる。そうした、専門家としての訓練を経て初めて可能になる聞き方の特徴を、できるだけ客観的に検証し、カウンセリングの場で起こっていることを「目に見える形」で取り出してみる、ということがこの研究プロジェクトの最初の目標とした。そしてさらに、聴くという行為が、話し手の思考プロセスや感情をどのように変えるのか、さらに聞き手はそれをどのように認識するのか、対話が終わった後の、対話に対する相互の認識はどのようなものか、など、少しずつ対話分析を進め、「対話のなぞ」に迫っていこう、というのがこの研究プロジェクトのねらいである。

話し手、聞き手が使う時間

私たちがまずめざしたのは、聞き手がカウンセリングの専門家の場合と、専門家でない人の場合に、話し手（クライアント）との対話にはどんな違いがあるかを具体的に明らかにすることである。そのために、専門家として本職のカウンセラー、非専門家として高校の先生に協力してもらい、心理臨床の模擬カウンセリング場面（非専門家の場合は悩み事相談の場面）を収録して分析した。図1の写真は、収録した模擬カウンセリングの様子である。左がカウンセラー、右は相談者で、椅子やテーブ

ルの位置、距離なども実際のカウンセリングにできるだけ近いセッティングになるよう配慮した。通常、カウンセリングは50分間が1セッションである。50分の時間の中で起こる対話を、50分の時間の流れの中で分析する、という方針のもとで、セッションを収録し、そのときの話し手（相談者）と聞き手（カウンセラー、高校の先生）の発話の逐語録と音声パターン、映像の解析を行った。すると、聞き手の専門家であるカウンセラーの対話に、いくつかのユニークな特徴が明らかになってきた。

専門家としての聞き手の特徴がはっきり表れているのは、話し手と聞き手が発話する時間と、沈黙の時間に着目した分析である。具体例をみてみよう。図2にはふたりの対話の音声波形が示してある。線がギザギザに上下している部分は、発話している音声波形を表している。それ以外の部分は沈黙の時間である。沈黙の時間には2種類あって、話者が交替するときに生じる沈黙は「反応



図1 演習中の対話ロールプレイ

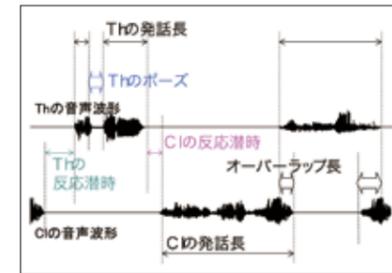


図2 発話音声データの分析方法 (話し手はCl、聞き手はThと表記)

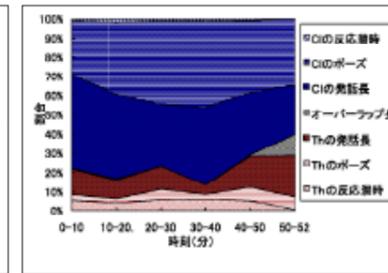


図3 聞き手が専門家ときの発話と沈黙の変化パターン

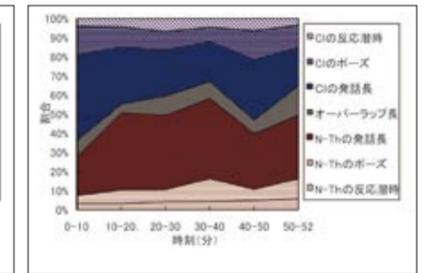


図4 聞き手が非専門家ときの発話と沈黙の変化パターン

潜時」、話の途中で入る沈黙は「ポーズ」である。話し手と聞き手の「発話」と「沈黙」の長さを調べて、対話中の50分間の中で、それぞれの対話中の時間が話し手と聞き手にどのように使われているかを調べてみると、図3（専門家）と図4（非専門家）のようになった。図3は聞き手が専門家のカウンセラー、図4は聞き手が非専門家の高校の先生の場合、横軸は、対話の開始から終了までの時間（分単位）である。

ふたつの図を見比べてまず目につくのは、図3の青の領域、つまり話し手が使っている時間が、図4に比べて圧倒的に多いということである。さらに、青の領域、とくにポーズの時間は、対話の開始から20～30分間に少しずつ広がっている。このことは、話し手の発話中の沈黙の時間が次第に長くなっていることを示している。一方、非専門家が聞き手となっている場合には聞き手の発話時間がとても長いこと、つまり、本来聞き手であるはずが、逆に話し手よりも長い時間、発話していることが見てとれる。とくに、50分の対話の前半部分で、次第に話す時間が長くなっている。「聞き手」としてのカウンセラーの対話の特徴は、自ら積極的に語ることをせずに、相談者の話をひたすら傾聴する態度にあることが推察される。話し手の対話中の沈黙は、数秒から10秒を超える場合もあるが、そうした沈黙の時間は、話し手の思考を深めるうえで重要な「間」である。

発話内容も、非専門家の場合には、相談者の発話のあとで「〇〇をしてみたらどうか」といったアドバイスをしたり説得を試みるような積極的な応答が多いが、専門家の応答には、そうした発話は少なく、相談者の発話に対する聞き返しや確認などが多いのである。専門家の「聴くことに徹する」という姿勢は、発話時間と沈黙時間の計測結果にも明瞭にあらわれているのが、印象深い結果であった。

からだの動きが同調すること

話し手と聞き手の発話時間と沈黙時間の分析のほか、身体の動きの同調性に着目した分析も行っている。「同調性」というのは、2者の身体の動きがリズムカルに同期する現象である。こうした、言語以外の手がかりを分析して、対話の質や対話している2者の関係を表すことも、当事者自身が気づいていない心の動きを目に見える形にするうえで重要な手法である。

対話が「全体としてよい感じで進んだ」と評価された映像と「対話が表層的で深まらない」と評価された映像を素材にして、2者それぞれの、身体の動きの大きさの時間変化を解析した。すると、高評価の対話例では、話し手と聞き手の身体動作に、対話中一貫した同調が生じており、話し手の動作から約0.5秒遅れて、聞き手の動作が生じていることが分かってきた。一方、低評価だった対話例や、非専門家が聞き手となった

対話例では、二人の身体の動きに一貫した関係はみられなかった。「対話がよい感じで進んだ」ときに、安定して身体の同調が生じていること、また、その同調は、「話し手の動きに聞き手が応える」という性質を表すことは、対話のなぞを考えると重要な手がかりになるような気がしている。

プロジェクトの「おまけ」

本プロジェクトを進めるうえで、参加メンバーが集まって定期的な研究会を開いている。臨床心理学、社会心理学、認知心理学という、もともと関心事や研究の方法論がかなり異なる研究者が集まり、「心理臨床の対話」というひとつのテーマをめぐって話し合っていると、「そもそも心理臨床家にとっての、専門性とは何?」「対話中の沈黙の時間のもつ意味は何だろうか?」「異なった臨床理論に基づくカウンセリング対話を比較したらどうだろうか? 違いだけでなく共通項も見えてくるのでは?」といったさまざまな疑問が湧いてきて、議論が尽きない。違う方向から問題を眺めて議論する新鮮さ、異なる経験を積んできた人とじっくり話すことの味わい深さ、目に見えない「こころ」を目に見えるもの（図や表やテキスト）にして話し合う楽しさ。このプロジェクトから私たちが得ることができた、こうした「おまけ」は、研究者自身のこころを豊かにする、予想外の成果と言えるかもしれない。

研究プロジェクト

こころ観の思想的・比較文化論的
基礎研究鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Toji Kamata

1 「こころ観研究会」のねらい

本研究プロジェクトは、〈人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、宗教・哲学・芸術・思想などの側面からまず思想的に考察し、それをベースに比較文化論的な考察を加えてゆく〉という研究課題を掲げて、2008年4月にスタートし、2008年度は、4回の研究会と1回の意見交換会を行った。

本研究プロジェクト、通称「こころ観研究会」は、「こころ」をめぐるどのようなアプローチや考え方があるかを“総めぐり(総覧)”する研究会であり、自由な議論と研究者相互の交流の場を生み出すこころ研究の総合サロンである。さまざまな研究者が自由に各個の研究手法や研究成果を披露し、活発な議論をたたかわせて、各自の拠って立つ学問的基盤や方法や最新研究成果を吟味し、掘り下げ、文系・理系もろもろ混在した参加者と共に、こころ研究の共通概念や共有基盤を探り、確認し、各自の、また各分野のこころ研究を活性化させる。あえて、本研究プロジェクトを「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」と名付けたのも、そうした意図からである。

2 こころ研究の時間軸と空間軸

さてその際、時間軸に沿ったこころ研究と空間軸に沿ったこころ研究を二本の柱とする。つまり、生物進化論および思想的な研究と、比較文化論および民族学(文化人類学)・民俗学的・社会的な研究である。

そこで、霊長類の行動形態からヒトへの「こころ」の進化過程を経て、ヒトが諸時代・諸地域においてみずからの持つ「こころ」をどうとらえてきたかを総覧する。

たとえば試みに、日本人の「こころ」および「こころ観」がどのような変化の過程を辿ってきたかを時間軸に沿って輪切りにしてみるとどうなるだろうか。日本列島に生きた人びとがどのような「こころ」を持ち、どのように「こころ」についての思想を発達させたか。『こころの未来』創刊号での山折哲雄氏を囲む吉川左紀子センター長とカール・ベッカー教授とわたしとの座談会「こころと日本文化」(28~43頁)の冒頭に、『心』の日本思想史」という節を掲げたが、そうしたテーマの掲げ方もこころ観の通史的研究の一方法であろう。縄文遺跡から見る日本列島人のこころ、弥生遺跡・古墳からみる古代人のこころ、日本神話や神道からみる古代日本人のこころ観、仏教から見るこころ観、儒教から見るこころ観、空海と最澄のこころ観、中世・近世・近代日本のこころ観、ニューエイジ・新宗教のこころ観、現代文学・映画に見るこころ観など、さまざまな時代・思想家・芸術家のこころやこころ観を探ることができる。もちろんそれらの限定的な研究からどこまで包括的なその時代や思想家特有のこころやこころ観を抽出することができるか未知数のところはあるが、しかしそうした研究に着手していく意味も意義も大いにあるだろうし、それは「豊かなこころ」

のありようを探るこころの未来研究センターの重要な課題の1つであろう。

3 「心理学栄えて、こころ貧し」を超えて

一昔前、「民俗学栄えて、民俗減ぶ」とか、「文化人類学栄えて、文化減ぶ」とか言われたが、「心理学栄えて、こころ貧し」という状況が1990年代から続いているように思う。かつて、日本民俗学の創始者柳田國男は「民俗学は日本人の自己内省の学であり、幸福実現の学である」と主張した。だが、そうした柳田の提唱から80年余、民俗学は自己内省の力も幸福実現の力も失っている。いや、民俗学がいまだ十分にそうした力になったことはなかったともいえる。柳田が掲げた民俗学の高い目的はスポイルされ続けてきたのである。

1990年代からの臨床心理学の隆昌は、けっして豊かな「こころ」の育成に寄与したわけではないし、むしろこころの貧困と困難の裏返しでもあり、反映でもあったともいえよう。こころに関する研究や学問はますます分断化され、個別研究の量は豊富になったが、しかし、それを研究する研究者の「こころ」も彼らを取り巻く周囲の「こころ」もいよいよ深刻な不透明さを増し、各自の支えになるような「こころ」観が生まれてきているわけではない。「こころ」について、まだまだ基礎研究も応用・臨床研究も足りず、理論と実践・実態の乖離も進んでいるように見える。また、それぞれの学問分野

内や学問分野間の相互の対話・対決・徹底討議も足りない。そうした自在な総合討議がさまざまな角度から繰り返されつつ、「こころ」をとらえる包括的な枠組みや共通の道具づくり・土俵づくりをする必要があるだろう。わたしたちは、そのような新しい総合的な「こころ学」の探究と構築の砦として「こころ観研究会」を立ち上げたのである。そこでは、個別研究間、研究者間を「つなぐ(連結する)」ことを重視する。

4 2008年度の「こころ観研究会」の活動

その第1回目の研究会が、2008年6月5日、芝蘭会館研修室で行われ、理化学研究所脳科学総合研究センターのプロジェクトリーダーの脳科学者・入来篤史氏が「サルからヒトのこころへ〜知性進化と神経生物学」、若き縄文考古学者の石井匠氏が「縄文時代のこころ観〜土器の分析から」、本センター教授の臨床心理学者の河合俊雄氏が「もの・内面・接点〜心理療法における心観を求めて」について、それぞれの研究分野から問題提起した。60名余の参加者があり、活発な議論が行われた。この時の発表者の立論は、わたしが研究代表をしている科研『モノ学・感覚価値研究』第3号(2009年3月発行)に掲載されているので、参照していただきたい。

続いて、2008年7月1日に、京都大学吉田泉殿で、第1回「こころ観」研究意見交換会が開かれ、〈そもそも「こころ」とは何か? 「こ

ころ」はどこにあるのか? 「こころ」とは間にあるもので、mindとは違うのではないか。二者間に起こる目に見えないものが大切である。「超越」するこころとは!? 認知考古学など、「取り扱い危険」とされてきた「こころ」が、さまざまな学問分野で注目されだしている。なぜヒトは嫉妬できるのか? 神経科学では、「こころ」は脳の属性だと考えられてきた。「こころ」の存在を、あえて考えないアプローチもある。なぜ、「こころ」がないと困るの? 「こころ」がないなんて考えられない! 苦しい時に何が「こころ」の支えになるのか? 「こころ」もDNAの自己複製という性質の産物だと考える。「こころ」の理解は、知識を積み上げるといふより、しみじみと身体にしみとおってゆくようなものでは? 「こころ」も近代の産物? 「こころ」をなぜ考えるのか? 「こころ」はどうやったら捉えられるのか? などなど、さまざまな問題提起やディスカッションが行われた(以上は大石高典特定研究員による意見交換会のまとめに基づく)。

さらに、第2回研究会(2008年12月18日)は近代思想史研究者(人間・環境学博士)の上本雄一郎氏による「移ろいゆく〈こころ〉——出口王仁三郎『霊界物語』と笑いの形而上

学」、人間・環境学研究科教授のドイツ文学者高橋義人氏による「フマニズムの死の時代における人間のこころと暴力」、第3回研究会(2009年1月22日)は理化学研究所脳科学総合研究センタープロジェクトリーダーの精神科医加藤忠史氏による「躁うつ病研究から見た精神医学の歴史と未来」、第4回研究会(2009年2月18日)は理学研究科教授の霊長類学者山極寿一氏の「霊長類の行動からこころの進化を読み解く」が発表され、活発な議論がたたかわされた。

ともあれ、本研究会はこの混迷せる時代に、「こころ」の羅針盤を探る、「こころ研究・こころ学」の“梁山泊”として、学内外の二十数名の海千山千のつわものたちとともに、自由闊達な探究を始めたのである。(連携研究員・共同研究員については、こころの未来研究センターのホームページをご覧ください。)



第1回こころ観研究会の発表者入来篤史氏



石井匠氏の報告を聞く参加者



意見を述べる連携研究員の山極寿一教授(左端)

研究プロジェクト

Webによるこころの研究ニュースの発信

平石 界 (こころの未来研究センター助教)
Kai Hiraishi

プロジェクトの目的

浪人生のころ、高校の同級生が大学で心理学を専攻していると人伝に聞いた。「真面目そうに見えたけど、けっこう怪しいことに興味がある人だったんだなあ」という感想をもったことをよく覚えている。そのわずか2年後、自分自身が心理学を専攻するようになると、初対面の人から繰り返し同じ質問をされるようになる。「心理学を勉強してるなら、今、私がなにを考えているか当てられる？」

このように心理学というと、人の心を読むための何か魔法のような方法を研究している学問というイメージが、世間に根深く存在するように思える。しかし実際の心理学には、理系的な側面、実証科学としての側面が強く存在する*1。そうした実証的な心理学から、私たちの「こころ」について、常識をひっくり返すような研究や、思いもなかったこころの不思議な働きを明らかにした研究が多く発表されている。これらの研究が心理学の専門家にしか知られていないことは、世間の偏ったイメージを修正する機会を持ち得な

いという意味で心理学にとっても損失であり、そしてせっかくの知識が共有されてないという意味で、社会にとっても損失であるだろう。

しかし心理学の成果を、専門家以外の人々に伝えようとする、あるジレンマが生じる。心理学の知識を、おもしろおかしく伝えたいという気持ちと、研究を過大評価せずになるべく厳密に伝えたいという気持ちのジレンマである。こうしたジレンマを自覚した上で、自分たちが専門家として楽しんでいる「心理学」という学問の魅力と限界を発信するのが、本プロジェクトの狙いである。

ターゲットと手段

より具体的には以下の目標を設定した。まず「誰に伝えるのか」とい

う点については、高校生から大学1～2年次の学生をターゲットとした。「こころの未来」を「心理学の未来」と読み替えたときに、これから社会に出ていく学生たちに、心理学の魅力と限界を伝えることの意味は大きいと考えたからである。社会的動物である人間にとって、「こころ」についての理解を深めることは、有益であるだろう。

「何を伝えるのか」という点については、心理学の新しい研究論文の紹介を基本におくこととした。現在進行形の科学の現場では、新たな理論や研究結果が本当に正しいのかどうかは、すぐには分からない。そうした科学研究の緊張感、言い換えれば個別の研究報告の限界を伝えるためには、まだ必ずしも確立していない、



「こころ学」ブログ

しかし魅力的な研究を紹介する研究ニュースという形が適当と考えた。

そして「どのように伝えるのか」という点については、Webサイトにおけるブログ形式という形をとることとした。速報性を持ちつつ、プロジェクトメンバー同士がコメントを寄せ合うことで、1つの記事からさらに議論を深めることができるのではないかと考えたからである。

覚えやすく直感的に内容が伝わるようにとの思いを込めてブログには「こころ学」というタイトルをつけた。試験的に書いた記事をベースにプロジェクトメンバーで議論をし、ブログの方向性についての意見をまとめた。また試験記事をもとに、こころの未来研究センターのWebサイトをデザインしている山本真也さんにブログのタイトルロゴなどのデザインをお願いし、2008年11月にブログが正式スタートした。

記事の紹介

「こころ学」ブログの最初の記事「サunkコストの誤り：だってもったいないじゃないの心理」から一部を抜粋して紹介する。

雨の中出かけて、やっと借りられた話題のDVD。なのに面白くない。見始めて5分で確信。最後まで見ても絶対つまらない。でも、払ったお金がもったいないから……最後まで見ました。

こんな経験、したことありませんか？

つまないと分かっているDVDをみてしまうようなことを「サunkコストの誤り」(Sunk Cost Fallacy)といいます。そう、これは「誤り」なのです。でもなんでこれが誤りなのでしょう？

サunk (Sunk) は直訳すれば「沈

んでしまった」といった意味。だからサunkコストは、沈んでしまったコスト=もう取り返しがつかないコストということです。なぜつまらないDVDを見続けることが「取り返しのつかないコスト」の「誤り」になるのでしょうか。

ちょっと違うバージョンを考えてみて下さい。

テレビをみていたら、面白そうな映画がはじまったので見てみた。でも5分も見たらつまんなそう。さて、この映画を最後まで見るでしょうか？

そんな映画より、さっさとチャンネルをかえてしまいますよね。

そりゃそうだ。雨の中わざわざ借りてきたDVDだからもったいないじゃないか。タダで見られるテレビの映画とは違うよ。そう思いませんでしたか？ それこそが「サunkコストの誤り」なのです。

なぜ？

つまらないDVDを見続けたとして、レンタルDVDショップまでの往復にかかった時間は返ってきますか？ 車のはねた水で汚れてしまった服はきれいになりますか？ レンタルショップに払った

お金は返ってきますか？ 返ってこないですね。だから取り返しのつかないコスト、サunkコストなのです。

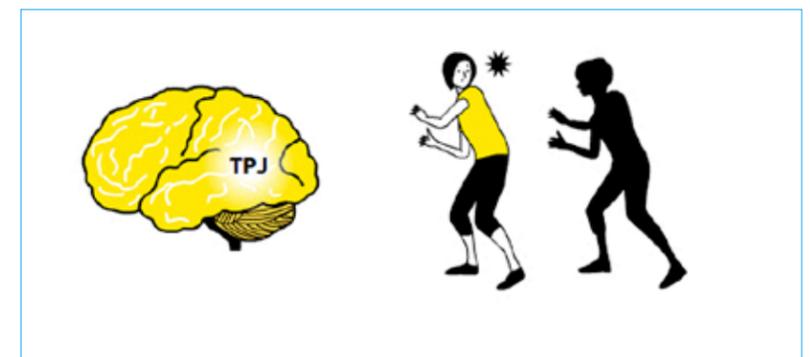
でもどうでしょう。もう取り返しのつかないコストにこだわるよりも、今からの2時間を楽しむことの方が、ずっと大事ではありませんか？

続きは、ブログをご覧いただければ幸いです (http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokorogaku/)。

今後の予定

最新の研究論文の紹介をするだけでなく、論文へのアクセス方法や研究室・研究者紹介といった、心理学を学ぶための手段についても紹介したいと考えている。ともあれ、まずはコンスタントに記事をアップすることが当面の目標である。ある程度の記事が集まったところで、今後は京都市近縁の高校などに、積極的にブログの存在を宣伝していきたいと考えている。

注1：ここで述べたような大量のデータに基づく心理学の他に、質的な心理学(臨床心理学はその代表かもしれない)も存在し、その重要性も無視することはできない。そして質的な心理学においても、その方法論をよく理解した上でなければ、その意味するところを正確に理解できないという点では、実証主義的な心理学と何ら異なることはないだろう。



「こころ学」ブログのイラスト「人間椅子：神経科学版」の記事より

ころの進化と文明の発達

長谷川真理子 Mariko Hasegawa

(総合研究大学院大学教授)



行動の研究と「ころ」の研究

私は自然人類学の出身で、博士課程の院生のときには、野生のチンパンジーの生態と行動を研究していた。その後、シカ、ヒツジ、クジャクなど、いろいろな動物の行動を研究してきたが、とくにこれらの動物の「ころ」について研究したことはなかった。「ころ」とは、行動を生み出しているもとになっている脳の働きであろうが、行動という、脳の働きの結果のみに焦点をあてて動物を研究することは十分に可能である。

それは人間についても同様で、どんな行動が見られるかのみを観察し、その行動の背後にある「ころ」の問題は棚上げにしておいても、十分におもしろい研究はできる。行動生態学という学問は、対象をヒト以外の動物にするにせよ、ヒト自身にするにせよ、行動の帰結が、その個体にどのような適応的利益をもたらすのか、行動の生存、繁殖上の利益を研究する。そのような適応的利益は、その個体が置かれている環境によって異なるので、生態を調べなければならない。そこで、行動生態学なのである。

一方、「ころ」について研究してきたのは、心理学や認知科学である。これらの学問は、歴史的に、人類学や行動生態学とは無縁であった。また、「ころ」の理解として目指してきたのは、「ころ」の進化ではなくて、メカニズムの解明であった。

しかしながら、「ころ」を生み出しているのは、脳とからだであり、からだは進化によって適応的に

作られてきたのだとすれば、「ころ」も進化の産物であるはずだ。こうして、心理学が行動生態学や人類学と結びつき、進化心理学が生まれた。それは、20世紀の終わりころのことである。

利他行動の進化

私が、進化心理学と出会ったのは、この学問分野がまさに作られようとしているさなかの1990年代半ばであった。それにはいろいろな出来事があったのだが、そのころ、それとは別に、行動生態学の枠組みだけでヒトを研究していくのではダメなのではないか、と思うことがあった。それは、利他行動に関する研究について考えていたときだった。

利他行動とは、自分が生存、繁殖上の損失をこうむっても相手に生存、繁殖上の利益をもたらす行動をさす。自分の生存、繁殖が脅かされるのであるから、本来、こんな行動は進化しにくいはずだ。しかし、ヒトを初めとして、いくつかの動物には、確かに利他行動と思われるものが見られる。それはどうしてなのだろう？

そのような研究が進む中で、互恵的利他行動の進化という話が有名になった。これは、1) 行為者の損失よりも受け手の利益のほうが大きく、2) 個体どうしが長く将来にわたって行動のやりとりをする可能性が高く、3) もらったのに、次のときにお返しをしない個体がいれば、次から排除するという能力があれば、利他行動を互いにやり取りすることによって、結局は誰もが利益を得ることになる。だから進化し得る、というシナリオだ。これを、互恵的利他行動と呼ぶ。

このシナリオを最初に提出したのは、トリヴェースという行動生態学

者で、1971年のことだった。その後、行動生態学では、この互恵的利他行動が動物の間で見られるかどうか、本当にこれが進化するかどうか、行動観察や理論的モデルやらの研究がたくさん行われ、さんざん議論が闘わされてきた。

このような理論的研究は、普通、囚人のジレンマゲームというゲームを用いて行われてきた。それは、2人のプレイヤーが「協力」か「非協力」か、2つの行動の中から1つを選ぶゲームである。両者ともに「協力」を選べば、両者ともに得点Rが得られる。自分が「協力」したのに相手が「非協力」であれば、自分はS、相手はTという得点を得る。双方が「非協力」であれば、双方ともにPという得点を得る。ここで、 $T > R > P > S$ という関係になっている、さらに、SとTの平均よりもRのほうが大きい(図1)。

つまり、一番高い点を取ろうとすれば「非協力」なのだが、どちらもそう思うと両者が「非協力」になり、得点はPとなる。それよりもRのほうが高いのだから、「協力」をすればよいのだが、もしも相手が「非協力」であれば自分は最低点のSになってしまう。そこで、「協力」はなかなか採用されない。

だから、1回だけのゲームでは、「協力」行動は生まれにくい。ところが、

トリヴェースの互恵的利他行動のシナリオのように、同じ個体どうしが何度もこのゲームを繰り返すのであれば、状況は変わってくる。そこで、繰り返しのある囚人のジレンマゲームではどうなるか、これまた膨大な量のシミュレーション研究が行われた。

「しっぺ返し戦略」と「パブロフ戦略」

そこで、さまざまな戦略どうしを繰り返しのある囚人のジレンマゲームで闘わせ、結局、どんな戦略でのぞむと高い得点を得るのかが検討された。その結果、「しっぺ返し戦略」というのが、相当にすぐれているということになった。それは、1) 初回は「協力」する、2) そのとき相手が「協力」だったら、次回も「協力」、相手が「非協力」だったら次回は「非協力」という簡単な戦略だ。

つまり、自分から先に「非協力」をすることはないが、相手が「協力」なら自分も「協力」、相手が「非協力」なら自分も「非協力」ということだ。これは、トリヴェースの互恵的利他行動の筋書きに合っているし、確かに、たくさんの他の戦略に比べて強いことが確かめられた。

さて、1993年の『NATURE』に、「パブロフ戦略」という戦略が、「し

っぺ返し戦略」よりももっと強いという論文が出た。「パブロフ戦略」とは、もっと高い得点の可能性があるのに、それよりも低い得点が続いた場合には、行動を変えるという戦略だ。

たとえば、「しっぺ返し戦略」どうしがずっと対戦を続けて「協力」しあっていると、双方の得点はRである。しかし、Rが一番高い点ではない。「非協力」を出したら、もっと高い点Tがとれる。そこで、「パブロフ」は「非協力」に変える。さて、相手が「しっぺ返し戦略」者であれば、即座に次の回で「非協力」が返ってくるだろう。そうすると双方の得点はPだ。これが続くと、Pよりも高い得点があり得るので、「パブロフ」はまた行動を変え、「協力」を出す。相手が「しっぺ返し戦略」者であれば、その次から「協力」になり、双方とも、さきほどよりも高い点であるRがとれるようになる。

論文の著者たちによると、「パブロフ」は「しっぺ返し」よりも有効で、さらに高い得点をとったということだ。そこで、私は思ったのである。「パブロフ戦略」をとっている人間なんていたら、とんでもない嫌な奴に違いない！なぜなら、そんな人間は、ずっとお互いに協力関係を保っていたら、もしかして裏切った方がもっと高い点をとれるかもしれないと考えて非協力になるのだ。それで相手が怒ったら、「はい、すみません」と、また協力に変えるのだ。こんな人間は最悪で、みんなに嫌われて、信用を失うに決まっている。

このときが、私の「ころ」に対する興味の始まりだった。人間の利他行動を引き起こしている心理メカニズムは、決して「パブロフ」のようなものではない。人間のころがどのように働いているのか、そのメカニズムを知らなければ、結局のところ、行動生成のよいモデルも作れ

		プレイヤー 2 (相手の行動)	
		協力	非協力
プレイヤー 1 (自分の行動)	協力	R	S
	非協力	T	P

R,S,T,Pはプレイヤー1が得る得点

図1 囚人のジレンマゲーム



図2 ニホンザルの集団

ない。これが、私が進化心理学に興味を持つようになった1つのきっかけであった。

トリヴァースの互恵的利他行動は、シナリオの提案から30年たっても、動物がそのように行動しているという証拠がほとんど見つからなかった。私は、トリヴァースの互恵的利他行動の基準の中で、「もらったのに、次のときにお返しをしない個体がいれば、それを見分けて、そのような個体は次から排除するという能力がある」、というところが、

図3 チンパンジーの文化
タンザニア、マハレ国立公園のチンパンジーに固有の「文化」。このチンパンジーは、向かい合って、互いに高く上げた手を組み、もう一方の手で毛織いをし合う。このような姿勢で毛織いするのは、他の場所のチンパンジーでは見られない。



に、その社会生活は、囚人のジレンマ状況が想定しているようなものよりも、ずっと複雑になるだろう。そして、複雑な心理的計算が働くようになるだろう。事実、ニホンザルなどの霊長類の研究では、ニホンザルたちが互いのことを十分よく認識しており、2者間だけではなく、3者以上の連合の可能性も含めて、複雑な社会認識を持っていることが示された。だから、単なる繰り返しのある囚人のジレンマ状況などは、サル類の社会ですら、存在しないのである。

ヒトの「こころ」の素晴らしさ

そんなこんなで、ヒトの「こころ」が進化的にどのように作られてきたのかに関心を持つようになった。そこで、言語の起源や、信頼感情の起源などについて考えるようになったのだが、かつてチンパンジーの研究をしていた者として、どうしても解明したい問題があった。それは、ヒトは科学技術を発達させ、ビルを建て、ロケットまで飛ばしているが、チンパンジーはなぜまだ裸で森の中で暮らしているのか、ということだ。

その疑問を、私は初め、「ヒトとチンパンジーの脳の決定的な違いは

くせ者だと思う。

集団を作って暮らし、このような能力を備えた動物であれば、とたん

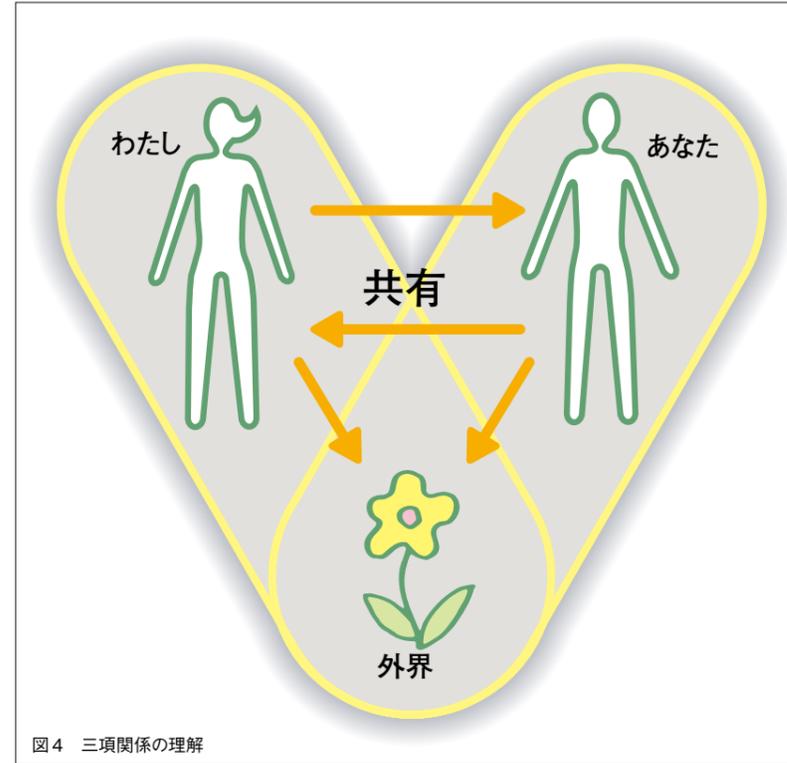


図4 三項関係の理解

何か？」というように置いていた。しかし、そうするとなかなか難しいのである。なぜなら、ヒトとチンパンジーは祖先を同じくしており、ヒトが持っている能力または「こころ」の性質の萌芽的なものはみな、チンパンジーも持っているからだ。簡単に明確な線を引くことはできない。

そこで、問題の設定を変え、「ヒトはロケットを飛ばすまでになったのに、なぜチンパンジーは、今でも森の中で裸で暮らしているのか？」としたのである。これほどの違いに至った原因と道筋は何なのだろうか？

それは、端的に言えば、ヒトが文化を持っているからである。では、文化とは何か？ 文化とは、遺伝情報とは別に社会学習によって個体間に伝達される情報であると定義される。こう定義すると、チンパンジーにも文化はある。ある1つの集団で、食物の取り方や挨拶の仕方が、遺伝ではなくて社会学習によって伝えられ、維持されているという事例はい

くつもあるのだ(図3)。

では、ヒトの文化とチンパンジーの文化はどこが違うのか？ ヒトの文化はどんどん蓄積され、更新され、発展していくが、チンパンジーの文化の発展の速度はきわめて遅い。では、ヒトの文化がどんどん蓄積され、更新され、発展していくもとは、ヒトの「こころ」のどんな特徴が関係しているのだろうか？ そこで行き着いたのが、言語と、互いの意図の了解と、共同作業である。ヒトは言語を持ち、互いに意図を了解しあって共同作業をするので、発展が速いのだ。

そこで問題は、言語と互いの意図の了解と共同作業とを可能にした「こころ」とはどんなものか、ということだ。まだ、解決が見ついたわけではないのだが、その有力候補は、「三項関係の理解」だろうと考えている。「私」と「あなた」と「外界」という3つの間の関係を、「私」と「あなた」で了解する、それが三項関係の理解だ(図4)。

言葉は、いろいろな物や事象に名前をつけ、「〇〇について」話すものだ。これは、話し手から聞き手への一方向のコミュニケーションではない。話し手が「〇〇について」語ったことを聞き手は理解し、話し手もまた、聞き手が理解したことを知る。そして、お互いに何について話しているかを理解し、相手のこころの中に何が描かれているのかを了解した上で、さらなる話がすすむ。了解が得られていないとなれば、了解に達しようとしてさらに話す。

動物のコミュニケーションは、普通はそうではない。信号の送り手は信号を送る。信号の受け手はそれを受け取る。受け手は、その情報いかにによって次の行動をとる。送り手も、その反応を見て次の行動をとる。しかし、「こういうことですよ」という互いの了解はないのだ。つねに、「私」と「外界」、「私」と「あなた」、「あなた」と「外界」の二項関係であって、三項関係ではないのだ。

三項関係の理解には、「心の理論」が潜んでいる。なぜなら、「私」が外界のものを見て、何かを思う。それを言葉で表すと、「あなた」は、その同じものを見ながら、「私」のこころの中で起こっていること、「私」のこころの中に描かれていることを想像し、それを、自分のこころの中で起こっていることと比べるからだ。「あの花はきれいですね」、「そうですね」という会話は、私とあなたとの間で、そこに花があるという事実の了解を共有しているだけでなく、花を見て私のこころが感じるごとと、あなたが感じるごととが同じであることをも共有している。たとえ答えが、「そんなことはありませんよ」というものであったとしても、「花について美しさの感覚を持つ」というこころの状態があること自体は、互いに了解しているのだ。

このことは、これまでの心理学で、「心の理論」という文脈で論じられてきた。「心の理論」とは、自分にも他者にもところがあり、それがヒトを動かすということを理解し、他者の視線や表情からそのヒトのこのころの状態を類推する脳の働きである。だから、「心の理論」は、三項関係の理解と密接な関係を持っている。私たちのところはこのような性質を持っているからこそ、同じ目的のために一致協力して共同作業ができる。それを積み上げることにより、文化を持ち、その文化を更新し、世界を変え、文明を築いてきた。

分業と交換と貨幣

それではここで、人間のこの能力がどういう結果をもたらしたか、私が最近考えていることを述べてみたい。

先に述べたように、ヒトは三項関係を理解し、互いのところの中に描かれている思い、意図、欲求、認識を共有することができるので、一致協力して共同作業ができる。共同作業ができるということは、分業ができるということだ。

直立二足歩行する人類の祖先は、およそ700万年前に出現した。私たちが属する種であるホモ・サピエンスは、およそ14万年前に出現した。そして、およそ1万年前に農業と牧畜とが始まるまでずっと、人間は狩猟採集生活をしてきた。これは、周囲の自然にある食べ物をとることで毎日の食事をまかない、何も貯蔵せず、定住もしない暮らしである。人類の歴史の99パーセントが、このような暮らしだったのだ。

現代のような社会では、分業は当たり前であるが、狩猟採集の社会だって分業の社会である。しかし、狩猟採集社会では、分業はあっても、「専門化」はしていない。たとえば、

ある人が食糧の採集に行っている間に、別の人がキャンプに残って子どもの世話をし、火を起す、道具を修理する、ということをする。これは、確かに分業だ。しかし、「子どもの世話をし、火を起す」専門の人がいるわけではない。誰もがいろいろな仕事を時と場合によってこなしているが、結局のところ、誰もが何でもできるのである。

それがそのうち、分業だけではなく「専門化」が起きてきた。道具を作る専門家は、道具ばかりを作っている。ほかの人は、その道具が作れない。その道具が欲しいなら、その人のところへ行ってもらってくる。そのかわり、その人は、自分で食糧を取りにいかなくても、みんなに支えてもらえただろう。つまり、専門化が成り立つには、物やサービスの交換がなければならない。ヒトという生物に三項関係の理解があれば、交換という行為は、ヒトの生活の初期からあったはずだ。狩猟採集生活でも、珍しいものを食糧などと交換することはあった。それでも、専門化を日常的に含む共同生活が成り立つには、人口が多くなければならない。それは、都市文明の発展以後だろう。

専門化が進んだ社会では、個人は、少ない数の専門作業しかできず、他の作業はできなくなる。そこで、それぞれの専門化した人々が生活を成り立たせていくには、共同社会の中で、誰もがサービスの交換にかかわることが必須となる。そこに貨幣というものが出てくると、また、社会の新しい段階が出現したに違いない。

貨幣は、ものの価値を抽象的に表すものだ。「100円」というのは、価値が同じならば何とでも交換することができる。パン1つでも、プラスチックの洗濯バサミでも、なんで

もよい。こういう抽象的な交換価値を表す尺度が出てきたとき、私は、人間の生活が大きく変容するきっかけが生まれたのではないかと思う。

物々交換やサービスの交換で共同作業をしていたときには、望むものを得るには、いろいろな社会関係の中で交渉しなければならない。希望の合う人どうしをみつけ、都合をつけ合う。何と何を交換するかも一律に決まっているわけではないので、交換する人どうしの社会的関係しだいだ。

しかし、貨幣経済の社会になると、話がずっと簡単になる。なぜなら、貨幣は抽象的な価値を表しているからだ。100円払う人が欲しい「物」と100円もらう人が欲しい「物」は、まったく一致していなくてもかまわない。全然違う欲求を持った2人が、なんの緊密な社会関係を持たなくても、即座に100円を介して満足できる。

貨幣経済の発展と社会関係の希薄化

貨幣経済のもとで人々が分業すると、たいへん効率よく事が進むので、やがて科学技術が発展する。人々が欲しいと思うものを作り出す技術があると、ますます多様なものが商品として出てくる。食糧も、衣類も、装飾品も、移動も、娯楽も、ニュースも、教育も、宗教も、事務仕事も、安全対策も、あらゆる「必要」は商品となる。お金さえあれば、何でも手に入る。

家の中には家庭電気製品が充満し、家事の多くを自分でやらなくてよくなる。子どもの教育は学校という専門家にまかせ、葬式は寺という専門家にまかせればよい。人々の暮らしは、何千何万という特化した専門職業に分かれ、他の何千何万という専門職業の人が生み出したものを

お金で手に入れて成り立つようになる。相変わらず、人間は緊密な共同作業の社会に住んでいるのだが、お金を稼ぐのが目先の目標なので、他人と共同作業で生きているという実感が薄くなる。お金さえあれば、誰の助けも借りずに生きていけると錯覚するようになる。

こうして貨幣経済が高度に発達した科学技術文明社会になると、どうなっただろうか？ 人々が生きていくために、濃密な社会関係を必須とする状況がどんどん減ったのだ。狩猟採集社会では、食糧を取りに行くには、みんなで一緒に働かねばならなかった。つい一昔前まで、自分の特別な必要を満たすためには、誰かに頼まねばならず、何かを教わるには他人に聞かねばならず、遊びだけ

れば仲間を見つけねばならず、ニュースを知りたければ、人とうわさ話をしなければならなかった。どこか遠くに行けば、誰かのところに泊ってもらわねばならなかった。よくも悪くも、人間は、社会関係のネットワークの中に入っていなければ、文字通り、生きられなかった。

それが、今では、コンビニで食料を手に入れ、インターネットであらゆる知識やニュースを手に入れ、ゲーム機で一人で遊ぶことができる（お金さえあれば）。お金で他のことは何もできなくても、ミニマムの人付き合いしかなくても、生きていける。職場でも仕事の細分化が進み、ある1つのことに特化する。電話ではなくてメールが普及する。ますます、濃密な社会関係は必要なくなる(図5)。

ありとあらゆる欲求の対象がすべて「商品」として存在し、社会関係などなくても生きていける状態を作

り出したのが、科学技術文明ではないだろうか？ もちろん、人間は本来、他者とのコミュニケーションが欲しいものだ。社会的なつながりを欲するものだ。だから、今でも、人々はいろいろなところに社会関係を求め、コミュニケーションがなければ不幸を感じる。しかし、現代社会では、生きていくために社会関係が必須である度合いは、昔よりもずっと少なくなった。一方、現代社会は、そんな社会関係のネットワークからはずれ、お金だけを介してしか社会とつながっていないという状態の人々も生み出した。

人間疎外、生活の空洞化、社会関係の希薄化、地域コミュニティの崩壊、社会的コミュニケーションの不足といった問題は、あらゆる個別の欲求をお金で満たせるように仕向けてきた、この文明の、当然の行き着くところなのであると思う。「私」と「あなた」と「外界」の三項関係を認識し、他者のところに共感し、ものを交換し、共同作業をすることができるのが人間の特徴である。その行き着くところが共同社会の崩壊を導いていると思うのである。



図5 ヒトの文化とところの進化

論考

現代キーワードとしての「共生」

湯本貴和 Takakazu Yumoto

(総合地球環境学研究所教授・植物生態学)



「共生」の氾濫

昨今の日本で極めて氾濫していることばのひとつに「共生」がある。新聞などに現れる「共生」を拾い上げてみると、ざっと以下ようになる。国際社会との「共生」、異文化との「共生」、他民族との「共生」、農山漁村との「共生」、地元住民との「共生」、高齢者との「共生」、森(あるいは海、湖)との「共生」、野生鳥獣(たとえば、トキ、ハブ、サル)との「共生」、病との「共生」、ペットとの「共生」、ロボットとの「共生」、家族との「共生」、飼い主のいないネコとの「共生」、火山との「共生」、米軍基地との「共生」、原子力発電所との「共生」……。この現況は、大学の新設学部や学科再編時の名称に「共生」が頻繁に使用されることによっても裏づけられる。

では、この現代日本のキーワードである「共生」ということばは、そもそもいつ、だれが導入し、もともと何を意味するものであったのだろうか？

生物学における「共生」

「共生」という概念は、もともと生物学の概念からスタートしている。

日本で最初に生物学の「共生(棲)」という術語を世に広めたのは、石川千代松の『動物の共棲』(1903)である。石川千代松(1860-1935)は東京大学理学部生物学科の第3回卒業生であり、動物学教室生みの親である初代教授 Edward Morse の薫陶を受けて、のちに東京帝国大学農科大学教授を務めた。石川は Morse の講義録である『動物進化論』(1883)

を訳出し、『普通教育昆虫学教科書』(1902)を著した。これらの著作活動は、この時代の生物学知識の普及に大きく貢献した。

『動物の共棲』は自然界で異なる生物が助け合う現象について紹介するものであり、いまでは中学校の理科や高等学校の生物の教科書に載っているような、ヤドカリとイソギンチャク、アリとアリマキ、カツオノエボシとエボシダイなどの例が図入りで示されている(図1)。石川の紹介した「共生」は、『動物の共棲』には明示されていないが、symbiosis の訳語であると考えられる。これは、異種の生物と一緒に生活している現象を指し、もっとも広い解釈では、相利共生、片利共生、寄生の3つを含んでいる。先にあげた例はすべて相利共生、つまり一緒に生活することで双方が利益を得ている場合である。たとえば、自分では移動できないイソギンチャクはヤドカリに付着することで移動することができて、ヤドカリはイソギンチャクの食べ残しをもらうとされる。

英国系の研究者では、かなり初期の段階から symbiosis を相利共生に限って用いることが多く、さらには、一緒に暮らす生物の体組織が互に入り組みあって生理的な結びつきが成立して、互いに互いの存在なしでは生きていけない義務的共生 obligatory symbiosis のみに限定して用いられる場合すらみられた。義務的共生の例としては、サンゴとその細胞内に住んで光合成産物や窒素固定物をサンゴに供給する褐虫藻や、植物とその根に侵入して菌根を形成する菌類などである。この現象から得られたアイデアは、のちに Lynn Margulis (1981) によって、真核生物の細胞内小器官である葉緑体やミトコンドリアは、もともと異なる原核生物が細胞内で共生したことを起源とする、という共生進化説

に発展していく。

では、石川のとっていた立場はどうであろうか。『生物の共棲』の緒言には、「此の類のもので最も面白いのは、一つの動物又は植物が他の動物又は植物と一緒に生活して居ることであるが、然し此の生活は一方に利益があつて他方に害がある様な寄生ではなくて、相方に利益があるから、之を共生と云いますが、其の最も発達したのものになると一緒になった二つの生物が、すっかり結びついて仕舞て調度野郎が造った人魚の様一種の複合体が出来て其の各生物は最早や別々には生活して居ることが出来ない様になったのであります。然し之は最も極端な場合で此の様なものになる迄には色々階級があつて其の内には中々面白い生活現象があります」と述べている。このことから石川の考えている「共棲」は、寄生を排除した、相利共生から義務的共生までの連続的な範囲を想定するゆるやかな英国流の考え方があったことがわかる。現代日本の用語法に鑑みると、この捉え方が日本における「共生」概念の基礎にあることはまず間違いない。

相利共生という一般にイメージされるのは、異種の生物がお互いに助け合う姿である。植物は食べ物に困っているハナバチに花蜜を提供する。それに対してハナバチは植物の花粉を運んであげる。ここには弱肉強食や生存競争といった厳しい世界ではなく、互いにいたわり合い、助けあう相互扶助の穏やかな世界がイメージされている。実際、競争や捕食を中心として形成されてきた生態学理論のアンチテーゼとして相利共生を掲げるという論法も、程度の差はあれ、横行してきた。それが延長されて、しばしば「すべての生き物は、お互いに助け合って生きていく」、「どんな生物も世の中(あるいは生態系)に役立っていないもの

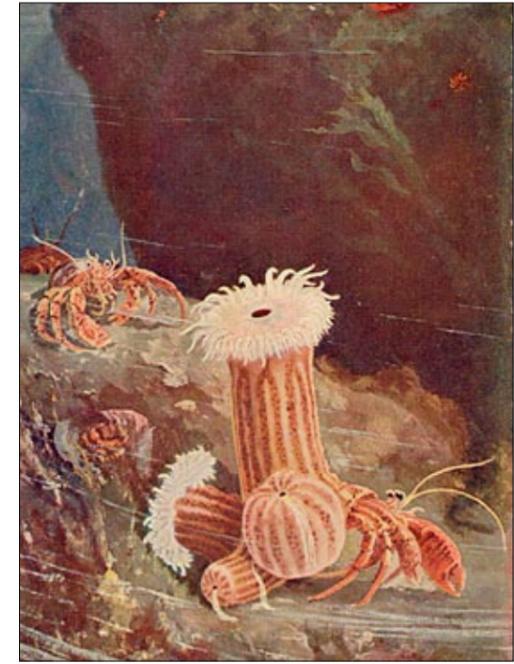


図1 ヤドカリとイソギンチャク 石川千代松『動物の共棲』(1903年)より

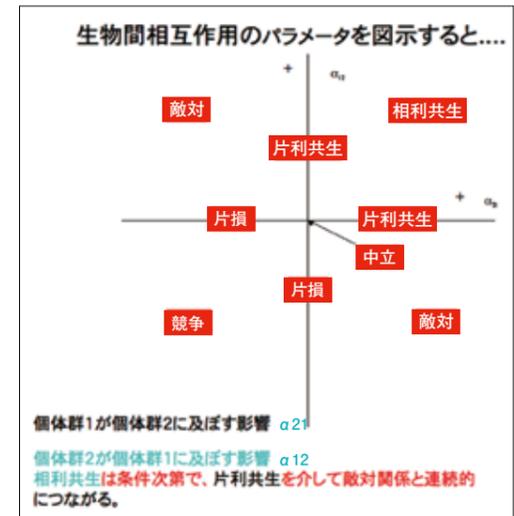
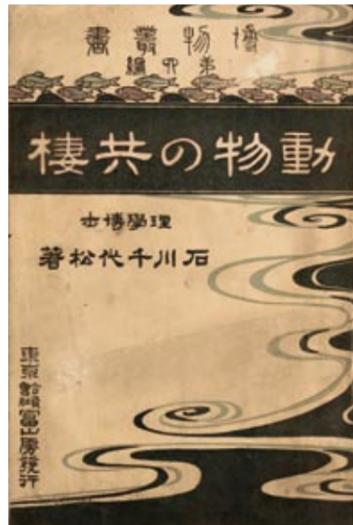


図2 生物間相互作用のパラメータ



石川千代松『動物の共棲』(富山房、1903年)

はない」という世界観に至る。先の Lynn Margulis と共同して Jim E. Lovelock が至ったガイア仮説(地球自体がひとつの生命体であり、生物と無機環境との間の相互作用で進化している)という考え方(Lovelock, 1979)は、その極致に立つものであろう。

「共生」概念の整理

冒頭に挙げたさまざまな現代日本の「共生」ということばの意味を考えると、生物学的には異なる、義務的共生 obligatory symbiosis、相利

共生 mutualism、共存 coexistence という3つの術語が区別されずに使われていることがわかる。違いを確認しておくこと、以下ようになる。義務的共生とは、ふたつの生物がしばしば体組織すら共有して、常に他方の存在なくしては生存不可能な関係である。相利共生とは、損得関係で結びつく随時的な関係で、条件次第では敵対や片利共生に移行する可能性のある関係である。そして共存とは、敵対、競争、相利共生、片利共生、片損を問わず、一時的あるいは永続的に共に存在することで

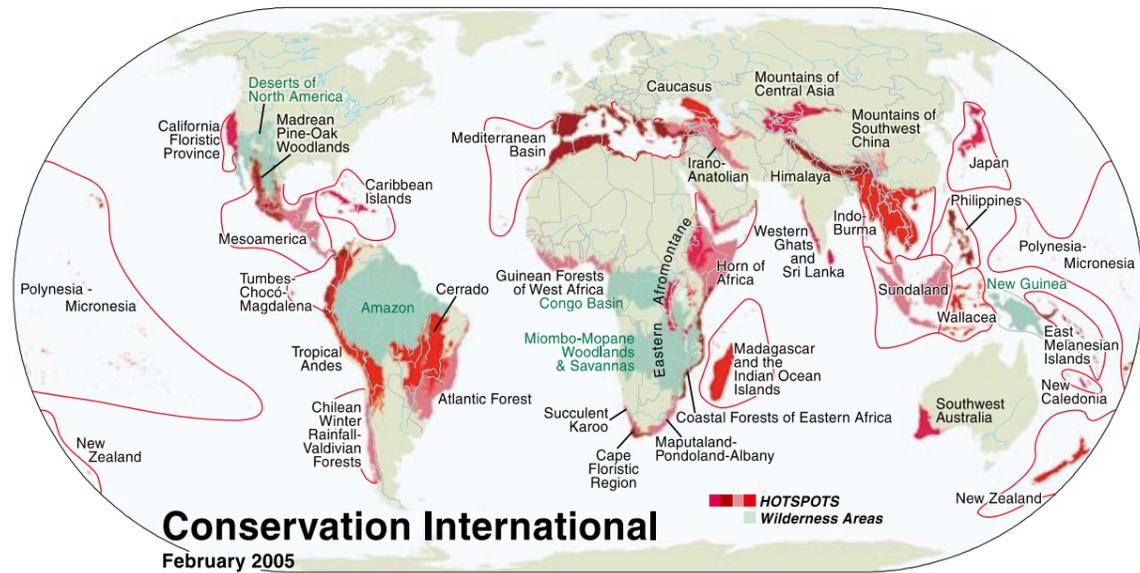


図3 日本列島は生物多様性ホットスポット(コンサベーション・インターナショナル(<http://www.conservation.or.jp>)提供)

ある(図2)。

寺尾五郎は『「自然」概念の形成史』(2002)のなかで、「生態学者は幼稚な思い入れで、“あれも共生、これも共生”と言い過ぎるが、その大部分は虚構の妄想である」、「多少とも相利共生と見なしうるのは、サンゴ類と藻類、シロアリと鞭毛虫、マメ科植物と根粒バクテリアのようなものに過ぎない」と述べている。ここで寺尾のいう相利共生は、本論でいう義務的共生に当たっていて、損得関係で結びつく随時的な相利共生ではない。ただ、寺尾も指摘しているとおり、「共生」ということばが冷徹な現実を覆い隠す美辞麗句として、本来、どちらかといえば敵対下での共存であるはずの、米軍基地や原子力発電所との関係を粉飾するために使われているという感否めない。

現代日本の「共生」言説で、非常に広く、また深く浸透しているのは、もともと人間と自然はうまく「共生」してきたが、現代になってその「共生」が崩れて地球環境問題が起きていくとするものである。これは、進

歩史観とその裏返しであるニューエイジ史観(現代文明・性悪論、「自然に帰れ」論)が、大きく影響を与えていると考えられる。この「共生」は、調和 harmony ということばでも置き換えられ、日本に独特のものではなく広く欧米社会にもみられるものである。すなわち、前近代までは、自然と人間は調和的な関係であったが、産業革命後に調和が乱れたということ、さらには、地球環境問題を解決するためには、調和を取り戻すことが必要である、という考えである。日本で典型的には、縄文ユートピア論や江戸時代循環社会論などとして現れる。

寺尾は『「自然」概念の形成史』において、「自然」というものをひとくりにして人間との関係を論じることがそもそもナンセンスであるとしている。自然に存在している生物間にはそれぞれ利害対立があり、人間が一方の生物の味方をするとならば他方の生物の敵として振る舞わなければならない。したがって、人間と「自然」との「共生」を論じることは不可能であるとしている。

アメリカ合衆国に本部を置く世界的なNGOであるConservation Internationalは専門家約400名の調査と検討の結果として、生物多様性が豊かで、かつ危機に瀕している34のホットスポットのひとつとして、日本列島を指定した(<http://www.biodiversityhotspots.org/xp/Hotspots>)(図3)。日本列島は他のホットスポットとなっている地域と異なり、先史時代から一貫して人口密度が高い場所であり、人手が入っていない原生的自然と呼べるものは非常に限られている。にもかかわらず、このような豊かな自然が残っているのは、人間が自然資源や土地を利用する際に、自然を持続的に利用する智慧があったからだという論が、今日になって盛んである。そして、日本では節度のある人間活動があったからこそ、多様な生物種が残っているのだという論調が目立つ。たとえば、里山が生物多様性を守ってきたのだという主張がそのひとつの典型である。

もちろん、民俗誌をみても自然あるいは生物資源を枯渇させない智慧

や制度が前近代に存在し、それが地域によってはごく最近まで保持されてきた(たとえば、野本, 1994)ということは事実であろう。しかし、樹木のような消費後の再生に時間がかかる資源に関していえば、近畿地方では、まず古墳時代に耐水性があって材質が最良であったコウヤマキが木棺として大量に消費されて資源として枯渇し、つぎに奈良-平安時代に都城を築いて記念碑的な建物を築造した時期にヒノキの大径木が枯渇した(Totman, 1998)。さらに日常の煮炊きを使う薪炭利用や大量に燃料を消費する製鉄や窯業の発達によって、京都近郊は室町時代にははげ山になってしまったことも、華洛一覽図などの解析で明らかとなってきている(小椋, 1992)(図4)。ここであえて強調したいのは、日本でも生物資源の枯渇ということが現実に起こっていて、そこでは持続可能な資源利用という智慧は働かなかったのだ。

日本列島の歴史のなかで、自然あ

るいは生物資源を持続的に利用していくという智慧がどの程度普遍的であったか、あるいは、どのような社会・経済的な条件がそうした智慧が広がることを促進し、逆にどのような条件で智慧が顧みられなくなるかなどの諸問題について、学際的研究によって検証していくことが、従来の歴史的「共生」論を超えて、人間と自然との関係を明らかにしていくうえで必要であると考えている。現在、わたしが総合地球環境学研究所において5年計画で実施している「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」、略称「日本列島プロジェクト」では、考古学、文献史学、民俗学などの歴史諸学、さらに自然科学の研究者を加えた130名あまりでこの課題に挑んでいる。このような歴史的・文化的検討こそが、日本あるいは世界の自然や生物多様性を今後どのように保っていくのか、人間と自然との関係はいかにあるべきなのかを考える指針を導きだしていくと信じている。

参考文献

石川千代松『動物の共棲』富山房、1903年、Pp.161。
 Lovelock, J. E., *Gaia: A New Look at Life on Earth*, Oxford University Press, 1979, Pp.152. (日本語訳はスワミ・プレム・ブラブタ訳『ガイアの科学 地球生命圏』工作舎、1984年。)
 Margulis, L., *Symbiosis in Cell Evolution*, W. H. Freeman, 1981, Pp.419. (1992年刊行第2版の日本語訳は永井進訳『細胞の共生進化』第2版、学会出版センター、上:2003年、下:2004年。)
 野本寛一『共生のフォークロア』青土社、1994年、Pp. 344。
 小椋純一『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣、1992年、Pp. 238。
 Totman, C., *The Green Archipelago, Forestry in Preindustrial Japan*, University of California Press, 1989, Pp.297. (日本語訳は熊崎実訳『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書館、1998年。)
 寺尾五郎『「自然」概念の形成史』農文協、2002年、Pp.332。



図4 『華洛一覽図』(横山華山画、文化5年(1808)、龍谷大学蔵)

論考

「依存症・溺れるところ」を探る

松岡俊行 Toshiyuki Matsuoka

(京都大学医学研究科特定准教授)



存症、薬物依存症、ギャンブル依存症、買い物依存症、セックス依存症、ネット依存症、共依存症……。違法な物を除き、酒、タバコ、薬、賭け事、買い物、セックス、インターネット等は、本来なら質の高い快適な生活をサポートするためのものである。これらの対象に対して、人は多かれ少なかれ依存の傾向を持つが、その行為が本人の意思で制御可能であり、行為の結果、心がリフレッシュされ次なる目標に邁進できるのである。歓迎されるべきものである。しかし、依存状態が高じ、行き過ぎて、体を壊すまでの飲酒や喫煙、自己破産するまで賭博をする等の状態になってしまうと、まっとうな社会生活を送れない。これら典型的な依存症の状態では、人間関係、家族関係、経済状態、健康が侵され、底なしの地獄にどこまでも落ちていく。

人は誰でも心の中に自分なりの嗜好、こだわり、強迫性、依存性を持っており、これらに基づいて行動する。行動決定には学習や報酬が重要であるが、この論考では、依存症に至る過程には典型的なパターンがあり、その本態が報酬系を司るドーパミン神経系の制御不全であるという最近の研究知見について紹介し、依存症という病気が、けっして本人の意思の弱さの問題ではなく、誰でも陥る可能性のある病気であるという認識を持つことが大切であることを論じたい。

2 依存症の蔓延

依存症は、WHOの専門部会が提唱した概念で、精神に作用する化学物質の摂取や、ある種の快感や高揚感を伴う特定の行為を繰り返して

た結果、それらの刺激を求める抑えがたい欲求が生じ、その刺激を追い求める行動が優位となり、その刺激がないと不快な精神的・身体的症状を生じる疾患のことである。一般的には、中毒 (toxication) と称されることも多い(“アルコール中毒”、“薬物中毒”、エルビス・プレスリーの“ドーナツ中毒”など)が、医学用語として使われる中毒は、「毒に中る」の意味であり、依存症とは異なる。また、嗜癖 (addiction) は、「ある習慣への耽溺 (対象物にふけりおぼれること)」、「はまって」しまった状態のことを指し、医学上は依存症か軽度の依存傾向のことを意味する。『Addicted to you』という宇多田ヒカルの曲があるが、「はまって」しまった人の心理状態を如実に描写している。

一昔前は、依存症と言えばアルコール依存症と相場は決まっていたが、近年、急速にその対象が広がりを見せている。大量消費社会と言われるように対象が増え、情報化により対象へアクセスしやすくなっていることも一因である。依存は、対象の性質に基づき3つに大別され、物質への依存 (酒・タバコ・麻薬・覚醒剤・向精神薬・睡眠薬など)、過程への依存 (ギャンブル・買い物・仕事、ケータイメール、インターネット、ゲーム、性行為、痴漢、万引、自傷)、人間関係への依存 (家族、恋人、世話型、DV (ドメスティック・バイオレンス)、児童虐待、パトロン、教祖、女王様、王子様、職場 (ゆがんだ上下関係による支配や束縛))がある。このようにさまざまな依存対象があるが、いずれも依存者に対して快感をもたらすという共通の特徴を持つ。酒は酔いの中で高揚感や陶酔感をもたらし、ギャンブルは勝つことで達成感と有能感を、買物は店員からの称賛を、献身的な愛は崇高な自己に対する陶酔感をもたらす等、一時の快感を得ることができる。この時、脳内では神経伝達物質ドーパ

ミンが分泌され、報酬系が賦活され、快の感覚を生じさせている。この快の感覚が条件づけ刺激になり、「またあの快感を味わいたい」という欲求が生じる。そして、快を求めて繰り返され、より強い刺激を求め、やめようとしてもやめられない自己制御不能の状態に陥る。

このように、依存症形成には決まったパターンがあり、根底には共通の発症メカニズムがあると考えられる。依存症形成のメカニズムは、実験動物 (マウス、ラット、サル) に薬物を投与した際の行動を指標として精神的に研究され、詳細が分子レベルで語られるようになってきている。以下に、薬物依存形成メカニズムの解析に用いられる行動薬理学的研究手法と最近の知見の一部を紹介する。

3 薬物依存

薬物が示す多幸感および陶酔感を経験し、薬物乱用を繰り返すことにより「自己制御が困難になった生物学的状況」を薬物依存という。最近では、大学生の大麻汚染が報道され話題になっているが、依存性の高い薬物にはさまざまなものがある。作用機序から、興奮系、幻覚系、抑制系の3つに大別できる。興奮系のもので、覚せい剤 (メタンフェタミン、アンフェタミン)、コカ

イン等があり、いずれも脳内のドーパミン量を増加させる。幻覚系薬物には、LSD、大麻、マジックマッシュルームなどがある。LSDは、合成麻薬であり、リゼルグ酸ジエチルアミドのドイツ語名「LysergSäure-Diethylamid」の略称、セロトニンの作用を阻害する。大麻の主成分は、薬理作用を持つインドアサ (cannabis sativa) 等の花頭部や葉に含まれる 1- Δ -tetrahydrocannabinol (THC) であり、大麻草の葉を乾燥させたものがマリファナ、大麻樹脂がハシッシュと呼ばれ、カンナビノイド受容体に作用する。抑制系薬物は、麻薬 (アヘン、モルヒネ、ヘロインなど)、向精神薬 (精神安定剤など)、有機溶剤 (シンナー、トルエンなど) であり、神経細胞の活動を抑制することで多幸感や酩酊感を生じさせる。詳細な薬理作用は成書に譲るが、いずれの薬物も多幸感および陶酔感などのヒトを魅了する効果を発現させるものであり、最終的には報酬系を司るドーパミン神経系が賦活され、薬物乱用の誘因となる。

繰り返し依存性薬物の摂取を行うと慣れが生じ、今までと同じ量ではあまり効果や刺激を得られなくなる。これを「耐性」と言い、同等の効果を得るために使用量がどんどん増えていく。さらに進むと、使用を中止すれば焦燥、不安、睡眠障害、興奮、易刺激性などが生じるように

なり、何ものをも犠牲にしてもその薬物を手に入れようとする強い、強迫的な渴望が起きる状態となる。この状態を「精神依存」と呼び、薬物を使うこと以外に何も考えられなくなる。また、薬物への長期曝露は、生体の恒常性維持機能が働くことで薬物の効果を相殺する代償性変化を起こす。このように身体が薬物の存在している状態に適応した状態を「身体依存」と言い、使用を中止することで手がふるえる、冷や汗が出る、眠れない等の退薬症候を示す。このように、薬物を乱用すると、薬物にココロとカラダの両方が支配される状態となる。耐性が、多幸感など使用者が求める薬物の一部の効果にのみ生じるのに対し、使用者が欲しない効果である幻覚、幻聴、妄想に対しては、これと反対の薬物の反復投与によって効果が強くなるという「逆耐性=感作 sensitization」という現象がおこる。このようにして、薬物依存症では統合失調症様の症状が現れると考えられている。薬物依存形成のサイクルを図1に示す^{*1}。

4 報酬系は正の強化回路である

報酬系とは、欲求が満たされたときに活性化し、その個体に快の感覚を与える神経系のことである。欲求には、喉の乾き・食欲・体温調整と

1 はじめに

日本は戦後の経済発展により、物質的に大変豊かになったが、人のここは必ずしも豊かにはなっていないように思われる。ストレスに対する精神面の脆弱性を反映してか、「依存症 (dependence)」という言葉がメディアによく登場するようになった。アルコール依存症、ニコチン依

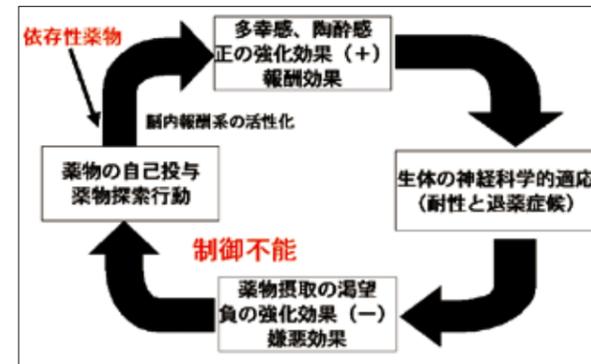


図1 薬物依存のサイクル (文献1より引用)

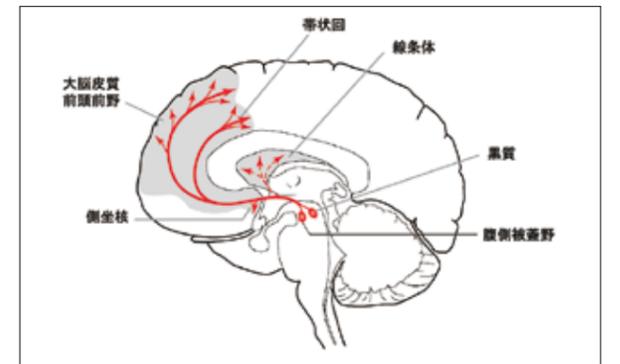


図2 報酬系:中脳の腹側被蓋野から側坐核、大脳皮質に投射するドーパミン神経系回路 (文献2より引用・改変)

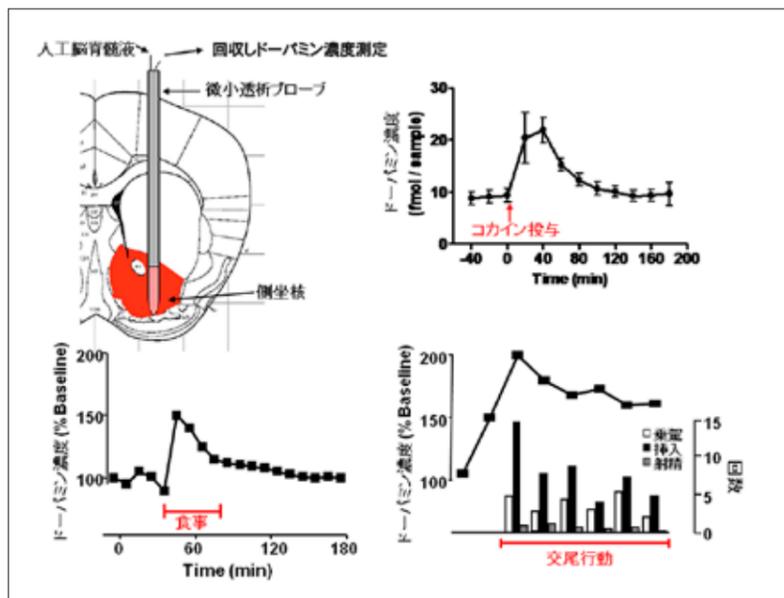


図3 マイクロダイアリシス法を用いた局所ドーパミン濃度測定 (上段 資料提供 京都大学医学研究科 北岡志保博士、下段 文献3、4より引用・改変)

いった生物学的で短期的なものから、他者に誉められること・愛されること・育児など、より高次で社会的・長期的なものまで含まれる。動物の脳内に電極を埋め込み、レバーを押すと電気刺激が起こるような実験(脳内自己刺激)を行うと、電極の位置によっては好んでレバー押しを続けるようになる。すなわち、電気刺激により快感が引き起こされると考えられる。このようにして、報酬系は中脳の腹側被蓋野から側坐核、大脳皮質前頭前野に投射するドーパミン神経系であることが同定された(図2)^{*2}。実際、動物で側坐核における局所ドーパミン濃度を測定すると、コカイン投与や食事、交尾行動の際に濃度が上昇する(図3)^{*3,4}。すなわち、ドーパミンが放出されることで快中枢が刺激されているのである。また、報酬系が活性化するのは、必ずしも欲求が満たされたときだけではなく、報酬を得ることを期待して行動をしている時にも活性化することが分かってきた。薬物依存患者では、コカインのビデオを見ただけで、報酬系が活性化するのであ

る(図4)^{*5}。また、思いがけない報酬を強く記憶し、同じ行為を繰り返

すように指令を出す脳の傾向があることもわかり、ギャンブル依存症との関連も示唆されている。

5 薬物依存性の評価法

実験動物を用いて、薬物の依存性を評価する方法としては、薬物自己投与試験 (Drug Self-administration)、条件付け場所嗜好性試験 (conditioned place preference)、薬物弁別試験 (drug discrimination) 等がある。

薬物自己投与試験では、動物がレバースイッチを押すと静脈内あるいは胃内に留置されたカテーテルを介して一定量の薬液が体内に自動注入される(図5)。薬物の強化効果を比較するために、薬液を摂取することに次の摂取に必要なレバー押し回数を一定の比率で増加させ、最後の摂

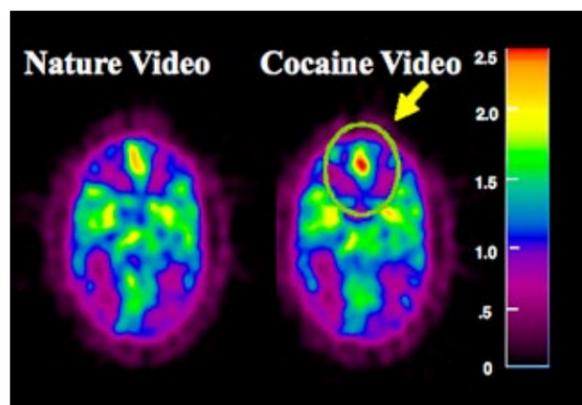


図4 薬物依存患者では、コカインのビデオを見ただけで報酬系が活性化する(文献5より引用)

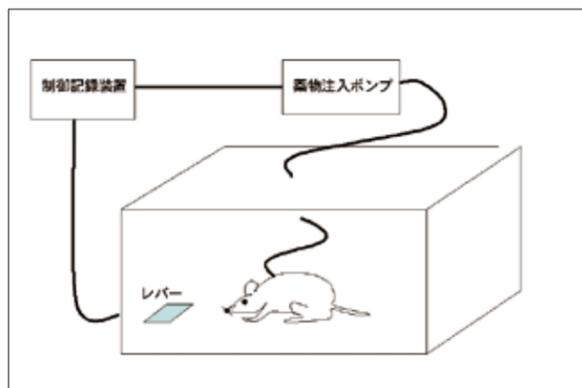


図5 薬物自己投与試験

取に要したレバー押しの回数(最終比率)を強化効果の強さの指標とする比率累進実験法が用いられる。依存性の強い薬物を用いて実験を行うと、動物は薬物が欲しいためにレバーを押し続け、最終的には、一晩中、エサも食べず、水も飲まず、ひたすらレバーを押し続けるようになるという。

条件付け場所嗜好性試験は、薬物の精神依存性を報酬効果から予測する方法として注目されている。実験では、薬物の条件付けを行うため、環境の異なる2つの部屋を準備する。2つの部屋の一方(薬物部屋)において繰り返し薬物を投与すると、薬物フリーでも、薬物部屋を好むようになる。

薬物弁別試験は、薬物摂取時の自覚効果を利用して、依存性薬物との類似性を解析する方法である。まず、一方が薬物、他方が溶媒に対応する。次に、レバーの実験装置を用いて、動物が薬物を弁別できるよう訓練する。その後、薬物の代わりに被検物質を投与し、動物が薬物レバーを選択すれば、被検物質は薬物と類似した弁別効果(自覚効果)を有することが明らかになる。

近年、さまざまな遺伝子改変マウスを用いて、これら薬物依存性の評価法による検討がなされており、薬物依存形成メカニズムが遺伝子レベルで明らかになってきている。今後、薬物、薬物依存形成メカニズムの研究は飛躍的に進むものと期待される。

6 ドーパミンシグナル伝達の研究

ドーパミンシグナル伝達の異常、特に、D2型ドーパミン受容体(D2DR)の機能低下は、統合失調症や薬物依存、気分障害の一因であると考えられている。実際、薬物依存の患者ではD2DRの発現が少ないこ

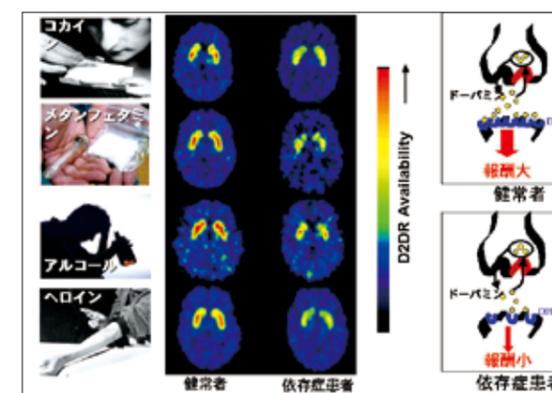


図6 薬物依存の患者ではD2DRの発現が少ない(文献6より引用・改変)

とが報告されている(図6)^{*6}。また、ドーパミンがD2DRに作用すると、細胞内のcAMPの量が減り、細胞内へ情報が伝達されることが知られていたが、最近、D2DRがPar-4という蛋白質と相互作用しcAMPシグナル伝達を制御する経路や、プロテインホスファターゼ2Aの複合体を介した新たなD2DRシグナル伝達経路が同定されてきている^{*7,8}。詳細は原著を参照されたい。このようなドーパミンシグナル伝達の複雑性は、有効で副作用の少ない、より特異的な治療薬を開発できる可能性を示唆している。

7 おわりに

報酬系は、学習や環境への適応において重要な役割を果たしており、物を獲得することが大変な時代には、種の存続のためには必要不可欠なシステムであったと想像できる。生物の長い進化の歴史のなかで、現代のように物や情報が溢れている時代というのは未体験ゾーンであり、新たな適応が必要なかもしれない。現代資本主義が生むコモディシャリズムは、消費を促す社会を作り、人々は常に消費へと駆り立てられる。依存症という病気は、時代が生み出した病気と考えることもでき

る。依存症の蔓延は、足ることを忘れた現代人に対する警鐘であり、新たな時代におけるバランスの取れた「こころのあり方」を構築する必要性を示唆しているのかもしれない。本稿を通じて、一般の方々に「依存症」という病気が広く理解、認識され、多くの依存症患者やその近親者が適切な治療やカウンセリングにより苦しみから解放されることを願っている。

参考文献

- 1) Funada M, Aoo N., *Nippon Yakurigaku Zasshi*. 2007;130:128-33.
- 2) Hyman SE, Malenka RC, Nestler EJ., *Annu Rev Neurosci*. 2006; 29: 565-98.
- 3) Bassareo V, Di Chiara G., *Neuroscience*. 1999; 89: 637-41
- 4) Fiorino DF, Coury A, Phillips AG. J., *Neurosci*. 1997;17: 4849-55
- 5) Childress AR, Mozley PD, McElgin W, Fitzgerald J, Reivich M, O'Brien CP. *Am J., Psychiatry*. 1999;156:11- 8 .
- 6) NIDA (National Institute on Drug Abuse) ppt file titled "Addiction: It's a Brain Disease Beyond a Reasonable Doubt."
- 7) Park SK, Nguyen MD, Fischer A, Luke MP, Affar el B, Dieffenbach PB, Tseng HC, Shi Y, Tsai LH., *Cell*. 2005; 122: 275-87.
- 8) Beaulieu JM, Marion S, Rodriguiz RM, Medvedev IO, Sotnikova TD, Ghisi V, Wetsel WC, Lefkowitz RJ, Gainetdinov RR, Caron MG., *Cell*. 2008;132:125-36.

座談会 こころというブラック・ボックス

パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳など多くの分野で画期的な業績を残してこられた長尾真先生をお招きし、現在、館長を務めておられる国立国会図書館の役割や翻訳システム、こころの捉え方、アジア的価値観などについて語り合った。

長尾真 (国立国会図書館長、京都大学元総長・名誉教授)
吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
船橋新太郎 (こころの未来研究センター教授)

●国立国会図書館の現状●

吉川 長尾先生は国立国会図書館の館長をなさっていますが、国立国会図書館は、日本で出版されたものは全部集めるといっているのですか。

長尾 そうです。国立国会図書館法に、国内で発刊された出版物はすべて国会図書館に納入することとあって、出版した人が納めるべき義務を負っています。納めなければ罰金を課すこともできます。実際には課したことはありませんが。この法律があるので、うちの職員は出版されたものは100%届いているはずだと思って、何もしていなかったのですが、私が館長に就任して調べてみたら、普通の出版物では全体の9割、官庁出版物では8割くらいしか納められていません。大学の出版物では、私立大学が8割、国立大学が7割程度です。自治体の出す資料にいたっては4割しか来ていないんです。頭を下げて頼みに行っても集める努力をしないかぎり、100%なんて絶対に集められない。

自費出版や社史もなかなか納入されません。社史というのは、その会社のことだけでなく、業界の歴史などいろいろなことがわかるので、一生懸命集めるように、と言っています。国民には出版物を国会図書館に納入する義務があるということをお知らせしていただければいいということで、「納本制度の日」というのを5月25日に決めて、新聞で大々的にキャンペーンをしたりしています。

吉川 私も国立国会図書館法という法律のことはよく知りませんでした。

長尾 みなさんがあまりご存じないだろうと思う国立国会図書館のもう1つの重要な機能は、国会議員に対するサービスです。国会議員がいろいろな委員会で質問をしたり発言したりしますね。そのための基礎資料の多くは国会図書館が作っているのです。例えば、国会議員から、「明日の委員会でご質問をしたいので、こういうことを調べてほしい」と言われると、24時間以内にきちんと資料を作って渡さないといけない。そんな質問が年間4万5千件も来るのです。

吉川 え、そんなに。

長尾 特に国会開会中はものすごい数になります。「少子化問題は、ほかの国ではどうなっているか、それに対してその国の政府はどういう政策をとっているかを調べてくれ」といった依頼がざらにある。そういうことを調べて調査結果を出すのは、国会図書館職員のすごい能力です。同じ依頼を各省庁にすると、その省庁の知っていることだけを報告してきて情報が偏る可能性があるのですが、担当省庁に聞くのと同時に、国会図書館に聞いてくる人もいます。

吉川 普通に考えている図書館のイメージとはずいぶん違う機能があるんですね。

長尾 このような仕事をしている部門を調査部門と呼んでいます。調査部門の職員には大学の先生と変わらない能力を持っている人もいますし、たまに大学へ移る人もいます。国会図書館には900人の職員がいますが、調査部門は120人でやっています。アメリカの議会図書館も同じような機能を持っていて、専門調査員が400人くらいいます。国立国会図書館が国会の活動を支えているということは、世間にあまり知られていません。このようなこともPRしようと一生懸命やっているとこです。

●電子化と著作権問題●

船橋 国会図書館の電子化作業は、いつ頃から始まったのですか。

長尾 2002年に関西館ができたときには、ある程度ものをオープンしました。だけど、作業のためのお金がないのと著作権問題で、なかなかデジタル化できないんです。明治・大正期に出版されたもので、いま著作権のない書物は、小説などを含めて15万冊デジタル化しています。それは国立国会図書館のウェブ・サイトから入ったら見ることができます。

これから昭和初期の書物をデジタル化しようとしているの

ですが、著作権が切れているかどうか分からないものが山ほどある。明治・大正期の書物もそうでした。著作権は著者の死後50年間あります。明治期はみんな若くして本を書いているので、30歳のときに書いたとして、その人がもし100歳まで生きたとすると、本が出版されたときから120年間、著作権が残っていることになります。

著作権者が亡くなったら、子供に著作権が移り、子供が亡くなったらまた孫に移る。そうやって50年間、著作権は継承され

ていくのですが、その著作権継承者が日本のどこにいるのかがほとんどわからないのです。明治・大正期の15万冊をデジタル化するときに、国の組織が著作権法違反でもしたらどうにもならないので、徹底的に調べたそうです。これを調べるのに2億円もかかったというから、大変です。

船橋 例えば、科学関係の雑誌が電子化されてウェブ上に載っていますが、著作権はどうなっているんですか。

長尾 著作権としては同じです。科学雑誌の場合、先生方は学会に著作権を委譲していることが多いでしょう。だから学会が著作権を持っていることになります。

船橋 学会や出版社が許可すればいいということですか。

長尾 そういうことです。私たちは、エルゼビアとかシュプリンガーとか、いろいろなところの電子ジャーナルを3万4000タイトル持っています。京大の図書館でも2万タイトルくらい持っていると思いますが、そのために高い購読料を払っています。京大もたぶん4億円くらい払っているんじゃないでしょうか。

船橋 全部の出版物を電子化するというのは、そんなに簡単な話ではないわけですね。

長尾 簡単じゃない。本だけですと国立国会図書館にはほしい900万冊ありますが、そのうち電子化しておいた方がいい本は400万冊くらい。それをやるとしたら、いまの技術とかコストでいうと400億円くらいかかります。出版物はこれからもどんどん増えていきますし、それに著作権の問題で、出版社は書籍の電子化に反対しています。

船橋 いろいろな人がブログを作ってインターネット上で公表しているけれど、あれも1つの大事な文化遺産だから、国会図書館がどこかに保存しないといけないんじゃないかと、朝日新聞が社説に書いていましたね。

長尾 そのことは、私が館長になったときから言っているんです。みんなオープンにしているものなんだけれど、それを集めて保存して、人に利用させようとする、著作権法に



国立国会図書館 上は利用者入口付近、下は目録ホール

引っかかってだめだということになる。いちいち許諾を得ないと集められないんです。

国とか国立大学とか、2,300か所ぐらいのウェブ・サイトはいま許可を得て集めています。でもウェブ・サイトは何万、何十万とあるから、いまのところすべては集められない。少なくとも国に関係する機関のものについては許諾を得ずに集められるように、国立国会図書館法を改正しようと思っ

て努力しています。

吉川 そうすると、保存する情報は無限大に増えていきますね。

長尾 そうですね。国会図書館の場合は、納入されたものは国有財産になって、捨てられないんです。だから、ウェブ・サイトも値打のあるものはどれかを判断して集めなければいけません。これがまたむずかしい。

船橋 研究でも同じです。とりあえずデータは全部集めておいて、どう使うかは後で考えることにします。

長尾 すぐに利用することを考えると著作権問題がからんでややこしい。それで、例えば30年は絶対に使わないという条件をつけるなら、許可を得ずに集められる可能性はあります。出版社も、一定期間は絶対に公開しないという前提で、集めるだけなら許可してもいいと歩み寄ってきてくれる可能性があります。



長尾真 (ながお・まこと)

1936年生まれ。国立国会図書館長。元京都大学総長、京都大学名誉教授。元独立行政法人情報通信研究機構理事長等さまざまな要職を歴任。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館などの分野において優れた研究業績を挙げ、国際的にも極めて高い評価を得ている。1997年紫綬褒章授章、1999年英国ノッティンガム大学名誉博士授与、2004年フランスのレジオン・ドヌール勲章授章、2005年日本国際賞受賞、2008年文化功労者。

●翻訳システムの開発●

船橋 長尾先生が図書館の方に進まれた理由は何でしょうか。

長尾 私はもともと人間に興味があったんです。大学受験のときに文学部へ行こうか理学部へ行こうか迷って、よほど文学部の哲学科へ行こうかと思ったんだけど、周囲の人が、それでは飯が食えないからやめておけという。ちょうど私の受験のときに工学部に電子工学科ができて、電

子工学なら理学部の匂いがするし、工学部だったら飯の食いはぐれもないだろうということで、電子工学科へ行っただけです。

大学を卒業して助手になったときに電子計算機が登場しました。アメリカでは1955年ごろから「人工知能」という言葉が使われていました。私は人間に興味があったので、人間的なことをコンピュータにやらせるのは面白いんじゃないかと思ったんです。

最初にやったのは、言語学習みたいなことでした。“I am a boy.”とか、“I am a girl.”とか、いろんな文を日本語と英語をペアにして大量に入力して照合すると、文法構造とか、日本語と英語の対訳とかが抽出されて、学習機能を持った翻訳システムが作れるのではないかと考えました。でも、やりだしてみると、当時はコンピュータの記憶容量が小さいし、データがほとんどなくて全然できなかった。これではいけないと思って、文字読み取りの研究を始めました。

それがうまくいって生まれたのが、1967年に東芝が開発した郵便番号の読み取り装置です。研究した結果が実世界に利用されることの価値をそのとき知りました。

吉川 それから画像認識の方に進まれたわけですね。

長尾 そう。画像処理も日本では誰もやっていなくて、画像をコンピュータに入れるのはものすごくむずかかった。KDDの研究所に頼んでデジタル・データを作ってもらって、顔の認識研究を行いました。

吉川 1970年の大阪万博のときですね。

長尾 大阪万博の住友童話館で、カメラの前に座ると、その人の顔がデジタル処理されて顔の輪郭画像が出てくる仕掛けを作りました。有名人の顔も入れておいて、その人に似た顔の人と照合して、例えば「あなたの顔はケネディーに似ています」とか言って渡すという面白いことをやっていました。そのときに、何千人という顔のデータをコンピュータで処理したので、そのうち千人ぐらいのデータを分析するというのを金出武雄君といっしょにやったんです。世界で初めてでした。彼はその後、画像処理では世界の第一人者になりました。

吉川 機械翻訳はいつごろから始められたのですか。

長尾 72～73年ごろから機械翻訳の研究を始めて、78年ごろに科学技術関係の英語論文のタイトルを日本語に翻訳するシステムを作りました。ありがたいことに、筑波の電子技術総合研究所がそのシステムを使ってくれました。成果はまずまずでした。

ところが、誰かがいたずらで“He is a boy.”と入れたら、「ヘリウムは少年です」という訳が出てきた。「He」は彼という意味だけでなく、ヘリウムの元素記号でもあるから。それが「面白い、さすが科学論文を扱うだけのことはある」といって新聞に載ったんです。半分皮肉だろうけど、その



船橋新太郎 (ふなはし・しんたろう)



吉川左紀子 (よしかわ・さきこ)

記事を科学技術庁の人が見て、私に翻訳機の研究開発を頼んできたんです。

70年代後半から80年代は、日本は科学技術や産業が飛躍的に進歩した時代でした。アメリカの技術は日本にどんどん入ってくるが、言葉の障壁があって、アメリカには日本でどんな技術が開発されているのかわからないから、英語に翻訳して出してくれと圧力をかけてきた。そこで、科学技術庁が予算をとって、4年間に当時の金で6億5000万円ぐらい使って翻訳機の研究開発をしたんです。

船橋 それはすごいですね。かなりの記憶容量のコンピュータがあったんですか。私が77～78年に霊長研で実験を始めたころは、32Kのメモリーで、180Kのフロッピーディスクを使って実験をやっていました。いまから思うと信じられないような小さなメモリーです。

長尾 それに毛が生えたようなものだったのではないのでしょうか。4年間でまあまあうまくいきました。そのシステムを改良して、日本科学技術情報センター、いまの科学技術振興機構から翻訳ソフトを売り出したらけっこう売れたらしくて、元を取ったと言っていました。

吉川 日英ができると、例えば日仏とか日韓とか、ほかの言語にも基本的な部分は広げていけるんですか。

長尾 いまだだったらいけるでしょうね。しかし当時は強引に作ったから、1つのソフトウェアでいくつの言語に使えるような融通性のあるものにはなっていませんでした。

●自然科学としての言語学●

吉川 国際電気通信基礎技術研究所で、電話での音声翻訳して伝える装置を一時期開発しようとされていたようですね。

長尾 いまでもやっています。その装置を去年の北京オリンピックで使ったようです。日本語と中国語の翻訳で、例え

ば日本語で「今日の水泳競技は、どこへ行ったらいいですか」と聞くと、それが中国語に訳されて、中国の人が中国語で「何番のバスに乗って、どこへ行きなさい」と答えると、それがまた日本語に訳されるというわけです。

もう1つは、音声ではなくテキストを翻訳するものです。中国の北京オリンピックのオフィシャルサイトの情報を、中国語から日本語に訳すという翻訳システムを作っています。それもうまく使えたらいいから、翻訳システムはだいぶよくなったようです。

吉川 始められてから25年ぐらいになりますものね。

長尾 物理学のように、ある種の発見によっていきなり進歩するんじゃないで、言語はじわじわしか進まないんです。心理学でもそうでしょう。

吉川 そうですね。先生は当時から、言語学の知識は機械翻訳にはあまり使えないと言われていました。同じ言語を扱っても、言語学で扱う言語と、機械翻訳で使われる言語は何か違いましたね。

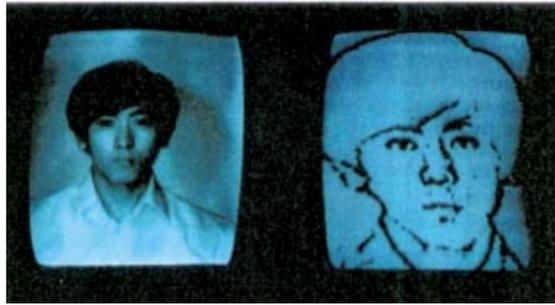
昔から長尾先生は、とにかくデータをたくさん集めて、そこから何かを抽出し、それを機械翻訳に利用するという感じでしたが、言語学はそういう進め方はしませんね。いくつかの例を直感的に集めてきて、その中にあるルールについて議論するというような感じでしょうか。私が大学院生だったころ、長尾先生が主催されていた対話研究会にでていたのですが、言語学者と情報工学者が、「それでいいのか」という議論をよくやっていました。

長尾 そうそう。チョムスキーの時代には言語データはあまり集まっていなかったから、言語データに関することはまったく信用されていなかった。だから、結局、チョムスキーなどの言語学者たちは、頭の中で、言語というのはこういう体系のものであると考えて、言語学を構築していたのです。

けれどもいまは、さまざまな人が発話する言葉、何億何十億という文をきっちり集めることができる。事実、イギリス



世界初の手書き文字を認識する郵便番号自動読み取り区分機 (東芝科学館提供)



1970年の大阪万博のとき、住友童話館で「コンピューターの天眼鏡」が展示された。工業用テレビカメラで顔を撮影し、それをコンピュータに入力すると、輪郭だけが強調された画像ができる。鼻、口、頬などの位置を測定し、そのデータから性格を判断、その性格の代表的人物のイラストが示されるというものだった。世界の先端をいく技術的試みが話題となり、常に長蛇の列ができた。（『住友童話館の記録』より）

では、レストランで話す言葉、家で話す言葉、夫婦で話す言葉など、あらゆる言語表現をしっかりと集めているんです。そうすると、言語というものを頭の中で観念的に考えるのではなく、何十億という言語表現を客観的な対象として冷静に分析することで、言語学を作ることができる。つまり、言語学が自然科学の世界に入ってきたと言ってもいいのではないかと私は言っているのです。

自然科学は、主観とか主体で何かするのではなく、あくまで自分の外にあるものを冷静に分析する。心理学も、自分の心理ではなく、人の心理を観察してメスを入れるということをやるとしたら、言語学も同じで、これからは客観的な対象が厳然と外にあって、それを分析することになるのではないのでしょうか。つまり自然科学の領域に入ってくる。

●ころというブラック・ボックス●

吉川 心理学はころのはたらきを目に見えるものにして考えようとしてきました。

長尾 そうでしょうね。ころや脳の働きなどは一種のブラック・ボックスだと思うんです。ブラック・ボックスの中で何が行われているかを考えようとすると、そこから出てくる現象を徹底的に調べることによって推察するしか手がない。

例えば、ある人のころは温かいとか冷たいと言うとき、何をもってそう言えるかという、その人のいろいろなシチュエーションにおける発話や身振りといったものすべてを徹底

的に集めて分析すれば可能なのではないかと。吉川さんの発話データとかふるまいを集めて分析すると、吉川さんのころはこうではないかと言える、そんな手法があるのではないかと思います。どうでしょうか。

吉川 自分で意識できる部分は、自分のころのほんの一部ですから、ころの全体を知ろうと思ったら、外に出たものを手がかりにして考えざるを得ないですね。

長尾 だから、ころには実体があるかどうかを議論しても、私は無駄だと思うんです。ころというのは、非常に抽象的に捉えられた、ダイナミックなある種の現象でしょう。ころというモノそのものがあるわけではないからね。

吉川 実体はないけれども、科学的な研究の対象にはなりえる。例えば、Aさんのころは冷たいか温かいかといった判断でも、もともと一貫性がないのなら、Bさんが思うのとCさんが思うのでは意見が一致しないはずなのに、一致することが多いんです。ということは、複数の人が認める「ころの温かさ、冷たさ」の判断基準には共通のものがある。

長尾 その人の発話や行動を山ほど集めて、ある種の分析をやったら、みんなが共通に認める、冷たいか温かいといわれるような要素が抽出されてくるんじゃないか。それは、言語的な分析方法としても面白いと思う。

吉川 もう1つ、私が面白いと思うのは、ある人の言葉や行動を全部分析して、まわりが客観的に「冷たい」と認定したとしても、本人はきっと納得しないだろうな、ということなんです。逆にいえば、自分自身のころをいくら内省して、こうだと定義づけて考えても、実はそこに真実があるわけではないのかもしれない。そんなふうにと考えると、自分自身のころについてあれこれ思い悩んでも仕方ないのかな、と思ったことがあります。本人自身がいくら自分を定義しようとしても、それは客観的事実を分析した結果ではないから「正しい」わけではない。自然科学の世界では、人のころはその人以外の人たちによって定義されるし、本人自身というのではない。

長尾 自分を見つめているもう一人の自分がいて、できるだけ客観的に自分を眺めようとするれば、自分がどういうキャラクターの人間かは、ある程度わかるでしょう。だけど、それが第三者が見ているものとどこまで一致して、どこまでずれているかという問題は、どうしても残るんです。もう一人の自分といっても第三者ではないから。そのころはどうしようもないから、割り切るか……。

吉川 何かに任せるとか。

船橋 でも、一致するところもあるわけですよ。一致するところが大事です。

長尾 一致するところはあります。それが多ければ多いほど、その人は自分の我から離れているということになる。

吉川 ずいぶん昔、私が大学1年生だったときに、心理学概論の授業で性格検査をしました。「あなたは人の前

に出て話すのは苦手である」といった質問に、「はい」とか「いいえ」とかで答えていくタイプの検査です。私は、自分で「人見知りするほうだと思う」と思って、「はい」に○をすると、まわりの人は、「吉川さんは、絶対違う」と言うのです。考えてみたら、私自身が自分のことを、例えば内向的だと思っていたとしても、まわりの100人が外向的だと思っているとしたら、どちらが正しいというのは言えないんですね。

長尾 そうそう。わからないね。

吉川 そこに、ころの不思議さというか、本人自身が思っている自分の姿というのは、実は間違いなのかもしれないということに、ずっと妙なひっかかりを感じていました。

長尾 本人が自分を見てどう捉えるかという世界は、例えば哲学とか、ある種の学問世界として存在しているいいと思うんです。だけど、通常の心理学とか認知科学とか多くの学問の場合は、自己というものを自分から離れた客観的世界の中で分析していく方がやりやすいし、学問としてちゃんと体系づけられるでしょう。

●ころを捉えるむずかしさ●

吉川 先ほど長尾先生は、工学的なアプローチで機械翻訳のシステムを作ったときに、学問が大学を出て社会一般で使われるようになったと言われましたが、心理学の場合、みんなが知りたいことの上位にくるのはおそらく自分のころです。でも、心理学の科学的アプローチで客観的にその人の行動を分析して、「あなたのころはこうです」と言ったとしても、それはまわりにとっては役に立つ情報かもしれないけれど、本人にとってはあまり役に立たないわけです。必ずそこにはズレがありますから納得しにくい。心についての科学的知識を利用して人は自分の行動を変えうるか、ということについても、簡単にはいきません。Aさんが教えてくれた知識やアドバイスなら受け入れられるけれど、Bさんが言ったのだったら同じ内容でも聞きたくないということもあります。

長尾 それは船橋先生の領域ではないでしょうか。脳の中である種のモデルを想定し、そのモデルがいかに活性化されて働くかを考えるとき、その下の情動的な部分が、脳の思考のメカニズムをコントロールしている。それはある意味で化学物質的なものが影響しているような感じがするんです。そのモデル全体をコントロールしているある種の物質があって、そういうものも含めた全体をモデル化しないといけないんじゃないか。

船橋 ある人が話しているすべての発話を記録して分析しようということですが、似たようなことをやろうとしている研究者はけっこういます。例えば、脳波をずっと取り続けてどんなものが出てくるかを調べるとか、その人が見ている風景

を一生撮り続けるとか、脳の全部の神経の配列をしらみつぶしに調べるとか。それで何が出てくるかはよくわからないんですが。

長尾 そのときのパラメーターとして、例えば情動的な部分がプラスに働いているかマイナスに働いているかを現象として記録しておく方がいいのではないかと。そうでないと同じ形が出てきても、解釈の仕方が変わる可能性がある。脳の奥の奥にある情動的な部分がいくぶんか関与しているのではないかと思うのですが、どうですか。

船橋 たぶん、そうだと思います。以前は、認知的な働きが大事だと言われていましたが、ころの問題を考えようとすると、感情のことを絶対に考えないといけな。そこは一番大事なことだと思います。ところが、感情は内観が中心になるので、科学的に取り扱おうとするものすごくむずかしいですね。

吉川 主観を超えるキーワードになるのが、共感だと思います。人は、他の人の感情にいつのまにか動かされるときがありますね。単に客観的に、「この人は笑っているな」とか「泣いているな」ではなく、泣いている人を見たときに、自分もいっしょに悲しい気持ちになるというメカニズムはどうなっているのか。そこが一番知りたいところです。

長尾 そこにはその人の育ってきた道筋がすごく関係していて、例えば、ある言葉とか、目で見たある状況や情景が、頭の中で論理的に処理されているだけの人と、論理的に処理される以前に何か脳の深い部分に伝達されて、そこでの情動的な働きに支配されるような人がいる。人それぞれ特徴を持っていて、いろいろなことが作用しているのではないかと。生まれてからの経験によって脳の構造がどこか違っているのかもしれない。

●宗教におけるころの問題●

吉川 先生は、非常に落ち着く所とか、自分には合わないなど感じる場所などがありますか。

長尾 最近気がついたけれど、東京へ行っていると、やはり本能的に身構えているというか、神経が立っているように感じます。京都へ帰ってくるとそのへんが全然違う。不思議ですね。

吉川 大学院生のころに、対話研究会の研修旅行で、長尾先生とご一緒したとき、どこかの神社で「ちょっとお参りしてくるから」と言われて、柏手を打ってお参りされました。その姿を後ろからみんなで見ていたことがあるんです。そのときに、先生がお参りする姿勢やお辞儀の角度がすごく決まっていたので、「さすが長尾先生だ」という話をしていました。私は、神社とかお寺にはあまり縁のない育ち方をしてきたので、京都に住んでいてもそうしたことには最近まであまり関心が高かったのですが。



神社や神聖な場所に行くと、ころが洗われ、清浄無垢になる。(奈良・鴨波神社)

長尾 神社とか神聖な場所へ行くと、やはりころが洗われます。邪念を払うというか、清浄無垢になるというか、そういう瞬間を得られる気がするんですね。神社へお参りをすると、みんな「幸福」とか「家内安全」を願うじゃないですか。私はお願い事のためにお参りをするという事はまったくくない。お参りをすると自然に気持ちがしゃきとする、精神統一ができるからお参りをするのは、神さんを信じているとか、そういう話とはちょっと違う。

吉川 長尾先生は以前、神道にはあまり哲学がないけれど、仏教は深いといった話もしていただきました。

長尾 理屈の上では、仏教はものすごく深いでしょう。だけど、宗教の根元というのは似ているんじゃないですかね。

吉川 私は認知心理学が専門で、認知心理学は実証科学という視点でころを考えますから、ころの未来研究センターに移って初めて、宗教学とか民俗学といった人文科学のころの研究と自分の研究との接点について考えるようになりました。

長尾 宗教におけるころの問題というのは、大いに研究する必要があると思います。

吉川 宗教学を専門にされている先生がたといっしょに神社やお寺を訪ねて、地元の人が日常的にお参りしたり願かけしたりする姿を見て、人のころについて気づいたり考えることがたくさんありました。実を言うと、お参りするとか祈るといことは、最近まで自分にはあまり縁のない世界だと思っていました。

長尾 そうですか。キリスト教とか一神教というのは、大前提として神があって、神の前にひれ伏すというか、神のもとに自分の精神がコントロールされているという構造だと思

うんです。だけど、仏教や神道というのは、絶対神というのはなくて、自分がいかに神的なものに近づくかということを追う宗教ではないでしょうか。そういう意味で、東洋の宗教はいいんじゃないかという気がします。

船橋 確かに、修業して神や仏に近づくという精神の姿ですね。

長尾 そう。自分が善的な人間、トータルな意味において良い人間になるというか。

吉川 私がとても驚いたのは、京都の千本丸んま堂に入ったときに、ものすごく

怖い閻魔様の像があるんですが、そこにおられた尼さんが、閻魔様はお地藏様の化身であって、怖い顔で人を脅しているのではなく、いっしょに苦しんでいる顔なんだ、ということをお話されたんですね。何も知らずに見ると恐ろしい顔が、そういうお話を聞いてから見ると、何か慈悲深い顔にも見えるという不思議な経験でした。

心理学でよくつかう評定尺度が典型的なのですが、「親切な—親切でない」とか「温かい—冷たい」のように、ふつう、正と負、プラスとマイナスはひとつのものさしの両端にあって、正反対の価値を表します。ところが、仏教の世界では、見る人が震え上がるような怖い顔と、やさしい慈悲の顔とを表裏一体のものとして捉えているんだな、と驚きました。西洋の、神と悪魔の関係とは全然違う見方ですね。閻魔様とお地藏様は同じものの違う側面である、と。だから、そのどちらを見るかというのは、その人のころの状態によって変わるし、そのときのまわりの状況によっても変わるかもしれない。

長尾 そういう人たちは、閻魔様ともころを通じ合う形で交流できると思っているんじゃないですかね。自分のころを気楽に通い合わせることができるような世界を楽しみ、それで安心を得ている。キリスト教だったら、絶対的にひれ伏すという恰好になるのではないのでしょうか。

●変わる力をもろう●

吉川 NHKの「につぼん 心の仏像」という番組で見たのですが、ご夫婦で遠くのお寺をたずねて行き、そのお寺にある仏像に自分たちの気持ちを聞いてもらう、という話がありました。そのご夫婦は「前に座ってお顔を見ると、こ

ろが洗われる」と言われるんですね。その仏像を見るとご夫婦の気持ちに私たちも共感する。同時に、この現象をどう理解したらいいのかな、と。

そこには、動かないし語ることもない仏像があって、その前に座ることで気持ちが癒されたり元気をもらったりして、また帰っていく。心理学の目で見ると、カウンセリングと似たようなところがある気がするんです。仏像を前にして、人のころに何が起ころんだろうということに、今とても関心があります。

長尾 仏像を前にすると、気持ちが整理されて、邪念が吹き飛んで、本質的な自分の生きるべき姿がはっきり自覚されるようなある種の働きが起ころってくるのではないですか。

吉川 そうなんです。仏像がその媒体になるんですよ。人は何らかの強制によっても変わることがあるでしょうけれど、自分自身の中から変わっていく、そのきっかけになる仕組みが社会の中にいろいろある。仏像や神社参りもそうですが、プラスの方向に変わるきっかけとなる仕組みが、社会や伝統文化の中にあって、それがどのように人に影響を与えるのかを学問的にみてゆけないか、と。

長尾 そこはむずかしいですね。例えば、物理学のノーベル賞をとる人なんかでもそうでしょう。難問があって、いくら考えてもどうしても解けなかったのが、ある日ふとしたことで「これだ」というのが出てきて、パッと解けるといことがある。それと似ているんじゃないですか。

吉川 そうですね。自分だけで悶々としていても変わらなくて、外にある何かによって劇的に変わることがある。別にだれかが答えをくれたり、直接助けてくれるわけではないのに、変わる力がもらえるというところが、人のころの不思議なところだなあと感じます。客観的にみていくのは非常にむずかしいのですが、センターのプロジェクトの中で、妙法院をお願いをして、三十三間堂の千手観音像の写真を撮らせていただいたので、まず認知科学的なアプローチで、仏像の画像を見たときの目の動きを分析するとか、基礎的なところからやってみようかなと思っています。

長尾 それだったら、大橋力先生流に、脳の中の活性領域を同時に調べるとか、そういう実験ができれば、プロセスがよりはっきりとわかってくるんじゃないでしょうか。

●アジアの伝統文化の知恵●

吉川 そうですね。昨年夏、センターの仲間で大橋先生のバリのご自宅を訪問し、ケチャヤガムランのすばらしい演奏を見せていただいて、みんなとても感銘を受けて帰ってきました。バリへ行くと、欧米の世界観とは全然違う原理があることを実感しました。

長尾 確かに心理学の場合、バリのケチャのような世界をもっと分析すると、いろんなことがわかってくるんじゃないで

千本丸んま堂の閻魔王像(千本丸んま堂提供)

すかね。私も「バリに來い」と言われているのですが、まだ行ったことがなくて……。

吉川 バリでは社会の伝統的な仕組みが、個人より集団ベースで作られています。それから、農耕社会だということもあると思うのですが、山や谷、森などいたるところにいろんな神様がいて、その神様に守られているというような発想がずっとあるんです。水が潤れることは、神様と自分たちをつなぐ大事なものが失われてしまうことだから、水は常に循環していないといけな、とか。1000年以上前に作られたという水田の水利システムがすごく発達しています。その根っこにあるのは、科学的にみて良いシステムを作ろうといったモチベーションではなくて、神様と自分たちのつながりを切ってはいけないということなんです。

たとえば、山の木を切って山の神様を怒らせると水が潤れる、水が潤れて自分たちは神様から見捨てられてしまう、といった物語で語られるんですが、それで精緻な水利システムを複数の村落で作り上げて、千年も続いている。京都も都として千年続いているわけですけども。私たちがこ



昔からある水利施設を利用したバリの水田

れから真剣に学ぶべきものがあるとしたら、欧米のモデルではなくて、バリのようなアジアの伝統的な文化の持っている知恵のすごさではないでしょうか。

長尾 それは芸術なんですよ。西洋の科学技術は、芸術の手前の段階までしか行かない。誰がやってもできる範囲をやっているというか、誰でもできるように地ならしをしているんです。芸術は科学技術の世界から一歩ジャンプした世界の話だと思うんです。

バリでは、千年の歴史をもって、芸術的というか、科学技術では追いつかない人間の叡智の塊みたいな世界を作り上げた。

吉川 すばらしい彫刻でも、みんな職人の人たちが作っている。一度見たら目が離せないようなすばらしい彫刻がたくさんあって、でも芸術家という発想ではないから、名前を彫ったりしないんです。こういう社会があるのかと、本当に驚きました。

長尾 「アート」というのは、もともと工芸技術が言葉の起源なんです。バリはそういうことを徹底的にやっている世界なのでしょう。日本の室町時代から江戸時代にかけてのいろんな芸術でも、そういうものは山ほどあります。後から作者を一生懸命見つけようとしているけれど、作者の名前なんか問題にならないんだから。

吉川 これからの日本人のころのことを考えると、直観的に、バリのようなあり方が日本人の向かうべき方向なんじゃないかな、と思いました。

長尾 私もそう思います。人の名前を無理やり出して、この人はすばらしいという世界より、もう1つ上の世界ではないかという気がします。結果がよければいいのであって、

誰がということは問題ではない。ヨーロッパは個が中心といわれるけれど、中世の修道院あたりは個人なんて全然関係がなかった。

吉川 個を中心に考えるというのがむしろ、新しいんですね。自己のアイデンティティとか個の確立といったものが、いいことだし目指すべきものというふうな暗黙の価値観の中で私自身も生きてきましたが、バリに行って、そうした価値観とは違う原理で動く社会の様子を見たりする中で、これまでのものの見方や考え方がずいぶん変わりました。

長尾 日本の戦後教育が、あまりにもそういうことばかり言って、集団や社会を二次、三次にしてきたから。

吉川 もう一度、価値観自体を考え直すというか。その方が楽しいし、元気がでるように思います。大橋先生がおられるバリのウブドゥという村では、昔ながらの社会構造というか、人と人をつなぐ仕組みが保たれていて、その仕組みがすばらしい芸術を生み出してきたし、今もそれが続いています。大橋先生たちの研究グループところの未来研究センターとがいっしょに何かできることはないかと考えています。

●東洋的な価値観を発信する●

長尾 欧米の人たちに、そういう東洋的なものの考え方を認識させる努力を、われわれ日本人がしなければいけないと私は思っています。彼らの価値観だけでこれから世界全体がやっつけられるかと思ったら、絶対やっつけられない。東洋的なものの考え方の価値を科学的にきっちり押さえて、世界の心理学者に納得させるように頑張っていたいただきたい



ケチャ

大橋力先生の邸宅で開かれたケチャとガムラン演奏



ガムラン

ですね。

船橋 ものすごくむずかしい課題ですね。

吉川 私たちが意識せずに受け入れてきたいろんな価値を、もう一度見直さないといけないという感じがします。

長尾 いま、スタンフォード大学とかいろいろところで、仏教がものすごく流行しているというでしょう。なぜ仏教に関心を持つ人が増えているのか。スタンフォード大学の学生で調べてみると面白いと思うんです。若い人たちは、そういうものが持っている将来性に気づき始めているのかもしれない。

これから東洋的な価値観が西洋の価値観に取って代わるようなところへ行く必要があるということを、ころの未来研究センターが、欧米人にもわかりやすくロジカルな形で整理してPRしていったらいい。

吉川 はい。ころの未来研究センターのようなところはほかの国立大学を見渡してもあまりないので、研究の内容についても、組織についても、どういう方向で発展させていくのがいいのか、みなで議論しながら考えているところです。

ころのことを考えるには、表面だけでなく根元から、研究者の発想そのものが多面的になる必要があります。それには「つなぐ」仕組みの活用が大切だと思っています。まずは、京都大学の中にある他のセンターとうまく連携するところから始めて、他の大学との連携につなげる仕組みを作りたい。

長尾 新しい展開に期待しています。

吉川・船橋 本日はどうもありがとうございました。

(2009年1月10日、京都大学ころの未来研究センターにて)

ロシア文化における「こころ」の概念

言語文化学的分析

S.E. ヤーチン С.Е. Ячин

(国立極東技術大学文化人類学部部长、教授、哲学博士)

S.Yu. マルコワ С.Ю. Малкова

(国立極東技術大学文化理論及び歴史科助教授、哲学博士)

翻訳: 上世博及 Hirochika Kamidze

(東京ノーヴィ・レバトリシアター)

1 問題の所在

この論考の目的は、ロシア文化はこころという概念にどのような意味を込めているか、そしてそれがロシア民族の自覚にとってどのような意義を持つのかを明らかにすることである。この論考は日本の読者向けが前提となっており、これを書くにあたり2つの背景がある。第1に、筆者は、さまざまな日露間のイベント(会議、文化プロジェクトなど)に参加し、日本とロシアの文化の間にはある独特の相補性が存在しているということを目の当たりにした人物であるということ。日本の読者はロシア古典文学(ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ)に興味を示し、ロシアの大衆は日本文学や日本文化全般に興味を示していることがその相補性の証拠となる。第2に、ロシア文化同様、日本文化においても心の概念が中心的な位置の1つを占



大学中央入口

め、2つの民族の世界観の類似性を証明していること。それとともに相違点も存在している。我々としてはこの論考が、我々が提示する方法を使い、日本文化におけるこころの概念という同じようなテーマでの日本人の研究論文がロシア語に翻訳されることに繋がってくれることを願うものである。

ここ10年、ロシアでは人文科学的研究分野において言語文化学的アプローチを利用することへの関心が著しく高まっている。この言語文化学的方法論の基本的仮定は、言語は文化の核であるということから成り立っている。このアプローチの基本は「言語を《民族精神》として認識する」というW. フンボルトの教えに遡る。フンボルト理論によれば、世界の像は母国語の影響によって形成される。だからこそいろいろな民族文化が、概念化のためのさまざまな道具を利用しながら、世の中の多様な言語的絵画(表象、見本)を創りだしているのである。この言語の解釈は、M. ミュラーによって、さらにはネオフンボルト派の理論や、E. サビアとB. ウォーフの言語的相対論において発展する。

言語文化学的アプローチは(1)言語利用の特徴、その言語の文法的、構文的、文体的特性によって文化を全体的に判断することができる。(2)言語そのものが民族の意識を形成する。この2つを前提としている。

ロシア文化を認識するためにこころの概念を選んだのは偶然ではない。ロシア文化では、ロシア人の性格はこころが広いことだという自己認識がもはや伝統となっている。このことについては多くの作家や哲学者たちが語っている。同様に自分たちを〈素朴な〉民族の代表だとも思っている。

どの民族でも、どの文化においても、こころは感情と体験の中心点と

して現れる。これは、こころはどんな人間でも強い体験をしたときに感じ、聞くことのできる身体器官でもあることに関係する。だから多くの文化がこころの状態を特徴づけることを通して感情的な状態を表現しているのは驚くべきことではない。にもかかわらず、異なる文化のあいだでは体験を通じた人間の心理に関する解釈があまりにかけ離れすぎているということがある。

2 ロシア語における「こころ(сердце; serdtse)」の語の言語文化学的分析

ロシア語における「こころ(сердце; serdtse)」という言葉の語源は中心性、「まん中の(серединность; seredinnost')」である。もし形式的にこの言葉の一般的な意味を決めるとすれば、生命の中心点という意味になるであろう。この一般的な意味はメタファーと連想の3つの分野を通して明らかになる。(1)魂の同義語として、(2)願望の貯蔵庫として、(3)感覚器官と体験として、ロシア語におけるこころという言葉に伴った表現と慣用句を紹介しよう。

(1) 魂の同義語としてのこころ

こころ(сердце; serdtse)という言葉はカッコ内の魂(душа; dusha)という言葉に置き換えても、ロシア語を話す人にとっては表現の意味は変わらない。

*訳者注: 紙面の都合上、代表的な慣用句だけロシア語の原文を掲載する。

- こころ(魂)の底で В глубине сердца(души); V glubine serdtsa (dushi) — 内心、ひそかに、無意識に。
- こころ(魂)の奥まで До глубины сердца(души); Do glubiny serdtsa (dushi) — 非常に強く(心配する、ゆり動かす、驚く等)。



大学文化センター

- こころ(魂)から引き抜く——誰かを、あるいは何かを無理やりまったく忘れる。
- すべてのこころ(魂)から От всего сердца(от всей души); Ot vsego serdtsa (ot vsei dushi) — まったく誠実に、完全にあげつろげに、率直に。
- こころ(魂)が一杯となって——感極まって。
- こころ(魂)が悲惨な地獄——辛く苦しい。
- こころ(魂)をつかむ——ひどく、深く興奮させる、感動させる、心配させる; 締め付けるような郷愁、痛みを呼び起こす、喜ばせる、感動。
- こころ(魂)に入る——誰かに深く愛されるようになる、深い愛着の感情を呼び起こす。
- こころ(魂)を覗き込む——誰かの秘密の考え、感情を分かろうとする。
- こころ(魂)の上の石——辛く、重苦しい感情を味わう。
- こころ(魂)から石が落ちる——安堵感を味わう、陰鬱な、重苦しい、不快なものからの解放。
- こころ(魂)に忍び込む——気付かないうちに、徐々に、無意識に現れ

- る、生じる。感情、思考について。
- 猫がこころ(魂)を引っ搔く——憂鬱、落ち着かない、心配だ。
- こころ(魂)を破く——こころの悩みや苦しみを引き起こす。
- こころ(魂)が痛い Сердце болит(душа); Serdtse bolit (dusha) — 不安、心配、こころの苦しみを味わう。他人のことで不安になる、苦しむ、心配する。ものごとで不安を覚える。
- こころ(魂)が破れる——こころの苦しみ、憂鬱感、悲哀感を味わう。
- こころ(魂)がない——人、あるいはものに対し興味、好意、願望、同情、信頼がない。
- こころ(魂)が場所がない——気もそぞろである、落ち着かない。
- こころ(魂)がひっくり返る——憐憫、同情のはげしい感情を味わう。
- こころ(魂)がバラバラに裂かれる——何かに深い悲しみ、悲嘆をおぼえ、辛く感じる。
- こころ(魂)をこする——陰鬱、寂しい、不安、心配になる。
- こころ(魂)を読む——誰かの考え、願望、気分を推量する。
- こころ(魂)をわずらう——不安を

味わう、心配する、苦しむ。他人のことで不安になる、苦しむ、心配する。ものごとで不安を覚える。

- すべてのこころ(魂)で **Всем сердцем (душой)**; **Vsem serdtsem (dushoi)** ——かぎりなく、無限に、誠実に、熱烈に。ひじょうに強く(望む、目指す、期待する。)
- こころ(魂)で休む——気晴らしをする。
- こころ(魂)によらない——気に入らない。

(2) 願望の貯蔵庫としてのこころ

- こころの庇護者——(おどけた表現)女性にもて、女性の成功を利用する男性。
- こころ(手)を渡す——誰かの妻になることを承諾する。
- こころを開く **Открывать сердце**; **Otkryivat' serdtse** ——愛を告白する。秘密の考え、悩み、感情を打ち明けて話す。
- こころに落ちる——生じる、現れる、気に入る、恋する。
- こころを魅了する——自分への愛を吹き込む、自分を好きになるよう仕向ける。
- こころへの通路を見つける——誰かの好意、愛情、共感を得る、引き起こす。

(3) 感覚器官、体験としてのこころ

- こころから離れる——突然不安の状態、不幸、災難の予感が生じる。
- こころを止めながら——強い不安や動揺を味わいながら。
- こころが落ちる(離れる、転落する)——不安、恐怖をあげわう。絶望する。動揺や驚愕を突然感じる。
- 重いこころで——落胆した状態で、不安な中で、悪いことを予感しながら。(反義語:軽いこころで)
- やわらかいこころで——何の不安もなく、何の心配もなく。
- 大きなこころ **Большое сердце**;

Bol' shoe serdtse——熱烈に強く感じることのできる人、思いやりのある、善良な人。

- こころに手を置く——まったく純粹なこころで、誠実に、真摯に(話す、答える)。
- こころが苔で覆われる——こころなく、無感情で、冷淡になる。
- 開いたこころ(魂)で **Открытым сердцем (душой)**; **S otkryityim serdtsem (dusyoi)** ——偏見なく;真摯に、信頼して、正直に。
- こころ(魂)から石が落ちる——安堵感を味わう、陰鬱な、重苦しい、不快なものからの解放。
- こころの血で書く——誠心誠意を込めて、深い感情を込めて、説得力を持って、追体験しながら、苦しみぬいて書かれたもの。
- こころから消える——ホッとす、落ち着く。
- 純粹なこころから **От чистого сердца**; **Ot chistogo serdtsa**——まったく真摯に、純朴に、善意に駆られて。
- こころの中で——憤慨、苛立ちがつのって。
- こころに留める——怒る、憤慨する、侮辱、悪意を抱く。
- こころの中にナイフ——こころの痛み、苦しみの原因となる。
- こころ(頭、魂)が燃える——非常に興奮する、興奮した状態になる。
- こころが血を浴びる——こころの痛み、同情心、憐れみ、締め付けるような郷愁で耐え切れないほど辛くなる。
- こころが離れる——心配しなくなる、いらつかなくなる、落ち着く。こころを固めながら——いやいやながら、自分に無理をして、意に反して。
- こころを引き剥がす——誰かに、あるいは何かに自分の怒り、苛立ちを当り散らす。
- こころで **Сердцем**; **Sserdtsem**

——憤慨して、怒って(何かを言う、あるいはする)。

- しょげたこころで——恐怖、驚愕を味わってたじろいで。
- 純粹なこころで——まったく率直で、信用性のある誠意。
- こころに自由を与える——自分に深い感動を味わせる。
- こころに油を塗るように——非常に気持ちよく、大きな満足、快感を得る。
- こころの近くで受け容れる——非常に大きな意味を付けながら、高揚した感情をもって何かを受け容れる;何かを身をもって知る、大きな関心を持って何かに接する。

慣用句の大半はこころと体験の関係を示していることに気づくだろう。

さらに、結果的にロシア民族の性格、精神性、そして文化を理解するのに決定的となるもう1つの側面があることも見逃せない。それは独特の両義的価値、あるいは不調和な性格である。

この両義的価値はロシア語の「こころ(сердце; serdtse)」という言葉の意味の中に現れるが、おそらく日本語の「こころ; kokoro」という言葉の意味には含まれないと思われる。「こころ(сердце; serdtse)」という言葉は「怒る(сердится; serditsa)」という言葉と同じ語源である。先に挙げた慣用句のいくつかはこの意味が直接見てとれ(例:こころの中で、こころに留める、ほか)、他のものは間接的に見てとれる。そして慣用句である以上、肯定的(善い)感情の可能性もあれば、否定的な感情の場合もあるわけである。このようにして、ロシア語におけるこころの概念の言語文化学的分析は、この概念の特徴の中心となる意義は反義語の関係である、という結論に我々を導くので

ある。たとえば、「こころのこもった(сердечный; serdechnyi)」—「怒る(сердится; serditsa)」—「こころのこもった(сердечный; serdechnyi)」の基本的な意味は人の性格の一般的な定義として「親切的な」である。「怒る(сердится; serditsa)」(動詞)あるいは「怒った(сердитый; serdityi)」(形容詞)の基本的な意味は、不満を感情的に表現しながら、たとえば、罵りながら、その不満を抱くことである。「怒って」というのは、悪意のあるという意味ではない。人は、その人がそうあるべきと思っていることと一致しないものを見たときに怒る、と我々は理解している。つまり、こころの概念においても、怒ることにおいても、人間の内面世界、主観性、体験は生命の活力の源であるということが示されているのである。

実際、他の方法による研究でも、この事実は論証される。この事実はロシア的性格にとって独特で、ある特殊な気分の不安定さを特徴づけるのである。人間の気分(感情的な状態だけでなく、思考の方向や、積極的行動の性格も含めて)には2つのおおまかな要因がある。それは内面の状態と外的な環境である。内面の状態への我々の依存は(ロシア語での「気分(気)настроение; nastroenie」という言葉は「内側の傾向(внутренний настрой; vnutrennii nastroi)」という意味)我々自身が判断する限り、他の文化よりもはるかに顕著にみられる。「気がないから」という理由で、人が何かをするのを諦めてしまうという状況は典型的だ。あるいは、たとえば、誰かが乱暴な言葉や行動で他人を侮辱すると、「わたしの気に触ったから」という理由をつける。(日本人の性格からすればそんな「理由」はあり得ないのではないかと思う。)しかし、逆に「気がある」ときは、その

気分が特発的な積極性、熱意、私心のなさとなって現れる。

3 結論

これまで示してきたロシア的性格の両義的価値はMMPI(ミネソタ多面人格目録)*の方法による研究でも明らかである(Dablstrom W. Welsb Y., An MMPI Handbook. Minneapolis, 1975)。当初、この目録は人格偏差(特徴づけ)の定義のために精神医学において使用されていたが、今日ではクロスカルチャー的な研究において使用されることの方が多い。同時に、さまざまな群あるいはグループから得られる平均指数にも用いられる。このように移行したのは、多くの現場の精神科医たちが、民族全体はその民族の中でもっとも頻繁に見られる強調された人格の型で表せると主張し、研究して得た考察に基づく。この目録はある群におけるなんらかの人格の特徴を表し、定義づける。それぞれの特徴には1つ、あるいはいくつかの尺度が適応される。(この尺度は400以上あるが、広く使われているのは約50である。)ある性格のなんらかの特徴の表し方は、できるだけ相関関係のある得点数で決められる。結果的に、質問が人格の横顔となるのである。

いま我々の手元にあるのはアメリカ人とロシア人の質問の比較だけである(カシヤノワ K. ロシアの国民性について。- M. J., 2003)。項目における性格の特徴としてはEm——感情的脆弱性尺度(最高得点数48)とEp——癲癇尺度(最高得点数56)が適応されている。アメリカ人はこれらの尺度で約12点となっているのに対し、ロシア人は約20点。尺度による差異は13%である。

この目録は我々のこころの別の特徴を証明することになる。それは生命の中心点としてのこころとの関係

である。MMPIではこの特徴を抑圧と名づけている。抑圧の概念とは、人間が意識にいくつかの心理状態を代入させないようにし、意欲を与えるように努め、心理については考えないように努力している状況であると説明している。この尺度においてはロシア人が20点(40点中)なのに対し、アメリカ人は11点である。ロシア人にとってのこの特徴は次のように解釈できるかもしれない。人のこころの上にあること、つまり人が身をもって体験していることは、多くの場合、意識や知性のレベルでは計り知れないことである。この場合、アメリカ人と比べるとロシア人のメンタリティは、身を持った体験と知性(意識)の間にはるかに大きな違いを設定しているのだ。

ここでロシアと日本の文化におけるこころの概念の重要な違いを発見できるように思う。もし日本文化では「こころ; kokoro」に知性という意味が含まれるとしたら、ロシア文化では「こころ(сердце; serdtse)」は知性を除外する。正確にはロシアのメンタリティはこころへの知性の従属を求めるのである。これはロシア正教会のある非常に重要な禁欲生活の規律(祈祷の規律)から来ている。そこには「こころに知性を積み込め」とある。一般的にロシア文化においてはこころに従って生きるほうが、知性に従って生きるよりも価値があるとみなされるのだ。ロシアの政治的キャンペーンでは、知性ではなくこころへの呼びかけが頻繁に利用される。大統領選挙の際、エリツィン候補に注目が集まった呼びかけがもっとも特徴的な例だろう。プラカードにはこう書かれていたのだ、「こころで選べ!」と。

現在の言語文化学と人格目録を哲学的な人間の概念(哲学者人類学)という枠の中に置いてみようと思う。人

間の哲学的概念はメタファーの論拠では利用できない。ではこころの概念は……、これもやはりメタファーであり、つまり一方から他方へ文字通りの意味の移行になる。哲学において、こころのメタファーのすべての内包的意味に当てはまる概念は主観性である。つまり、分類的な表現をすると、ロシア文化の特性は外的生活(客観性)よりも内的生活(主観性)の方に比較的大きな立場を置いているということだ。主観性は知性(思考)との関係を条件づける。哲学的な立場からすると、思考は外界で人間を

方向づける能力でもあり、人間の客観性を運命づけるものでもある。

以上をまとめると、現在の言語文化学は、ロシア文化においては何かに対して主観的な関係を伝えなければならぬすべての状況でこころの概念が使われていることを証明している。しかもこの概念が分かりやすく使われている。重要なものごとについて話す場合、ロシア人は必ずそのことに対する主観的な関係を話し、その際この言葉(こころ)を伴う慣用語を用いるのである。

* MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory: ミネソタ多面人格目録) は精神医学的診断の客観化を目的として、マッキンレー, J.C. とハサウェイ, S.R. により開発された質問紙法の1つ。550項目の質問からなり、10の臨床尺度だけでなく、被検者の回答態度を測定する妥当性尺度(虚偽尺度など)も含まれる。質問数の多さ、尺度の詳細性において信頼性が高いパーソナリティ検査の1つであり、あらゆる臨床場面で用いられている。しかし質問数が多いため、検査に時間がかかるのが短所である。



ウラジオ風景



S.E. ヤーチン教授

【執筆者紹介】

本論文の執筆者、セルゲイ・エフゲニエヴィチ・ヤーチン国立極東技術大学教授(文化人類学部長、ロシア・ウラジオストック)は、1951年、ソビエト連邦(現ロシア共和国連邦)沿海州リポフツィ村に生まれ、ベテルブルグの大学で哲学を修め、哲学博士号(PhD)を取得。専攻分野は文化哲学で、特に、社会的認識と哲学的人類学の研究法や人間についての哲学的認識の問題を専門とし、70篇以上の哲学論文を学会誌などに発表している。主な論文には、「意識活動の構造における思考概念」、「意識的生活の現象化」などがある。

最近、モスクワやベテルブルグやウラジオストックの知識人や文化人と連携して、メタ・カルチャー研究会などを組織し、ウラジオストックを拠点に精力的な研究活動を推進している。昨年8月のソウル大学で開催された「世界哲学会議」では、「文化哲学」部門で研究発表している。ちなみに紹介者(鎌田)は「仏教哲学部門」で研究発表した。

現在、国立極東技術大学文化人類学部長を務めると同時に、同大学哲学科主任でもある。また、「ロシアの学者たち」というサイトには、高等教育機関国際アカデミー準会員、ロシア高等教育機関功労活動家、ロシア高等職業教育名誉活動家としても紹介されている。

紹介者は、2006年10月、劇団東京ノーヴィ・レパートリーシアターが主催する「インスピレーション」をめぐるシンポジウムで初めて出会った。その企画の中心者はスタニスラフスキーの演技論に基づく演出家アニシモフ氏で、アニシモフ氏はチェーホフやツルゲーネフなどロシアの作家の作品の演

出を手がけつつ、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』や近松門左衛門の『曾根崎心中』などを独自の演技論と演出法で上演していた。

ヤーチン教授はアニシモフ氏とは盟友で、さまざまな共同事業・協働活動をしてきている。本年3月末にも、東京両国のシアターXにて、メタ・カルチャーについての国際シンポジウムをヤーチン教授とアニシモフ氏が共同企画して、わたしも参加を要請されている。

アニシモフ氏もヤーチン教授とともに、「こころの未来研究センター」の「こころの未来」という命名や概念・ビジョンに非常に関心を寄せており、「こころの未来」と彼らが論及している「メタ・カルチャー」とが必ずクロスすると考えているようである。そこで、本センターとの協働・協力研究を進めたいという意向を持ち、その一環として、わたしが国立極東技術大学および国立極東大学の文化人類学部に招かれて、「神道と日本文化とロシア文化の接点」について講義する機会を持った(2008年9月29日～10月4日)。

その際、ヤーチン教授が、ロシア語の「こころ(сердце; serdtse)」を日本語の「こころ」と関連づけて研究したいという考えを持っていることを知り、その第一歩の研究論文を同僚の言語学の専門家とともに執筆していただくことになった。それが本論文である。論拠とされている言語学理論はフンボルトやサピア・ウォーフなどのいわゆる言語相対仮説であり、わが国では1970年代ごろに注目された理論であるが、ヤーチン氏らはそれらを新たにメタ・カルチャー論として再編・再構築したい考えのようである。「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」という研究プロジェクトを代表として推進しているわたしは、ヤーチン氏を始め、国内外のさまざまな研究者と交流しつつ共同研究を進めていきたいと考えている。

(「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」代表: 鎌田東二記)

2008年度 1年の記録

年月日	行事・できごと
2008.4.1	鎌田東二(宗教哲学、民俗学)教授着任。有田恵(倫理学)、畑中千紘(臨床心理学)を特定研究員として採用。長岡千賀(認知心理学)、渡邊慶(認知神経科学)を日本学術振興会特別研究員として受け入れ
2008.4.22	こころの未来研究センター協議員会(第10回)
2008.5.3	こころの未来講演会 Doris Lier(ユング派精神分析家)「The unprivate House: 現代建築と意識」
2008.5.13	こころの未来講演会 Steve Heine(The University of British Columbia教授)「What Happens When Kafka Enters the Psychology Lab? Experiments on the Meaning Maintenance Model」
2008.5.15	平成20年度日本学術振興会外国人特別研究員(欧米短期)の受け入れ(2008.8.13まで) Norasakkunkit Vinai(ミネソタ州立大学助教)
2008.5.22	こころの未来講演会 Tamar Kron(テルアビブ大学教授)「Psychotherapists' dream about their patients(クライアントについてのセラピストの夢)」
2008.5.27	第26回こころの未来セミナー 鎌田東二(こころの未来研究センター教授)「こころと『神秘世界』—福来友吉・柳宗悦・宮沢賢治の『心理学』的探究—」
2008.6.1	大石高典(生態人類学・文化人類学)を特定研究員に採用
2008.6.4~8	国際人間行動進化学会(共催:こころの未来研究センター)
2008.6.5	第1回こころ観研究会「こころの始まり、始まりのこころ」 入来篤史(理化学研究所チームリーダー)「サルからヒトのこころへ—知性進化と神経生物学」、石井匠(こころの未来研究センター共同研究員)「縄文時代のこころ—土器文様の分析から」、河合俊雄(こころの未来研究センター教授)「もの・内面・接点—心理療法における心観を求めて」
2008.6.6	稲盛財団からの寄付受け入れセレモニー
2008.6.8	研究会「発達障害とその支援」(共催:京都大学グローバルCOE『心が活きる教育のための国際的拠点』) 河村暁(「発達ルームそら」代表)「学習障害(LD)児へのワーキングメモリに配慮した教育的支援」、船曳康子(京都大学大学院医学研究科学振特別研究員)「発達障害者の支援に関する課題」
2008.6.17	こころの未来研究センター協議員会(第11回)
2008.6.22	第1回こころの広場「こころと里山」(共催:京都府) 湯本貴和(総合地球環境学研究所教授)、高林純示(京都大学生態学研究センター長)
2008.6.24	平成20年度日本学術振興会サマープログラムによる受け入れ(2008.8.19まで) Kimel Sasha(ミシガン大学心理学部大学院生)
2008.7.15	注意プロジェクト研究会 金井良太(University College of London)「電磁サイコフィジックス:脳非襲撃的磁気刺激と電流刺激による視覚研究」
2008.7.28	こころの未来講演会 樋口さとみ(英国ランカスター大学心理学部リサーチアソシエイト)「他者の行動観察と ventral premotor と temporo-parietal junction の役割」
2008.8.5	第3回依存症研究会 Mikhail Votinov(京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センター大学院生)「Endowment Effect and neural representation of price evaluation」、村上幸史(神戸山手大学現代社会学部准教授)「『連続した』不確定事象に関する認知と行動—ギャンブラーの認識から」
2008.8.26-30	バリ島研修(「京都における癒しの伝統とリソース」プロジェクト)
2008.9.4	第27回こころの未来セミナー 岡ノ谷一夫(理化学研究所脳科学総合研究センター生物言語研究チーム・チームリーダー)「言語起源の生物進化的シナリオ」

2008.9.28	第2回こころの広場「引きこもりと教育臨床」(共催:京都府) 森下一(森下神経内科診療所所長)「引きこもりの子どもたちと向き合って」、桑原知子(京都大学大学院教育研究科教授)「学校カウンセリングと心理臨床」
2008.9.30	『こころの未来』創刊号刊行
2008.10.14	こころの未来研究センター連携協議会(第2回)
2008.10.16	第28回こころの未来セミナー 妙木浩之(東京国際大学教授)「心の経済について:精神分析の貢献」
2008.10.28	こころの未来研究センター協議員会(第12回)
2008.10.31	稲盛財団記念館竣工披露式挙行
2008.11.14	「こころ学」ブログ、スタート
2008.11.18	第29回こころの未来セミナー ジョーン・ハリファックス(米国ウバヤ禅センター長)「死に近づく人の友をつとめる—終末期の慈悲」
2008.11.26	こころの未来研究センター、稲盛財団記念館2階に移転
2008.11.30	シンポジウム「平安京のコスモロジー」(共催:京都府) 基調講演:岡野玲子(漫画家)「陰陽師から見た平安京」、内藤正敏(写真家、東北芸術工科大学教授)「平安京の宗教構造—江戸・東京との比較の観点より」、河合俊雄(こころの未来研究センター教授)「京都の癒し空間」、パネリスト:鳥居本幸代(京都ノートルダム女子大学教授)「平安京の食とファッション」、原田憲一(京都造形芸術大学教授)「平安京の自然学」、中村利則(京都造形芸術大学教授)「京の茶室とわび・さびの美学」、関本徹生(京都造形芸術大学教授)「京の妖怪」 司会:鎌田東二(こころの未来研究センター教授)
2008.12.3	顔認知に関する講演会 Carl Gaspar(グラスコー大学研究員)「USING PSYCHOPHYSICS AND FACIAL STATISTICS TO UNDERSTAND THE INFORMATION UNDER LYING FACE IDENTIFICATION」
2008.12.4	こころの未来講演会 下條信輔(カリフォルニア工科大学教授)「学習のダイナミックなループと創造性」
2008.12.6	第3回こころの広場「脳科学と社会の関わり」(共催:京都府) 川人光男(国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所長)「脳科学と社会の関わり」
2008.12.14	「こころ」を考える高校生フォーラム(共催:京都府) 鎌田東二(こころの未来研究センター教授)「『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』から見た戦後日本人の『こころ』の変化」
2008.12.22	こころの未来研究センター協議員会(第13回)
2009.1.22	第30回こころの未来セミナー 安藤寿康(慶應義塾大学文学部教授)「遺伝マインドのすすめ—ふたご研究から」
2009.2.24	こころの未来研究センター協議員会(第14回)
2009.2.28	第6回こころの未来フォーラム「依存と自立」 中村努(NPO法人「ワンデーポート」施設長)「回復施設の現状と課題:ギャンブル依存に関して」、James P. Whelan(メンフィス大学教授)「Assessment and Treatment of Pathological Gambling」、Tatia Lee(香港大学教授)「Neurological Basis of Impulse Control」、谷岡一郎(大阪商業大学長)「日本のカジノ・プレイヤーの特徴とギャンブル依存症の問題点—依存症研究の今後のあり方および具体的計画について—」
2009.3.1	第6回こころの未来フォーラム サテライトワークショップ「Gambling, Reward, Decision-Making, and The Prefrontal Cortex」 村井俊哉(医学研究科脳病態生理学講座准教授)「Social decision making and clinical psychiatry」、Alan Dagher(マギル大学教授)「Prefrontal-striatal interactions in drug and non-drug reward processing: fMRI and PET studies」、澤本伸克(医学研究科高次脳機能統合研究センター助教)「Dopamine neurotransmission during working memory and financial reward processing in health and Parkinson's disease」、坂上雅道(玉川大学脳科学研究所教授)「Reward inference by monkey prefrontal and caudate neurons」、竹田里江(札幌医科大学保健医療学科助教)「Effect of reward schedule on task-related activity in the primate dorsolateral prefrontal and orbitofrontal cortex」、Anthony Phillips(ブリティッシュコロンビア大学教授)「Anti-Parkinsonian drugs provide important insights into neural substrates of compulsive gambling」
2009.3.2	第6回こころの未来フォーラム Mini-Workshop (organized by S. Funahashi)
2009.3.31	『こころの未来』第2号刊行

2008年度 仕事一覧

吉川左紀子 (教授)

論文

Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S., “Commonalities in the neural mechanisms underlying automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols,” *Neuroimage*, 2009, in press.

Adams, R. B. Jr., Rule, N. O., Franklin, R. G. Jr., Wang, E., Stevenson, M. T., Yoshikawa, S., Nomura, M., Soto, W., Kveraga, K., & Ambady, N., “Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation,” *Journal of Cognitive Neuroscience*, 2009, in press.

Yoshikawa, S., & Sato, W., “Dynamic facial expressions of emotion induce representational momentum,” *Cognitive, Affective, and Behavioral Neuroscience*, 2008, 8, 25-31.

Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S., “Time course of superior temporal sulcus activity in response to eye gaze: A combined fMRI and MEG study,” *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 2008, 3, 224-232.

小川時洋, 吉川左紀子「他者の視線方向と表情が情動刺激に対する視覚的注意に及ぼす効果」『認知心理学研究』2008, 5,83-91.

野村光江, 吉川左紀子, Reginald B. Adams, Jr. 「『まなざしから心を読む』ことと文化」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2008, HCS2007-63, 1-4.

布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2008, HIP, 108 (282), 63-67.

学会発表, ワークショップ等

Minemoto, K., & Yoshikawa, S. “Temporal aspects of the adaptation effect in facial expressions of emotion.” The 31th European Conference on Visual Perception. Utrecht, The Netherlands. 2008.8.24-28.

Nomura, M., Adams, R.B., Jr., Yoshikawa, S., Stevenson, M, & Ambady, N. “Mind reading and cultural identity.” Human Behavior and Evolution Society Conference. Kyoto University, Japan. 2008.6.4-8. Nomura, M. & Yoshikawa, S. “Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes.” 12th European Conference on Facial Expression. University of Geneva, Switzerland. 2008.7.28-31.

Ozono, H., Watabe, M., & Yoshikawa, S. “Reward and punishment to linguistic and facial signals.” The 20th Annual Conference of Human Behavior and Evolution Society, Kyoto University, Japan. 2008.6.4-8.

木原香代子, 伊藤美加, 吉川左紀子「顔の意味情報の連合記憶」『日本心理学会第72回大会発表論文集』918. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

木村洋太, 野村光江, 五十嵐由夏, 市原茂, 吉川左紀子「自己表情表出と表出タイミングが顔の魅力判断に及ぼす効果:予備的検討」『日本心理学会第72回大会発表論文集』695. (同上).

嶺本和沙, 吉川左紀子「表情刺激におけるプライミング効果の検討」『日本認知心理学会第6回大会発表論文集』61. (千葉大学, 千葉市) 2008.5.31-6.1.

長岡千賀, 桑原知子, 吉川左紀子, 小森政嗣, 渡部幹「心理面接における話者理解に関する実証的検討 (4)」『日本心理学会第72回大会発表論文集』760. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

中嶋智史, 吉川左紀子, 細井菜穂「パートナーの魅力が顔の印象評価に及ぼす影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』692. (同上).

野口素子, 吉川左紀子「表情表出の操作が受け手の情動状態と他者認知に及ぼす影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』1077. (同上).

野村光江, 吉川左紀子, Adams, Jr. Reginald B. 「心的状態の推論における人物情報の影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』785.(同上). 布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響」『日本認知心理学会第6回大会発表論文集』96. (千葉大学, 千葉市)

2008.5.31-6.1.

布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響—無意味図形を用いた検討—」『日本心理学会第72回大会発表論文集』782. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

山添愛, 吉川左紀子「社会的文脈が表情認知に及ぼす影響—二者の表情の相互作用—」『日本心理学会第72回大会発表論文集』699. (同上). 日本心理学会第72回大会ワークショップ『カウンセリング対話を科学する(2) 言語表現と非言語行動』吉川左紀子「臨床対話における表情:予備的検討」(同上).

日本心理学会第72回大会ワークショップ『対人場面における「微笑み」表情の働き』指定討論. (同上).

日本心理学会第72回大会ワークショップ『日常認知研究の現状と今後への展望 (4) モチベーションと記憶』指定討論. (同上).

講演等

吉川左紀子「若者のこころと現代教養教育のあり方」鹿児島大学稲盛アカデミー開所式 (鹿児島大学, 鹿児島市) 2008.9.1.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」普及事業60周年記念シンポジウム (紀三井寺ガーデンホテル, 和歌山市) 2008.10.2.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」平成20年度滋賀県改良普及職員大会 (県立県民交流センター, 大津市) 2008.12.13.

吉川左紀子「顔認知研究の深さと広さ」文部科学省科学研究費新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」公募説明会1 (日本女子大学, 東京都) 2009.1.25.

吉川左紀子「顔認知研究の深さと広さ」文部科学省科学研究費新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」公募説明会2 (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2009.2.8.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」平成20年度第3回京都府改良普及職員協議会研修会 (園部総合庁舎, 南丹市) 2009.2.9.

新聞掲載

吉川左紀子「共感し合う『こころ』が備わっている」『ソフィアがやってきた!』『京都新聞』2009.2.15日曜版.

船橋新太郎 (教授)

論文

Watanabe, Y., Takeda, K., Funahashi, S., “Population vector analysis of primate mediodorsal thalamic activity during oculomotor delayed-response performance,” 2009, *Cerebral Cortex*, in press.

船橋新太郎「前頭前野におけるワーキングメモリの神経生理学的研究—その40年の歩み—」『霊長類研究』, 2009, 印刷中.

船橋新太郎「統合失調症のワーキングメモリ—霊長類を用いた研究を通して—」『Schizophrenia Research』, 2008, 51, 219-225.

船橋新太郎「意思決定のしくみ」『Brain and Nerve (神経研究の進歩)』, 2008, 60, 1017-1027.

船橋新太郎「前頭前野における Dynamic Modulation 機構」『分子精神医学』, 2008, 8, 91-101.

Ichihara-Takeda, S., Funahashi, S., “Activity of primate orbitofrontal and dorsolateral prefrontal neurons: effect of reward schedule on task-related activity,” *Journal of Cognitive Neuroscience*, 2008, 20, 563-574.

著書

Funahashi, S., “Learning,” *The Encyclopedic Reference of Neuroscience*, Springer Verlag, 2008.

学会発表

Andreau, J.M. and Funahashi, S. “Neural activity in the primate prefrontal cortex during pair-association performances.” The 38th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Washington, DC, USA. 2008.11.15-19.

Tanaka, A. and Funahashi, S. “A behavioral study of metamemory in monkeys using an oculomotor working memory task.” The 38th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Washington, DC, USA. 2008.11.15-19.

Andreasu, J.M. and Funahashi, S. “Task-related activity of primate prefrontal neurons during pair-association performances.” 14th Biennial Meeting of the International Society for Comparative Psychology, Buenos Aires, Argentina. 2008.10.9-11.

田中暁生, 船橋新太郎「メタ記憶に関わる前頭連合野神経機構の解明」科学研究費特定領域研究『統合脳』第2領域夏の班会議 (北海道厚生年金会館, 札幌市) 2008.8.9.

Andreau, J.M. and Funahashi, S. “Task-related activity of prefrontal neurons during pair-association performances.” 第31回日本神経科学大会 (東京国際フォーラム, 東京) 2008.7.9-11.

松井正太, 田内真惟人, 山本洋紀, 澤本伸克, 福山秀直, 船橋新太郎「ヒト前頭葉における眼球運動関連領域:fMRI研究」第31回日本神経科学大会 (同上).

田内真惟人, 松井正太, 山本洋紀, 澤本伸克, 福山秀直, 船橋新太郎「ヒト前頭眼野におけるボググラフィックマップ:fMRI研究」第31回日本神経科学大会 (同上).

田中暁生, 船橋新太郎「空間性ワーキングメモリ課題遂行中のサルによる戦略的なFization Breakはメタ記憶の使用を示唆する」第31回日本神経科学大会 (同上).

岡澤剛起, 船橋新太郎「アフリカツメガエルの定位行動にみられた短期記憶の影響」第31回日本神経科学大会 (同上).

田中暁生, 船橋新太郎「メタ記憶に関わる前頭連合野神経機構の解明」科学研究費特定領域研究『統合脳』第2領域冬の班会議 (学術総合センター, 東京) 2008.12.13.

講演

船橋新太郎「脳はしばしば間違える—認知における虚と実—」平成20年度京都大学大学院人間, 環境学研究科公開講座『虚実の世界』(京都大学, 京都市) 2009.2.17.

船橋新太郎「前頭連合野のはたらき」GPSS「科学・こころ・宗教」ワークショップ (南山大学宗教文化研究所, 名古屋市) 2008.11.30.

船橋新太郎「注意欠陥／多動性障害 (ADHD) の霊長類モデル」OIST 発達神経生物学ユニット プレ・コンフェレンス (OIST シーサイドハウス, 沖縄県) 2008.11.28.

船橋新太郎「注意欠陥／多動性障害と前頭葉機能」第3回日本情動研究会 (名古屋市立大学病院ホール, 名古屋市) 2008.10.19.

Funahashi, S. “Neural mechanisms of working memory in the prefrontal cortex.” Workshop on Working Memory, 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel. 2008.9.18-19.

Funahashi, S. “Prefrontal cortex and decision making.” 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel.

船橋新太郎「前頭連合野からみたヒトのこころ」南山宗教文化研究所懇話会 (南山大学, 名古屋市) 2008.5.9.

Funahashi, S. “Prefrontal cortex and decision-making: how does delay-period activity contribute to the decision of the saccade direction?” International Symposium on Prefrontal Cortical Functions. (Institute of Brain Science, Fudan University, Shanghai, China) 2008.4.1.

カール・ベッカー (教授)

学術論文

カール・ベッカー「日本の宗教的思想が二十一世紀に貢献するもの」, 木村武史編『サスティナブルな社会を目指して』春風社.2008年4月,241-256頁. カール・ベッカー「北米に於けるデス・エデュケーションとその周辺」, 得丸定

子編『いのち教育をひもとく～日本と世界』現代図書.2008年4月,55-80頁, 211-224頁.

カール・ベッカー「アメリカの死生観教育～その歴史と意義」, 島蘭進・竹内整一編『死生学とは何か』東京大学出版会, 2008年5月, 75-104頁.

著書

カール・ベッカー編著, 山本佳世子訳『愛する者の死とどう向き合うか～悲嘆の癒し』晃洋書房, 2008年12月.

対談, 随筆

カール・ベッカー「死生観教育の必要性」, 日本ホスピス・在宅ケア研究会編『ひびきあう生と死～未来を拓くスピリチュアルケア』雲母書房, 2008年5月, 101-114, 178-182頁.

Carl Becker, “Embracing the Pure Land Vision,” In *Never Die Alone*, ed. Jonathan Watts and Yoshiharu Tomatsu. Tokyo: Jodo Shu Press, 2008年7月, 57-89頁.

カール・ベッカー「南無のこころと死生観を巡って」『知恩』2008年7月,770号, 6-17頁, 『知恩』2008年8月, 771号, 6-17頁.

カール・ベッカー「日本の死生学教育～現代の仮題と急務」『京都, 宗教論叢』2008年12月, 3号, 7-19頁, 28-30頁.

カール・ベッカー, 柏木哲夫 (対談)「日本人の死生観～死を迎える時に」, 町淳二編『美しい日本の医療～グローバルな視点からの再生』金原出版, 2008年12月, 47-62頁.

カール・ベッカー, 村上和雄 (対談)「生命のメッセージ」『致知』2009年1月, 402号, 102-108頁.

河合俊雄 (教授)

論文

田中美香, 金山由美, 河合俊雄, 桑原晴子, 山森路子「甲状腺専門病院における心理臨床—身体医から依頼されるケースの分類と特徴—」『心療内科』2008年, 12巻5号, 430-435頁.

河合俊雄「身体病の心理療法」『心理学ワールド』2008年, 43号, 5-8頁. 河合俊雄「内分沁専門病院における心理療法と研究:症状から人へ」, 河合俊雄編『こころにおける身体／身体におけるこころ』2008年,日本評論社,

99-121頁.

松岡和子, 茂木健一郎, 高野祥子, 河合俊雄, 川戸圓「第3部 討論」日本箱庭療法学会編集委員会『河合隼雄と箱庭療法:箱庭療法学研究』2009年, 21巻特別号, 130-174頁.

河合俊雄「日本における分析心理学」『ユング心理学研究・日本における分析心理学』2009年, 1巻特別号, 創元社, 118-135頁.

河合俊雄「もの・内面・接点——心理療法におけるこころ観を求めて」『モノ学・感覚価値研究』2009年3月,第3号,京都大学こころの未来研究センター, 60-70頁.

著書

河合俊雄「心理療法と超越性の弁証法」, 横山博編『心理療法と超越性』新曜社, 2008年5月, 103-125頁.

河合俊雄, 鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版 (朝日新書), 2008年11月.

河合俊雄 (編)『こころにおける身体／身体におけるこころ』日本評論社, 2008年12月.

河合俊雄「いまなぜ日本人は聖地を訪れるのか?」『いちどは行ってみたい日本の聖地』洋泉社, 2009年3月, 94-94頁.

学会発表

河合俊雄「日本における分析心理学」『河合隼雄先生追悼シンポジウム・日本における分析心理学』日本ユング心理学会主催, 京都, 2008.4.20.

“Jungian Psychology in Japan; Between Mythological World and Contemporary Consciousness” *Contemporary Symbols of Personal, Cultural, and National Identity: Historical and Psychological*

現在と今後の展望」日本社会心理学会第第49回大会（同上）。内田由紀子「人の心を動かす普及活動とは―過去の成功事例から学ぶ―」（パネルディスカッション）平成20年度滋賀県改良普及職員大会（滋賀県）2008.12.13.

Uchida, Y., “Culture and emotion: Happiness and interpersonal relationships in the United States and Japan”（招待講演）University of Washington, Department of Psychology, 2009.2.2. Uchida, Y. & Ellsworth, P. C., “Shared and non-shared happiness: Experience and expression of positive emotion in the United States and Japan”（学会発表）Society for Personality and Social Psychology Conference 第10回大会, 2009.2.6.

平石界（助教）**論文** Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, K., Sugimoto, Y., Takemura, R., Ozaki, K., Okada, M., Toda, T., & Ando, J., “Is g an entity? A Japanese twin study using syllogisms and intelligence tests,” Intelligence, in press. **学会発表など**

Hiraishi Kai（Local Hosting Coordinator）Human Behavior and Evolution Society 20th Annual Conference（Kyoto University）, 2008.6.4-9. Kai Hiraishi（Symposium Organizer）“Cross-cultural differences and similarities: cultural and evolutionary perspectives”（Symposium title）Human Behavior and Evolution Society 20th Annual Conference（Kyoto University）, 2008.6.6. 内田由紀子, 平石界（企画者）, ワークショップ「文化と進化とこころの未来」, 平石界（話題提供）「氏と育ちと進化と文化」日本心理学会第70回大会（北海道大学）2008.9.19. 安藤寿康, 敷島千鶴, 平石界（企画者）, ワークショップ「社会心理学への行動遺伝学的アプローチ」, 平石界（話題提供）「はじめての行動遺伝学―生まれと育ちとは?―」日本社会心理学会第49回大会（鹿児島大学）2008.11.3. 平石界（発表）「人々は“契約”をどのように捉えるか―思考の認知心理学研究から―」一橋大学国際共同研究センター研究プロジェクト:「契約」の複合領域研究　総括シンポジウム（一橋大学）, 2009.2.4. **一般雑誌** 平石界「プラー論文への補足とコメント」『日経サイエンス』2009年4月号（2.25出版予定）.

大石高典（特定研究員）**論文** 大石高典「モノノケの民族生態学―国家に抗するモノノケたち―」『あらはれ』11号．pp.142-165. 猿田彦大神フォーラム.2008. 大石高典「カメルーン東南部におけるバンツー系住民の漁労採集旅行（エキスペディション）について」生態人類学会ニューズレター第14号. 生態人類学会, 2009.

報告書 FUNAKAWA, S., OISHI, T., FONGNZOSSIE, E. & S. SUGIHARA, “Extensive survey for human-environment interactions in different bio-climatic zones in Cameroon.” An interim Research Report for Ministry of Scientific Research and Innovation（MINRESI）. 2008. 9p. **国際学会発表** OISHI Takanori, “Mate preferences of the Baka hunter-gatherers and sdjacent Bantu farmers in South-East Cameroon.” Human Behaviour & Evolution Society 20th Annual Conference（HBES2008）, June 4-8th, 2008. Kyoto, Japan.（Poster Presentation）. **国内学会、シンポジウム発表** 大石高典「カメルーン東南部の一村落におけるカカオ畑の賃貸/売買をめぐ

Hokkaido, Japan. May 2008.

学会発表 Ban,H., Yamamoto,H., Saiki,J. “Inverse-retinotopic Morphing and Analyzing Method of fMRI Activity in Human V1: an fMRI study.” 2nd Brain & Mind Research in the Asia/Pacific Symposium, Biopolis, Singapore. September 2008. Ban,H., Yamamoto,H., Mano,H., Umeda,M., Tanaka,C. “Topographic fMRI Responses to Pictrially- or Disparity-defined Occluded Surface in Human Early Visual Areas.” Fifth Asia-Pacific Conference on Vision, Brisbane, Australia. July 2008. Ban,H., Yamamoto,H., Mano,H., Umeda,M., Tanaka,C. “Neural correlates of amodal completion based on binocular disparity: an fMRI study.” The Japan Neuroscience Society 31st Annual Meeting, Tokyo, Japan. July 2008.

内田由紀子（助教）**論文** 内田由紀子「文化と感情:比較文化的考察と組織論への意義」『組織科学』2008, 41, 48-55.

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B., “Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures.” Personality and Social Psychology Bulletin, 2008, 34, 741-754. 内田由紀子「日本文化における自己価値の随伴性―日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証―」『心理学研究』2008, 79, 250-256. 内田由紀子「文化と心の相互構成プロセス―文化心理学における文化概念と方法論」『文化人類学研究』2009（印刷中）,9巻.

著書

内田由紀子「文化」、遠藤由美編『社会心理学―社会で生きる人のいとなみを探る（いちばんはじめに読む心理学の本）』ミネルヴァ書房, 2009年3月.

学会発表等

Uchida, Y. “Is Perceived Emotional Support Beneficial ? -Well-Being and Health in Independent and Interdependent Cultures.” The 1st MIDJA Research Seminar（University of Tokyo）2008.4.5. Uchida, Y., Kitayama, S., & Mesquita, B. “Culture, self, and friendship: Reciprocity monitoring in Japanese and American contexts.”（Symposium “Cross-cultural differences and similarities”）20th Annual conference, Human Behavior & Evolution Society（Kyoto University）2008.6.7.

内田由紀子「文化心理学実験の基礎:『比較』を考える」実験社会科学サマースクール（早稲田大学）2008.9.8.

内田由紀子「サポートの授受における文化心理学的パースペクティブ」（ワークショップ「文化と進化とこころの未来」口頭発表およびワークショップ企画（共同企画者:平石界, 京都大学こころの未来研究センター）日本心理学会第72回大会（北海道大学）2008.9.19.

内田由紀子「普及は心と心をつなぐ」（パネルディスカッション）普及事業60周年記念シンポジウム（近畿農政局, 和歌山）2008.10.2.

内田由紀子「日本文化における『思いやり』の他者理解から」（ワークショップ「文化と心の理論―比較文化研究データからみた日本の子どもの他者理解―」指定討論）日本教育心理学会第50回総会（東京学芸大学）2008.10.13.

内田由紀子「行動科学の文化心理学的パースペクティブ」京都大学大学院医学研究科平成20年度社会健康医学系専攻シンポジウム「公衆衛生, 臨床医学と社会科学」（京都大学）2008.10.25.

内田由紀子「文化心理学と行動遺伝学」（ワークショップ「社会心理学への行動遺伝的アプローチ」指定討論）日本社会心理学会第49回大会（鹿児島大学）2008.11.3.

石井敬子,内田由紀子（企画）自主企画ワークショップ「文化と認知研究の

鎌田東二「書評　久保田展弘『原日本の精神風土』」『日本経済新聞』2008年8月3日.

鎌田東二「書評　山折哲雄『空海の企て』」『時事通信配信』（京都新聞など地方紙各社掲載）2008年11月22日.

鎌田東二「コラム　若者観察室　聖地歩行文化を考える」『毎日新聞』2008年12月2日夕刊文化欄.

鎌田東二「書評　川村湊『闇の摩多羅神』」『日本経済新聞』2009年1月11日.

鎌田東二「書評　高橋睦郎『遊ぶ日本』」『週刊読書人』2009年1月23日. 鎌田東二「鎌田東二と巡る鎌倉・江ノ島の『聖地歩行』」『死ぬまで1回一度は行きたい日本の聖地』（ムック本）洋泉社, 2009年3月.

鎌田東二「書評　木戸敏郎『若き古代』」『Aube　比較藝術学』2009年3月, 第4・5合併号,121～125頁,京都造形芸術大学比較藝術学研究センター. 鎌田東二（ラジオ出演）「京都東山で心を磨く」『宗教の時間』NHKラジオ第二放送, 2009年2月15日（2月22日再放送）.

鎌田東二（映画製作）,大重潤一郎監督『久高オデッセイ　生章』東京大学理学部小柴ホール初上映.2009年3月7日.

久保（川合）南海子（助教）

論文

伊藤祐康,久保（川合）南海子,正高信男「日本人の掛け算九九の実行プロセスについての実験的検討」『認知科学』2008, 15（2）, 280-288.

川合伸幸,久保（川合）南海子「ヒトと動物の回顧的推論について」『認知科学』2008, 15（3）, 378-391.

福島美和,久保（川合）南海子,正高信男「学習に困難を伴う子どもの療育プログラムとそれに伴う認知機能,脳機能の変化について」『発達障害研究』2008, 30（3）,185-194.

久保（川合）南海子,坂田陽子「顔刺激からの注意の解放における加齢の影響」『発達心理学研究』2009, 20（1）, 12-19.

一般雑誌記事

久保（川合）南海子「老齡ザルからみた記憶の変化」『心理学ワールド』2008, 42, 17-20.

翻訳著書

久保（川合）南海子「第12章　健常なエイジングにおける言語の理解と産出」,山本浩市,藤田綾子監訳『エイジング心理学ハンドブック』北大路書房, 2008, 261-287.（J. E. Birren & K. W. Schaie（Eds.）Handbook of the Psychology of Aging.）

学会発表

久保（川合）南海子「忘れること, 忘れないこと―老齡ザルの認知研究から―」近未来チャレンジセッション「認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」第22回人工知能学会全国大会（旭川）2008.6.

番浩志（助教）

論文

Takahashi,S., Ban,H., Ohtani,Y., Sawamoto,N., Fukuyama,H., Ejima,Y., “Neural mechanisms for perceptual permanency: an fMRI study of the tunnel effect.” Gestalt Theory, 2008, 30, 39-51.

著書

Yamamoto,H., Ban,H., Fukunaga,M., Umeda,M., Tanaka,C., Ejima,Y., “Large- and Small-Scale Functional Organization of Visual Field Representation in the Human Visual Cortex.” In: Portocello T. A. and Velloti R. B. editors. Visual Cortex: New Research. New York: Nova Science Publisher. 2008.

講演

番浩志「視覚文脈が低次視覚野活動に及ぼす影響:fMRIによる可視化法」知覚コロキアム（福岡）. 2009年3月20日～22日.

Ban,H., Watabe,M., “Trust Information Processing in Human Brain: an fMRI Study.” Center for the Socieliaty of Mind International Conference “Cultural Neuroscience” Hokkaido University, Sapporo,

Perspectivesthe. Third Multidisciplinary Academic Conference of the International Association for Analytical Psychology in Zurich, 2008.7.3-5.

田中美香,河合俊雄,金山由美,桑原晴子,山森路子「パウムテストからみたパセドウ病患者の心理的特徴―カウンセリング群とコントロール群の比較研究―」『日本心理臨床学会第26回大会発表論文集』2008.

河合俊雄「甲状腺疾患患者の語り：病の自己性と他者性」『シンポジウム病と臨床―病に生きる人間にみる臨床の知』大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」（共催,京都大学）2008.11.17.

田中美香,河合俊雄,金山由美,桑原晴子,梅村高太郎,長谷川千紘,鍛冶まどか,谷垣紀子,深尾篤嗣,窪田純久,深田修司,宮内昭「甲状腺疾患患者の心理的特徴―2種類の心理テストによる比較研究―」第51回日本甲状腺学会. 2008.11.22.

テレビ出演

河合俊雄「にっぽん巡礼:こころに響く百の場所」NHK・BSハイヴィジョン, 2009年3月22日放送.

鎌田東二（教授）

論文

鎌田東二「宮沢賢治の作品に見られる<心>」『大法輪』2008年5月号, 124-129頁, 大法輪閣.

鎌田東二「柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術」『京都造形芸術大学紀要 Genesis』2008年11月, 第12号, 128-138頁, 京都造形芸術大学.

鎌田東二「異界の旅と東山修験道」『彷徨』2009年1月号,2-5頁,彷徨社. 鎌田東二「京都,平安京と聖地霊場」『月刊京都』2009年2月号, 28-32頁, 白川書院.

鎌田東二「和回帰と神仏巡礼道文化ルネサンス」『ハイライフ』2009年2月, 第11号, 8-9頁, 財団法人ハイライフ研究所.

鎌田東二「神の食――神饌における祈りとエロスと美」『Aube 比較藝術学』2009年3月, 第4・5合併号, 18-32頁, 京都造形芸術大学比較藝術学研究センター.

鎌田東二「言葉とモノとワザとこころ」『モノ学・感覚価値研究』2009年3月, 第3号, 4-12頁, 京都大学こころの未来研究センター.

鎌田東二「日本の医書と医療神・オホナムチ」『地球人』2008年10月, 第12号, 64-69頁, ビイング・ネット・プレス.

著書

鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版, 2008年9月.

細野晴臣,鎌田東二『神楽感覚』作品社, 2008年10月.

河合俊雄,鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版（朝日新書）, 2008年11月.

鎌田東二監修『神様に出会える聖地めぐりガイド　ものがたり「古事記」併録』朝日新聞出版, 2009年3月.

鎌田東二「河合中空構造論と権力と脱権力のあわい――トリックスター知の再考」,日本ユング心理学会編集委員会編『ユング心理学研究』（第1巻特別号　日本における分析心理学）, 50-75頁, 創元社, 2009年3月.

学会発表

“A Study of Relationship between Shinto and Japanese Buddhism.” The XXII World Congress of Philosophy, Seoul University. 2008.8.1.

鎌田東二講演「保育と聖地歩行」. 世界哲学会議　ソウル大学人体科学会「いま,なぜ『リクリエイト歩行文化』なのか―歩育と歩行」人体科学会第18回大会公開シンポジウム, 関西大学. 2008.11.23.

新聞、インタビュー、ラジオ出演、映画制作

鎌田東二「福来友吉①～③」『中外日報』2008年4月1日, 3日, 8日, 中外日報社.

鎌田東二「河野省三①～③」『中外日報』2008年5月15日, 20日, 22日, 中外日報社.

るトラブルと民族集団間関係—プランテーションをめぐるバカ、ピグミー、ハンツ—系住民　バクエレ、ハウサの三角関係—」日本アフリカ学会第45回学術大会講演（ポスター発表）、龍谷大学、2008.5.24-25.

大石高典「フィールドの映像記録に見る研究者 = 《私》の「生態」:カメルーン共和国ドンゴ村における6年間の映像資料の分析から」日本文化人類学会第42回研究大会分科会「映像実践にもとづくフィールドワーク論の構築に向けて」講演（口頭発表）、京都大学、2008.5.31.

大石高典「モノノケの民族生態学」猿田彦大神フォーラムおひらきまつり第10回みちひらき助成研究発表会、猿田彦神社（三重県伊勢市）、2008.10.13.

大石高典「撮ることと撮られること:フィールドの映像記録に見る調査者と被調査社会の相互作用」京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」ワークショップ『撮るものと撮られるものの関係性——事実と物語の生成的関係をめぐって』京都大学芝蘭会館（京都市）、2008.11.5.

国際映画祭への映像作品出品

'Bisso na Bisso (Among us) : Gathering, Catching, Hunting, Filming and Beyond in Ndongo village' at “Documentary Film Festival on Japanese Society, and Visual Anthropology” on February 24th, 2009, Théâtre Monnot, Université St. Joseph, Beyrouth, Lebanon.

学術研究会・シンポジウム企画、開催

新井一寛・大石高典企画、司会、話題提供、公開シンポジウム「映像作品制作と地域の論理・倫理—自然を撮る、人を撮る、かかわりを撮る—」主催:『仮想地球』研究会、京都大学芝蘭会館（京都市）、2008.6.7.

大石高典企画、司会、公開シンポジウム「マツタケがなくなぐ世界」主催:京都大学マツタケ研究会、共催:こころの未来研究センター（京都大学）2008.9.20.

有田恵（特定研究員）

論文

高橋恵子, 平井美佳, 有田恵, 菅原育子「発達研究における中・高年者のデータの持つ意味」『日本発達心理学会第19回大会発表論文集』1019（追手門学院大学, 大阪市）2008.3.19-21.

有田恵「〈質〉の層—意味とモデル化—」『日本質的心理学会第5回大会発表論文集』73-74（つくば大学, つくば市）2008.11.29-30.

有田恵「子どもの死と死生学」, 武田鉄郎編, 科学研究補助金基盤研究B「小児がん等のターミナル期にある子どもの教育内容・方法に関する国際比較研究」（2009年3月刊行予定, 印刷中）.

有田恵「死と生涯発達心理学」, 武田鉄郎編, 科学研究補助金基盤研究B「小児がん等のターミナル期にある子どもの教育内容・方法に関する国際比較研究」（同上）.

学会発表・企画等

平井美佳・有田恵・菅原育子（発表）「発達研究における中・高年者のデータの持つ意味」『日本発達心理学会第19回大会自主シンポジウム』2008.3.19-21.

大倉得史, 有田恵（企画・発表）「変化を問う質とは何か—モデル化できる質、できない質—」『日本質的心理学会第5回大会自主シンポジウム』（つくば大学, つくば市）2008.11.29-30.

有田恵（講演）「終末期における児童・生徒への教育的支援—らしさを支えるとは」桃陽特別支援総合学校教員研修会（桃陽特別支援総合学校, 京都市）2009.9.18.

有田恵（指導助言者）「訪問教育—訪問教育の今後のあり方—」『全日本特別支援教育研究連盟全国大会第47回大会』京都市大会第21分会（桃陽特別支援総合学校, 京都市）2008.10.30.

有田恵「臨床現場と理論をつなぐ研究者」平成20年度第9回死生学演習　臨床死生学・倫理学研究会（東京大学, 東京）2008.12.18.

有田恵「生涯発達から捉える死」タナトロジー研究会（岡部医院, 仙台市）2009.1.16.

畑中千紘（特定研究員）

論文

高嶋雄介, 須藤春佳, 高木綾, 村林真夢, 久保明子, 畑中千紘, 山口智, 田中史子, 西嶋雅樹, 桑原知子「学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴」『心理臨床学研究』2008.26（2）,p.204-217.

Tomoko KUWABARA, Haruka SUDO, Chihiro HATANAKA, Masaki NISHIJIMA, Kenichi MORITA, Chihiro HASEGAWA, Yasuhiro OYAMA, “A Study on the New Paradigm in Collaborations between Teachers and School Counselors,” *Psychologia*, 2008,51（4）.（3月発刊予定, ページ数未定）.

著書

畑中千紘「自閉的世界への他者の現れについて——アスペルガー症候群の老年期男性事例より」伊藤良子, 角野善宏編『京大心理臨床シリーズ7　発達障害と心理臨床』創元社、2009年3月発刊予定、p.172-181.

学会発表

畑中千紘「発達障害の女子中学生との箱庭療法事例」（事例発表）韓国箱庭療法学会（ソウル）2008.6.12.

畑中千紘, 桑原知子, 須藤春佳, 西嶋雅樹, 森田健一, 井上明美, 長谷川千紘, 宮嶋由布, 大山泰宏「学校現場における教師と心理臨床家の視点に関する研究Ⅳ—スイスとの国際比較から—」（研究発表）日本心理臨床学会第27回大会（筑波大学）2008.9.5.

長岡千賀（日本学術振興会特別研究員）

論文

長岡千賀, 小森政嗣「面接におけるカウンセラーの応答:話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究」『認知科学』, 2009, 16（1）, 24-38.

Nagaoka, C., & Komori, M., “Body movement synchrony in psychotherapeutic counseling: a study using the video-based quantification method,” *IEICE Transactions*, 2008, E91-D（6）, 1634-1640.

小森政嗣, 長岡千賀「ロボットに対する心理評価における社会的比較過程—ロボットのユーザへの選択的接近行動が好意評価に及ぼす影響—」『感性工学』, 2008, 7（4）, 807-814.

著書

中村敏枝, 長岡千賀「第3章　相互コミュニケーションにおける同調傾向」, 大坊郁夫, 永瀬治郎編『関係とコミュニケーション』（社会言語科学第3巻）, ひつじ書房, 80-99頁.

学会発表等

Nagaoka, C., Kuwabara, T., Watabe, M., & Yoshikawa, S., “Understanding the client in psychotherapy: What do counselors recall about their clients?” *ICCS 2008*（Seoul）, 2008.7.29.

長岡千賀, 前田恭兵, 小森政嗣「心理臨床面接における対話者の身体動作（1）—カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程—」日本認知科学会第25回大会（同志社大学）2008.9.7.

小森政嗣, 長岡千賀, 鎌田遼平「心理臨床面接における対話者の身体動作（2）—再起定量化分析によるカウンセラーの身体動作の検討—」日本認知科学会第25回大会（同上）.

長岡千賀, 桑原知子, 吉川左紀子, 小森政嗣, 渡部幹「心理面接における話者理解に関する実証的検討（4）—話者交替時のカウンセラーの言語的表現—」日本心理学会第72回大会（北海道大学）2008.9.21.

小森政嗣, 長岡千賀（話題提供）「カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程」ワークショップ『カウンセリング対話を科学する（2）—言語表現と非言語行動—（企画者:桑原知子）』日本心理学会第72回大会（同上）.

長岡千賀, 渡部幹（話題提供）「カウンセラーの相槌的表現」ワークショップ『カウンセリング対話を科学する（2）—言語表現と非言語行動—』日本心理学会第72回大会（同上）.

*本誌の刊行にはこころの未来基金から支援を受けました。

編集後記

こころを研究するのはむずかしいけれども、こころについて語り合うのはとても楽しい。語るうちに話が発展し広がってゆくのも、こころをめぐる対話の特徴かもしれません。学問は人間関係によって支えられている、という松本紘総長、自然科学としての言語学の可能性を語られた長尾真先生、その楽しそうなお話しぶりまでお伝えできることを願っています。そして充実した論考をお寄せいただいた先生がたに、深謝いたします。校正刷であることを忘れ、思わず読みふけてしまいました。(吉川)

第2号が年度内に発行できた。創刊号に劣らない充実した内容だ。五木寛之さんの巻頭言から始まり、現総長、元総長との対談と座談会、研究プロジェクトの紹介、連携する研究者の方々からの寄稿、それぞれに読み応えのある内容であると思う。これからも積極的に国内外・学内外の連携研究者の方々の論考を掲載していきたい。第3号は2009年9月発行予定。ご期待ください。(鎌田)

表紙をめくったらテレビや雑誌でお見かけする顔が……。読者の皆さまも、今回の巻頭言の執筆者には驚かされたのではないのでしょうか。かくいう私も、編集委員会で案が出たときには三信七疑でした。鎌田先生の人脈には驚くばかり。6人たどれば世界とつながると言いますが、この方がいれば3人ほどですみそうです。その五木寛之さんをはじめ、お忙しい中、ご執筆いただいた皆さまに感謝いたします。(平石)

余裕を持ってスタートしたつもりでも、最後はいつも慌ただしくなり、執筆者の先生方にまでハードなお願いをさせていただくことも多い。今回も同様だったが、みなさま快く協力してくださったおかげで第2号を刊行することができました。優れた研究者は人間的魅力に満ちあふれているということを再認識させていただいた松本紘総長、長尾真元総長をはじめ、お力添えいただいた先生方、関係者の方々に心より感謝申し上げます。(原)

こころの未来 ————— 第2号
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

発行日 2009年3月31日

発行 京都大学こころの未来研究センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学稲盛財団記念館内

電話 075-753-9670

FAX 075-753-9680

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

表紙写真 大石高典 (バショウの葉)
編集・制作 編集工房レイヴン 原 章
デザイン 薔草デザイン事務所 尾崎閑也
印刷 株式会社NPCコーポレーション

